金沢西部第二土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書６

金沢市

畝田東遺跡群Ⅱ

２００５

石　川　県　教　育　委　員　会

（財）石川県埋蔵文化財センター

金沢市

畝田東遺跡群II

2005

石　川　県　教　育　委　員　会

（財）石川県埋蔵文化財センター

北から全景

SK606・SD638

SE603

SE603

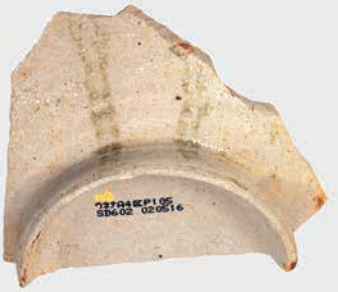
SE603　6 段目遺物出土状況

SE604

1

130

94



63

119

出土施釉陶器

131

133

132

135

134

136

139

140

出土仏教関係遺物

例　　言

1　本書は金沢市畝田東遺跡群の発掘調査報告書（６分冊のうち第２分冊）である。

2　本書で報告する遺跡は畝田ナベタ遺跡と畝田D遺跡であるが、両遺跡は近接しており一部で範囲も重なるため、包括して便宜的に「畝田東遺跡群」の名称を使用する。

3　本書ではA地区の主に古代遺構・遺物について報告する。

4　遺跡の所在地は金沢市畝田東２・３・４丁目地内、藤江北４丁目地内である。

5　調査原因は金沢西部第二土地区画整理事業であり、同事業を所管する県土木部都市計画課（金沢西部開発事務所）が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。

6　発掘調査は財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。

7　調査に係る費用は県土木部都市計画課（金沢西部開発事務所）が負担した。

8　現地調査は平成11（1999）年度～平成15（2003）年度に実施した。面積・期間・担当課・担当者は下表のとおりである。（下表）

年　度	平成11（1999）	平成12（2000）	平成13（2001）	平成14（2002）	平成15（2003）
期　間	平成11年11月24日～ 平成12年１月６日	平成12年４月26日～ 平成13年１月11日	平成13年５月10日～ 12月10日	平成14年４月22日～ 平成15年１月14日	平成15年９月24日～ 平成15年12月15日
面　積	400㎡	9,050㎡	16,200㎡	15,850㎡	1,906㎡
担当課	調査部調査第２課	調査部調査第４課	調査部調査第４課	調査部調査第４課	調査部調査第４課
担当者	岩瀬由美（主事） 和田龍介（主事）	白田義彦（主事） 布尾幸恵（嘱託）	岩崎英雄 （調査専門員） 滝川重徳（主任主事） 白田義彦（主任主事） 熊谷葉月（主事） 和田龍介（主事） 兼田康彦（主事） 金田哲也（講師） 布尾幸恵（嘱託）	伊藤雅文（課長） 岩崎英雄 （調査専門員） 冨田和気夫 （調査専門員） 安　英樹（主任主事） 熊谷葉月（主事） 和田龍介（主事） 兼田康彦（主事） 布尾幸恵（嘱託） 山田由布子（嘱託）	安　英樹（課主査） 渡邉大輔（主事）

9　出土品整理は平成13（2001）年度～平成15（2003）年度に実施し、企画部整理課と調査部調査第４課が担当した。

10　出土した木製品の樹種同定および出土した石製品の石材鑑定については㈱パレオ・ラボに委託して行った。また、スラッグ等については㈱JFEテクノリサーチ（旧川鉄テクノリサーチ）に委託して行った。

11　発掘調査報告書の刊行は第１・２・５分冊を平成16（2004）年度に実施し、調査部調査第４課が担当した。第３・４・６分冊は平成17（2005）年度に実施する予定である。

12　本書の執筆分担は下記のとおりである。編集は伊藤雅文（調査部調査第４課長）が行った。

第１章第３節：安　英樹（調査部調査第４課主査）

第２章第２節：安　英樹、白田義彦（調査部調査第２課主査）、和田龍介（調査部調査第２課主事）
上記以外：伊藤雅文（調査部調査第４課長）

13　発掘調査には下記の個人、機関の協力を得た。
県土木部都市計画課、金沢西部開発事務所、金沢市教育委員会、金沢市埋蔵文化財センター、大藤雅男、久保智康、平川　南、福田弘光、四柳嘉章、山川史子（敬称略）

14　調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。

15　本書についての凡例は下記のとおりである。

⑴　方位は座標北であり、座標は建設省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠した。

⑵　水平基準は海抜高であり、T.P（東京湾平均海面標高）による。

⑶　遺構は略号で表記する。主なものはSB（掘立柱建物跡）･SI（竪穴建物跡）･SE（井戸跡）･SD（溝・大溝）･SK（土坑）･SX（落ち込み／不明遺構）･P（穴）等である。略号になじみにくいものは漢字でそのまま表記するものとした。番号の振り方については第１分冊を参照されたい。

⑷　遺構挿図の縮尺は原則として１/50、遺物挿図の縮尺は１/３である。

⑸　古代遺構・遺物の時期は、北陸古代土器編年軸（北陸古代土器研究会・石川考古学研究会 1988『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』）に基づく。暦年代観は、以降の研究の進展により研究者間に生じた若干のずれを含めて（北陸古代土器研究会　2000『シンポジウム古代の須恵器貯蔵具Ⅱ―貯蔵具の制作技術を復元する―』　例言）概ね以下のように定める。

Ⅰ期（$Ⅰ_1$・$Ⅰ_2$）：７世紀初頭～中頃
Ⅱ期（$Ⅱ_1$～$Ⅱ_3$）：７世紀後半～８世紀初頭
Ⅲ期：８世紀第２四半期頃
Ⅳ期（$Ⅳ_1$・$Ⅳ_2$古・$Ⅳ_2$新）：８世紀中頃～９世紀初頭
Ⅴ期（$Ⅴ_1$・$Ⅴ_2$）：９世紀前半～９世紀第３四半期頃
Ⅵ期（$Ⅵ_1$～$Ⅵ_3$）：９世紀中葉～10世紀中葉前後
Ⅶ期（$Ⅶ_1$・$Ⅶ_2$古・$Ⅶ_2$新）：10世紀後葉～11世紀中葉前後

⑹　出土遺物番号は挿図と写真で対応する

⑺　注・文献は執筆分担の末尾に付けた。

目　　次

第１章　遺跡の位置と環境 …… 1
第１節　地理的環境 …… 1
第２節　歴史的環境 …… 2
第３節　遺跡の概観 …… 7
第２章　経緯と経過 …… 12
第１節　調査の経緯 …… 12
第２節　現地調査の経過 …… 12
第３節　出土品整理 …… 20
第３章　調査の概要 …… 22
第４章　遺構と遺物 …… 25
第１節　建物跡 …… 25
第２節　井戸跡 …… 29
第３節　土坑 …… 36
第４節　溝 …… 43
第５章　まとめ …… 79

挿図目次

第１図　遺跡位置図……１
第２図　金沢周辺の地形区分……２
第３図　古代遺跡分布図……４
第４図　遺跡発見時の採集遺物……７
第５図　昭和59年度調査区の遺構と遺物
　　（増山1986から転載）……８
第６図　平成８年度調査区垂直写真……９
第７図　平成８年度調査の遺構と遺物１……10
第８図　平成８年度調査の遺構と遺物２……11
第９図　調査区位置図……14
第10図　調査風景……16
第11図　遺物整理風景(1)……20
第12図　遺物整理風景(2)……21
第13図　グリッド配置図……22
第14図　主要遺構配置図……23
第15図　調査風景……24
第16図　SB601実測図柱穴実測図……26
第17図　SB602実測図……27
第18図　SB603実測図……28
第19図　SE601・602実測図……32
第20図　SE603実測図……33
第21図　SE604・607・608実測図……34
第22図　廃棄土坑関係実測図……38
第23図　SK603・604遺物出土状況……39
第24図　SK606・SD638遺物出土状況……40
第25図　土坑実測図……41
第26図　SD601実測図……42
第27図　SD613・614・639実測図……44
第28図　条里区画溝（SD627・628）実測図……45
第29図　畝溝平面図・断面図抄……46
第30図　側溝状小溝平面図……47
第31図　調査風景……48
第32図　井戸・土坑出土土器(1)……49
第33図　井戸・土坑出土土器(2)……50
第34図　井戸・土坑出土土器(3)……51
第35図　溝出土土器(1)……52
第36図　溝出土土器(2)……53
第37図　溝出土土器(3)……54
第38図　溝・柱穴等出土土器……55
第39図　出土土製品(1)……56
第40図　出土土製品(2)、出土石製品……57
第41図　井戸出土木製品(1)……58
第42図　井戸出土木製品(2)……59
第43図　井戸出土木製品(3)……60
第44図　井戸出土木製品(4)……61
第45図　井戸出土木製品(7)……62
第46図　SE603出土遺物……63
第47図　SE603出土木製品A－１……64
第48図　SE603出土木製品A－２……65
第49図　井戸出土木製品(5)……66
第50図　井戸出土木製品(6)……67
第51図　SE603出土木製品(3)……68
第52図　SD602出土石製品……69
第53図　SK603・SE604出土石製品……70
第54図　SK603～606出土石製品……71

表目次

第１表　周辺遺跡地名表……６
第２表　現地調査総括表……18
第３表　調査工程表……19
第４表　土器観察表……72
第５表　土製品観察表……76
第６表　木製品観察表……77
第７表　石製品観察表……78
第８表　骨観察表……78

図 版 目 次

図版１　航空写真　北から南　南から海を見る
図版２　航空写真　A区全体
図版３　航空写真　条里区画溝内
図版４　航空写真　SB602と廃棄土坑関係
　　区画溝南
図版５　航空写真　畝溝群
図版６　SE601（東から）　SE602上面
図版７　SE602井戸枠出土状況　土層断面
図版８　SE602井戸枠構造　同細部
図版９　SE603井戸枠１段・２段目
　　遺物出土状況
図版10　SE603井戸枠２段目　同内部
図版11　SE602井戸枠５・６段目
　　６段目遺物の状況（上）
図版12　SE603井戸枠６段目遺物の状況（下）
　　同（最下）
図版13　SE603井戸枠６段目遺物の状況（最下）
　　井戸枠外漆器出土
図版14　SE604　井戸枠内部
図版15　SE604井戸枠　堆積状況
図版16　SE604完掘　SE607・608完掘
図版17　SK603～606検出状況　同完掘状況
図版18　SK603～606遺物出土状況
　　SK604遺物出土状況
図版19　SK606遺物出土状況
図版20　SD638遺物出土状況
図版21　Ａ５区全景　SB601
図版22　SD613・614　SD639
図版23　SD627・628
図版24　Ａ３区畝溝群
図版25　同畝溝群　溝拡大
図版26　出土遺物(1)
図版27　出土遺物(2)
図版28　出土遺物(3)
図版29　出土遺物(4)
図版30　出土遺物(5)
図版31　出土遺物(6)
図版32　出土遺物(7)

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

第１図　遺跡位置図

石川県は本州島日本海側のほぼ中央に位置し、能登半島が北に突き出る地理的な形状を呈している。台湾から北上して黄海へそして東へと流れる対馬海流が能登半島にぶつかるように流れて日本海の出口である千島海峡へと続くが、北からはリマン海流が流れ込む。それゆえ、海盆地形の日本海に暖流である対馬海流と寒流のリマン海流が交錯し、豊かな漁場となっている。海流の関係で朝鮮半島や山陰九州のみならず中国語やハングル文字のある日常生活の廃棄物が漂流してたくさん流れ着く。

南北に細長い石川県は、北部の能登半島では岩場が発達しているが、南部では砂丘が発達している。これは、能登半島では大きな河川が発達しないのに対し、福井県では九頭竜川、加賀では手取川や犀川という大河川があるために、砂丘の砂を供給する土砂の流出が顕著なことによる。この砂丘の発達は、気候の変動と大きく絡む。白山市（旧松任市）倉部の海岸沖２㎞に約6000年前の松の樹根が発見されている。少なくとも当時の海岸線は現在よりも沖にあり、やや冷涼な気候のために海水面が低下していたのであろうか。

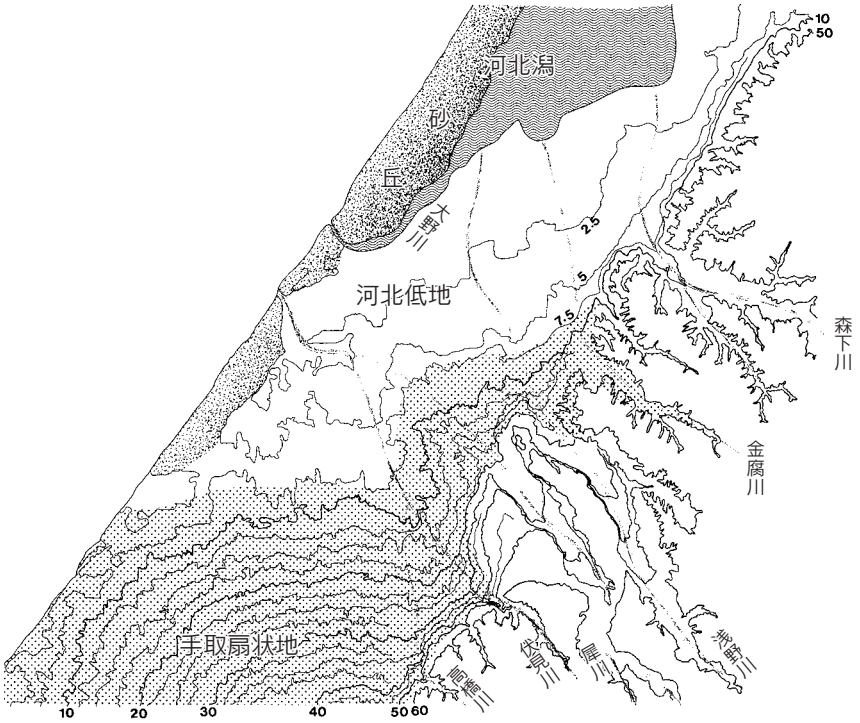
畝田ナベタ遺跡は、石川県金沢市の西部に位置し、海岸砂丘から約2.5㎞内陸に位置する。海岸には最大幅１㎞の砂丘があり、南には手取川が作り出した手取扇状地が広がり、医王山系から流れ出す河川によって作り出された平野部がその間に位置する。河川のうち浅野川や金腐川、森下川、あるいは砺波丘陵から南に流れる横山川や津幡川などが集まって大きな潟湖「河北潟」を作り出す。河北潟からあふれる水が南下して大野川となって日本海に注ぐ。

河北潟は汽水性の魚類（ボラなど）や貝類（ヤマトシジミ）が生息し、調査地を流れる大徳川にもボラの魚影を認めることができる。しかし、海との接続が非常に狭いことからか、淡水性の動物が顕著で河北潟を媒体にして遊漁するコイやフナが数多く生息するほか、水田用水にはメダカやタナゴなどが多く見られたが、近年の土地区画整理による大規模開発によってその生息の場が失われている。

大野川は砂丘の低いところに流れることとなるために、季節風などによって砂丘が変化することで、河口の位置が変わってくる。そのために、砂丘の後背が氾濫原となって湿地が河北潟にかけて広範囲に広がっている。この地域は、地下水の自噴地帯でもあり、江戸時代にはクリークが発達していたが、大正年間の耕地整理によってほとんどが埋め立てられてその面影を残すところはない。とくに、近世以降の新田開発がこの地に及んだためにこのようなクリークの風景が見られるようになったのであろうが、少くとも古代以来、後背湿地が水田可能な地として生活の場を提供している。

第２図は、手取扇状地から河北潟にかかる地形を、最新の国土地理院の地形図（縮尺１/25,000）「粟崎」「金沢」「松任」「金石」をもとに等高線を抽出したものである。地形図に示された等高線は、標高40m以下では2.5m間隔で示されており、これまでにない微地形を観察することができる。特に、標高10m以下の低地では地形の変化を知るのに重要な情報を得ることができる。

手取川が白山麓の狭隘な山間から平野に出る鶴来町を扇頂として典型的な扇状地を形成している。



第２図　金沢周辺の地形区分（S＝１／200,000）

手取川は、古くは北に流れを向けていたのが次第に南に流れを変えて現在の位置におさまっているという。手取扇状地は、現在の川北町、白山市（旧松任市）および野々市町の区域に当たり、扇状地ゆえに保水性に乏しく古代になるまで開発が低調であった。

手取扇状地と砂丘との関係はよくわからないが、扇状地形の上に砂丘が覆っているものと想定される。しかし、現在の倉部から東相川にかけて標高2.5mの等高線が内側に入り込み、窪地のような状況を示すことから、扇状地末端には砂丘との関わりで複雑な地形を呈する部分があったのであろう。もちろん砂丘は生き物である。時代とともにその大きさが変化し、位置も変わることは、金沢市普正寺遺跡が砂丘下から発見されたことからもよくわかる。

微地形を良く見ると、犀川の現在の流れが、地形的に高いところのほぼ中央を流れており、あたかも小さな扇状地のように高まりがのびている。これは卯辰丘陵から小立野台地、野田山山麓にかかる丘陵が河北低地部まで及び、それを犀川と浅野川が分断している状況である。地理のほうでは犀川の扇状地を認めていないが、犀川の現在の流れが扇形に広がる地形の最も高い部分を流れていることから、沖積作用による土砂の堆積も少なからず認め、小さな扇状地形と理解できないだろうか。

そして、浅野川は丘陵の北端に流れており、手取扇状地形との境に高橋川と伏見川が流れていることがわかる。高橋川と伏見川の合流地点は、まさに手取扇状地扇端と小立野台地の丘陵との接点にあたる。犀川は暴れ川として有名なのは、これら二つの川の流れの間に位置する丘陵上を流れるためである。現在は伏見川と合流しているものの、合流せずに北に流れていた可能性もある。

それは、開削時期のよくわからない大野庄用水や鞍月用水が犀川の支流を整備したものの可能性が高く、大徳川もまた犀川から分流して北に流れるのもそうだろう。標高2.5mの等高線を見ると、犀川伏見川合流地点北東に浅い谷地形があり、ここに犀川本流が流れていた時期も想定できるのである。したがって、犀川と大野川が合流していてもなんら不思議はないのである。

第２節　歴史的環境

畝田ナベタ遺跡の位置する地域は、前節で見たように砂丘の後背湿地に位置し、しかも潟湖にも通じることができる小河川が発達するという特色がある。このような地理的な特色がこの地域の歴史的特質に大きな影響を与えている。

縄文時代の遺跡は非常に少ない。これは、この地域が砂丘の後背湿地であったこととともに弥生時

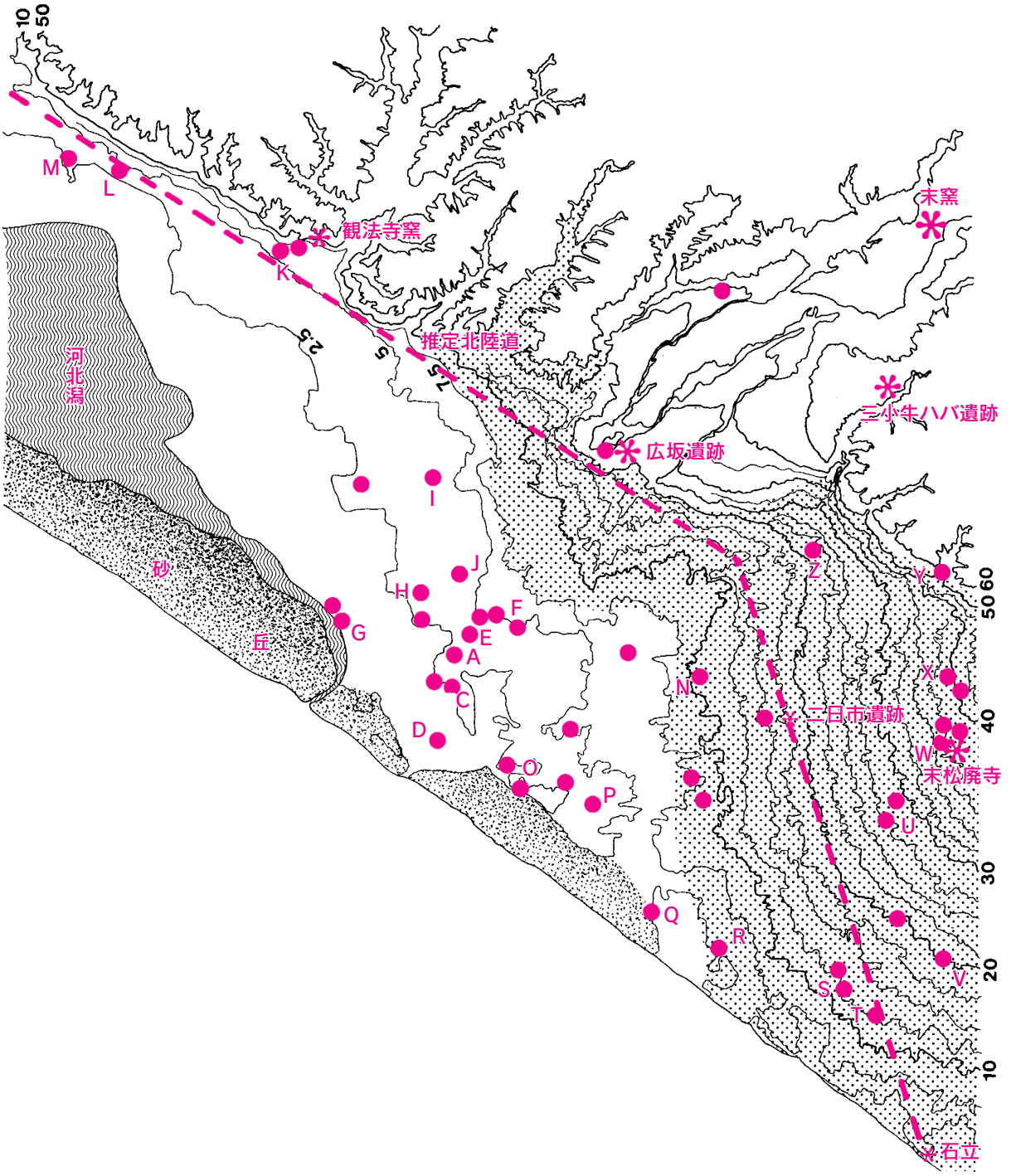
代の遺構が立地する地山の形成時期とも絡んでいる。藤江C遺跡では縄文時代後期後葉の建物４棟を確認している。遺構の状況から東西20m、南北20mの約400㎡程度の広がりを持つ集落で、建物配置から、同時存在は２棟である。石冠などの呪具や石製垂飾が出土しているものの面積あたりの出土量が金沢市新保本チカモリ遺跡や米泉遺跡に比べて少ないこと、打製石斧や磨製石斧が一定量出土し、１家族程度の小さなグループが集落を形成していたと考えられる。花粉分析では、周囲にはササ類やイネ科やイヌビエ、エノコログサ属が生えていたと推測している。畝田・寺中遺跡でも縄文後期後半の遺物が出土し、このころに人間の足跡を残せるような環境になったと考えられる。それは、それまで低湿なために不安定な地盤であったこの地が、縄文時代の後期後半にいたって安定し、新たな生業の場が縄文人によって切り開かれたのである。生業の可能性として縄文農耕がある。近岡遺跡でイネの花粉が検出されたのは周知の事実だが、その理解には研究者ごとの違いがある。一般的には否定的な見解が多いが、九州の縄文農耕が後期までさかのぼっていることや、この地域における縄文集落の低地への進出傾向をしめす特異性をどのように理解していくか今後の課題である[1]。

縄文時代晩期から弥生時代前期の検出された遺構は非常に少ない。この時期の遺物は、弥生時代のベースとなる地層から出土するが、明確な遺構面として認識できない。むしろ、旧河道の肩に食いこむように遺物が出土し、遺構埋土がベースとよく似ているが炭粒を多く含むなどの土壌化が進んでおり、縄文後期とそれほど異ならない環境であったと推測でき、大きな集落を作ることができるほど広い土地の確保が難しいのである。この中にあって、この地域よりもやや山側にある西念・南新保遺跡が中期後半に集落形成を始め、この地域の中心的な弥生ムラに成長する。

周辺でもほぼ同時期に遺跡数が増え、西念・南新保遺跡との脈絡を持った遺跡であろう。よく見ると、西念・南新保遺跡に通じる水系に属する遺跡（磯辺運動場遺跡、南新保C遺跡、戸水C遺跡など）とそれより西に位置する大野庄用水・大徳川の水系（藤江B遺跡、藤江C遺跡、戸水B遺跡、畝田・寺中遺跡、畝田遺跡など）に分けられる。もちろん前者の遺跡のまとまりは、西念・南新保遺跡を拠点集落として衛星的な小集落が分散する状況である。南新保C遺跡出土の有鈎銅釧は拠点集落に搬入された希少な器物が周囲の集落に分配されたものであろう。この地域における弥生社会の分節化は、西から凹線文系土器を作る社会の技術や風習および器物を受け入れたためにおこった。換言すれば、新たな弥生社会の波及を全面に受け止める地域であり、河北潟という媒体をネットワークにした地域社会を構築したのである。おそらく、西念・南新保遺跡の果たした役割は、このネットワークの管理であり、能登や越中への分岐点としての結節点の構築である。

このような地域社会に変化が生じるのは、弥生終末期に入って西念・南新保遺跡がほぼ拠点集落の役割を終えているからである。しかしながら、前代に作られたネットワークは維持されたに違いない。それは、弥生終末期の津幡町七野墳墓群や七つ塚墳墓群、古墳初頭の宇気塚越古墳群や神谷内古墳群が、金沢から越中や能登に抜けるルート上にあること、そして七野墳墓群で北部九州に出土例のある素環頭刀子を出土し、宇気塚越１号墳で鑿頭鉄鏃を副葬し神谷内C12号墳で漢鏡を副葬するなど、特徴的な遺物が出土していること、これらのことから河北潟ネットワークが維持されていたことが推測できる。しかしながら、その維持・管理には大きな権力機構が存在したのではなく、小集団が互いに良好な関係を維持することによって成り立つのもであり、いわば互酬的な作用といえよう。

このような体制は古墳時代を通じて維持されるが６世紀代で大きく変化する。すなわち、より大きな政治体制の出現が予想されるのである。この地域の具体的な集落遺跡の動態は、はっきりと把握されているわけではないが、古墳前期後半以降は、藤江C遺跡とともに畝田・寺中遺跡でしか集落が認められていないのであり、それまでおおく営まれていた集落が姿を消すようである。さらに、金沢市



第３図　古代遺跡分布図

A	畝田ナベタ遺跡	J	西念遺跡	S	北安田北遺跡・平木遺跡
B	畝田遺跡	K	今町A遺跡・梅田B遺跡	T	法仏遺跡
C	畝田・寺中遺跡	L	大田シタンダ遺跡	U	三浦遺跡
D	金石本町遺跡	M	北中条遺跡	V	宮丸遺跡
E	藤江A・B・C遺跡	N	黒田遺跡	W	末松遺跡群
F	桜田・示野中遺跡	O	下安原遺跡	X	新庄遺跡群
G	戸水C遺跡・近岡遺跡	P	豊穂遺跡	Y	額谷ドウシンダ遺跡
H	大友西遺跡・戸水大西遺跡	Q	倉部遺跡	Z	馬替遺跡
I	千木ヤシキダ遺跡	R	東相川の遺跡群		

沖町遺跡で方形区画を持つ建物群が存在し首長居館の可能性が考えられていることや、畝田・寺中遺跡で手捏ね土器や玉類、木製祭祀具を廃棄した遺構が幾つか見つかり、それまでの集落内祭祀とは異なる状況がうかがえる。このことより、弥生時代終末期以来の比較的均質な地域社会であったのが、より大きな集団に成長していく過程と理解できよう。そして、推定長70mを越す吉原親王塚古墳に注目しなければならない。正確な時期はわからないが、６世紀中ごろと考えている。

金石本町遺跡は６世紀末ごろより建物群を機能させていく。本遺跡は、現在の犀川河口近くに位置して近隣に式内社である大野湊神社を擁し、港湾にかかわる機能があったものと推測できる。特徴的なのは、大型建物が多数存在しながら、建物主軸が北を指向することなく地形に左右されるように位置していることである。このことから、在地勢力のものといえるかどうか慎重に判断されなければならないが、いわゆる古代官衙的な建物配置ではない。

７世紀以降また集落の動態が活発になってくる。それとともに金沢の丘陵部である森本から金沢城付近にかけてもまた遺跡数が増えてくる。観法寺窯では須恵器とともに瓦も製作し、広坂遺跡に製品を搬入している。特に広坂遺跡は７世紀第３四半期の寺院跡と考えられているが残念ながらそれを証明する遺構は皆無であるので、寺院跡を前提にして考察するのは不適当である。このような動きは北加賀を中心に大きな政治体制が確立し、文献記事に見られる古代豪族の一端を垣間見ることができるのである。現在のように犀川が伏見川と合流しているとなると、金石本町遺跡の存在はネットワークが河北潟のみならず手取扇状地にかかる地域まで広がっていることを示す。手取扇状地の開発が、このような動きの中で理解できるとすれば、集落数の増大現象の理解が容易になろう。つまり、北加賀の古代豪族は地域ネットワークを掌握して基盤を作ったのである。小矢部や高岡、氷見と同じような構造の横穴墓が北加賀に多数作られ、その動態は北加賀と軌を一にするようであり古代砺波郡の活動には北加賀ネットワークを基盤としていると考えられる[(2)]。

このような豪族は浅香年木の研究によって道君であることが通説となっているが、その消長については問題が多い。特にその活動を古墳時代中期までさかのぼらせ「原ミチ氏」という存在を考え、その名の由来を白山信仰の禅定道に求める点などである。ここでは深く論及しないが、北陸の流通に深くかかわる氏族としての存在が大きいと考える。

さて、古代北陸道が平成15年度に行われた野々市町三日市A遺跡の発掘調査で検出され、そのルート論争にほぼ決着がつけられた。それは、現在の美川町比楽から海岸沿いのルートで白山市（旧松任市）石立まではほぼ定説となっていたが、その先が海岸ルートで大野川河口にくるのかそれとも野々市の内陸にルートがくるかである。海岸ルートは、戸水C遺跡などの古代港湾遺跡を重要視した見解だが、内陸ルートであったことは、物流における港湾施設が古代交通網の中で明確な制度的位置づけがなされていないことを示すのであろうか。

古代北陸道は、石立から三日市A遺跡を通りそこからまっすぐに延長させると、手取扇状地と野田山丘陵との境にあたる谷部に突き当たる。道の変換点が地形の変換点に当たるのである。そしてそのルート上に、末松廃寺という古代の拠点的な場所を通っていないが、一方広坂遺跡はそのルート上に乗るという違いをどのように解釈すればよいのであろうか。これはやはり古代の施設としての重要性の違いである。広坂遺跡は地域支配の政治的な拠点であり、古代氏族の拠点である。一方、末松廃寺は、７世紀以降の新興勢力の宗教施設にすぎないのである[(2)]。

渤海使の来着も、地域社会に大きな変動をもたらした。渤海使は加賀国に安置され、その一部が都に上るが多数の人々は安置場所に滞在となる。この地域の平安時代の集落遺跡の多くが９世紀代から10世紀のものであるのは、この動向と無関係ではあるまい。渤海国の人々の生活基盤を加賀の人々は

背負っており、そのための新たな経済活動が生まれたものであろう。もちろん、それまでのこの地域における流通というネットワークの枠組みが重要な要素であり、それゆえ柔軟に社会を対応させたものであろう。

以上、簡単に周辺社会の変遷を見てきた。弥生時代から古墳時代への変化に十分対応できなかった地域であったが、古墳時代後期・終末期になって古代氏族の統括によってリードされた。その領域はよくわからないが、古墳数の絶対的な少なさからすれば大きな氏族構成は見込めず、むしろ小さな中小豪族であろう。ただし、流通を掌握することによる経済基盤には注目しなければならない。

註

1. 伊藤雅文　2004　「石川県における縄文後晩期集落の特性」『石川県埋蔵文化財情報誌』12号
2. 伊藤雅文　2004　「古代への胎動」『金沢市史　通史編』1

第１表　周辺遺跡地名表

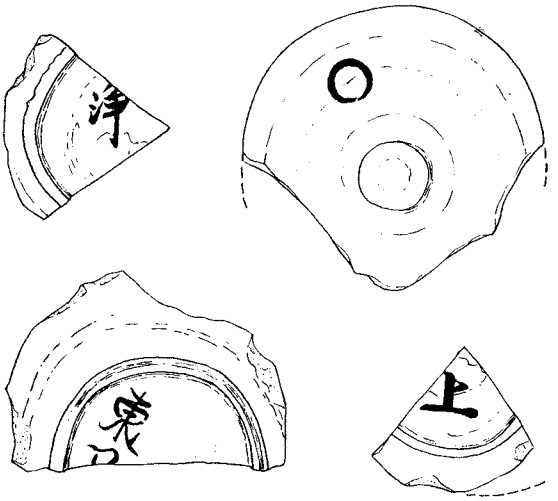
遺　跡　名	主な時代	参考文献
無量寺金沢港遺跡	縄文～古墳	
戸水C遺跡、戸水C古墳群	弥生・古墳・古代	県立埋文センター　1986　『金沢市戸水C遺跡』
		県立埋文センター 1993『石川県金沢市戸水C遺跡』
		㈶県埋文センター 2000『戸水C遺跡・戸水C古墳群（第９・10次）』
		㈶県埋文センター 2003『戸水C遺跡・戸水C古墳群（第11・12次）』
近岡遺跡	弥生・古代	県立埋文センター 1995『金沢市近岡遺跡』
		金沢市埋文センター 1998『近岡遺跡』
		㈶県埋文センター　2004　『近岡遺跡』
桂遺跡	弥生・古墳・中世	県立埋文センター 1985「金沢市桂遺跡」『県立埋文センター年報』５
無量寺B遺跡	古墳	金沢市教委1982『金沢市無量寺B遺跡』
		金沢市教委1984『額谷ドウシンダ遺跡・無量寺B遺跡』Ⅱ
		金沢市教委1986　『金沢市無量寺B遺跡』Ⅲ・Ⅳ
無量寺遺跡	古墳・中世	金沢市教委1983『金沢市無量寺遺跡』
普正寺遺跡	室町	石川考古学研究会1970『普正寺』
		県立埋文センター 1984『普正寺遺跡』
金石本町遺跡	古墳・奈良・平安	金沢市教委1996『金石本町遺跡』Ⅰ
		金沢市教委1996『金石本町遺跡』Ⅱ
		金沢市教委1996『金石本町遺跡』Ⅲ
		県立埋文センター 1997『金石本町遺跡』
寺中遺跡、寺中B遺跡	縄文・弥生・奈良・平安	金沢市教委1977『金沢市寺中遺跡―第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ次調査報告書―』
		県立埋文センター 1991『金沢市寺中B遺跡』
		金沢市教委1991『金沢市寺中B遺跡』Ⅰ
		金沢市教委1991『金沢市寺中B遺跡』Ⅱ
		金沢市教委1992『金沢市寺中B遺跡』Ⅲ
畝田・寺中遺跡 畝田遺跡 畝田大徳川遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉・室町	金沢市教委1984『金沢市畝田・寺中遺跡』
		県立埋文センター 1991『畝田遺跡』
		金沢市2003『畝田大徳川遺跡』
		金沢市2004『畝田・寺中遺跡』
畝田B遺跡	弥生・平安	㈶県埋文センター 2004『畝田B遺跡・畝田C遺跡・無量寺C遺跡』
		㈶県埋文センター 2003『畝田・無量寺遺跡・畝田B遺跡』
		金沢市2004『畝田B遺跡・畝田C遺跡』
畝田C遺跡	弥生・平安	㈶県埋文センター 2004『畝田B遺跡・畝田C遺跡・無量寺C遺跡』
		金沢市2004『畝田B遺跡・畝田C遺跡』
畝田・無量寺遺跡	弥生・古代	金沢市教委1983『金沢市畝田・無量寺遺跡』
		㈶県埋文センター 2003『畝田・無量寺遺跡・畝田B遺跡』
畝田ナベタ遺跡	古代	金沢市教委1986『金沢市畝田ナベタ遺跡』
戸水大西遺跡	弥生・古墳・古代	金沢市教委2000『戸水大西遺跡Ⅰ』
		金沢市教委2001『戸水大西遺跡』Ⅱ
戸水ホコダ遺跡	弥生・古墳	金沢市教委1999『戸水ホコダ遺跡』
大友西遺跡	弥生・古墳・古代	金沢市2001『大友西遺跡』Ⅰ
		金沢市2001『大友西遺跡』Ⅱ
		金沢市2003『大友西遺跡』Ⅲ
専光寺養魚場遺跡	弥生・古代	金沢市教委1992『金沢市専光寺養魚場遺跡』
		㈶県埋文センター 2004『石川県埋蔵文化財情報』12号
佐奇森遺跡	弥生・古代	金沢市教委1991『金沢市佐奇森遺跡』
		金沢市教委1994『金沢市佐奇森遺跡』Ⅱ
戸水B遺跡	弥生	県教委197　『金沢市戸水B遺跡調査報告』
		県立埋文センター 1992『金沢市戸水B遺跡―第４・５次調査―』
		県立埋文センター 1994『金沢市戸水B遺跡』
		㈶県埋文センター 2002『戸水B遺跡』Ⅱ
藤江C遺跡	縄文・弥生・古墳・平安	県立埋文センター 1997『金沢市藤江C遺跡』Ⅱ
		㈶県埋文センター 2000『藤江C遺跡』Ⅲ
		㈶県埋文センター 2000『藤江C遺跡』Ⅵ
		㈶県埋文センター 2001『藤江C遺跡』Ⅰ
		㈶県埋文センター 2002『藤江C遺跡』Ⅳ・Ⅴ
		㈶県埋文センター 2002『藤江C遺跡』Ⅶ
桜田・示野中遺跡	弥生・古代	金沢市教委1991『桜田・示野中遺跡』
藤江B遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	県教委1970『金沢市藤江B遺跡』
		金沢市教委1994『金沢市藤江B遺跡（第２次）』
		㈶県埋文センター 2001『藤江B遺跡』Ⅰ
		㈶県埋文センター 2001『藤江B遺跡』Ⅱ
		㈶県埋文センター 2001『藤江B遺跡』Ⅲ
		㈶県埋文センター 2002『藤江B遺跡』Ⅳ
藤江A遺跡	古代	

第３節　遺跡の概観

a　遺跡の発見

畝田ナベタ遺跡は、昭和42（1967）年、石川考古学研究会の福田弘光氏によって発見されている。当時の記録と所見は『大徳郷土史』に所収されており、それによれば「畝田遺跡」という名称で、「ナベタ」と通称される地点から比較的多くの遺物が採集されている。

遺物は土師器・須恵器が主体で、須恵器は杯身・杯蓋・盤・双耳瓶・壺等があり、墨書土器７点が含まれている。墨書は「○」・「上」・「浄」などが見られ、「東○」の可能性が高いものも含まれている（第４図）。土師器は黒色土器を含む椀・甕類があるという。



第４図　遺跡発見時の採集遺物（福田1970から転載、縮尺不同）

以上のような内容は、基本的に今回の発掘調査で出土した遺物にも共通するものであり、この時点ですでに畝田ナベタ遺跡の特色が一部、現れていたものといえる。

b　昭和59年度の調査

昭和58（1983）年には金沢市教育委員会が前述した遺物採集地点付近で、市道の改良工事に伴う埋蔵文化財分布調査を実施し、遺跡の分布を確認した。その際、町名の「畝田」と小字の「ナベタ」をとって「畝田ナベタ遺跡」という名称が公式に与えられている。

市道の改良工事では、遺跡の損壊が避けられない状況であったことから、金沢市教育委員会によって昭和59（1984）年度に発掘調査が実施された。調査期間は９月20日～10月18日・11月19日～12月６日、調査面積は約500㎡であった。その結果、掘立柱建物跡２棟、井戸跡１基、溝21条などが検出され、須恵器、土師器、木製品が出土した（第５図）。掘立柱建物跡は側柱構造で、２×２間と２×３間以上の規模となる。井戸跡は縦板組（横桟留）の井戸側が存在していた。これら遺構の年代は、出土した須恵器、土師器により、掘立柱建物跡が８世紀末頃、井戸跡が９世紀後半頃とされている。

昭和59年度の発掘調査地点は、おおむね今回の発掘調査区のA地区とB地区の中間に位置する。座標や基準が存在しないため、正確な位置の特定は不可能であるが、Ａ６区では昭和59年度調査で拡張された部分に存在した井戸跡らしき痕跡を確認しており、大まかな対照は可能である。遺構・遺物の年代は、今回の調査で明らかになった遺跡の存続年代の中で理解できるものである。

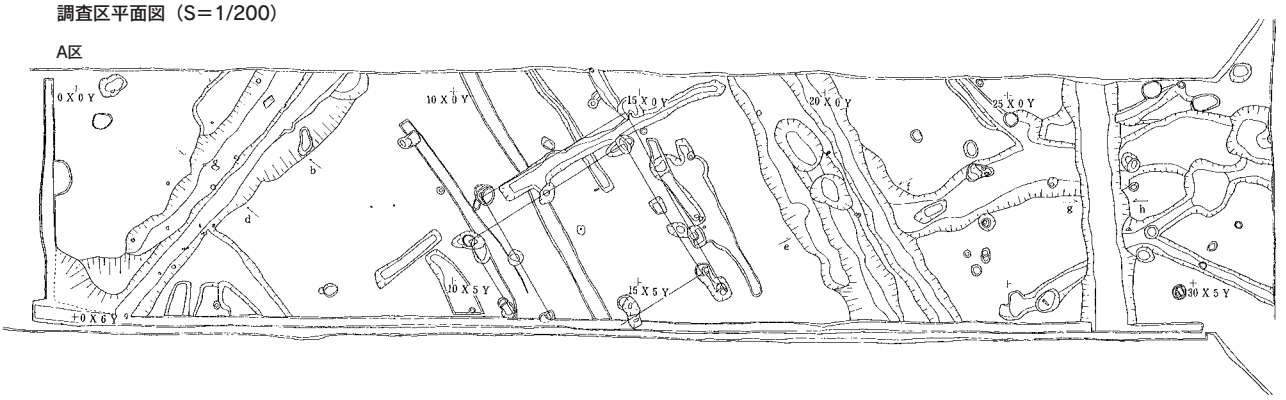
c　平成８年度の調査

平成８（1996）年度には県立金沢西高等学校の移転に伴い、石川県立埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施された。調査期間は10月14日～12月12日、調査面積は930㎡であった。その結果、溝数条、土坑数基などが検出され、須恵器、土師器、木製品が出土した（第７・８図）。

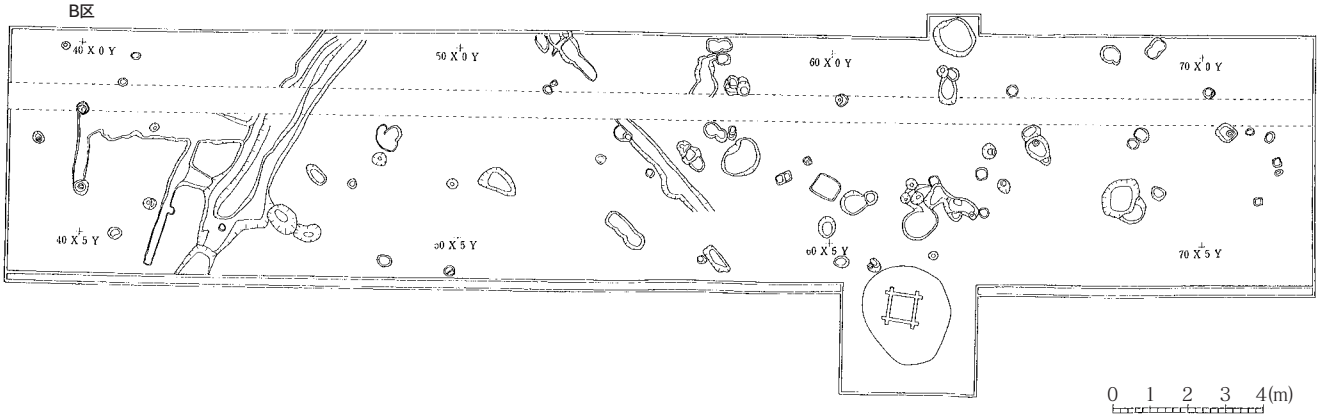
遺構としてはやや希薄な分布状況で、浅くて不定型なものが多く、その性格は明らかではない。調査区南部には四角形状の平面配置を見せる穴群や、P06など柱根（第７図８）を持つ穴が存在するが、

調査区平面図（S＝1/200）

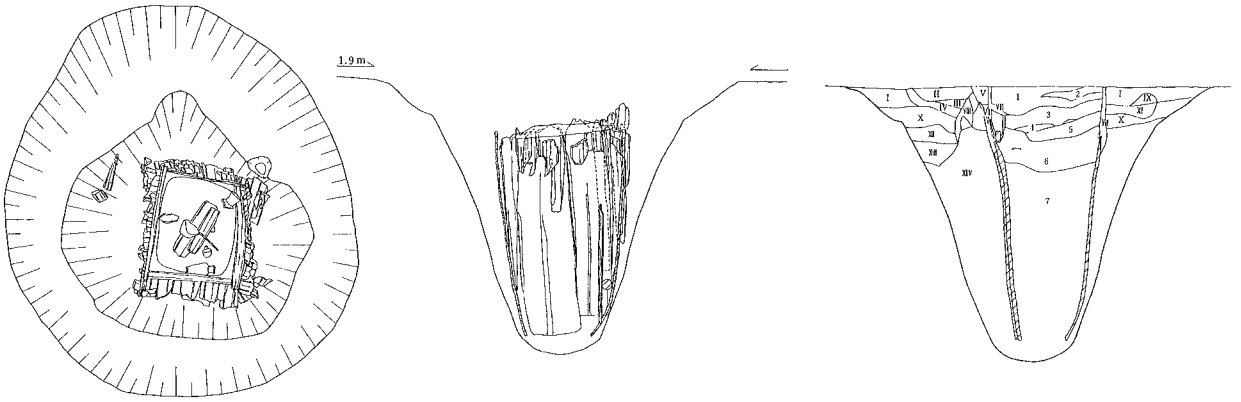
A区



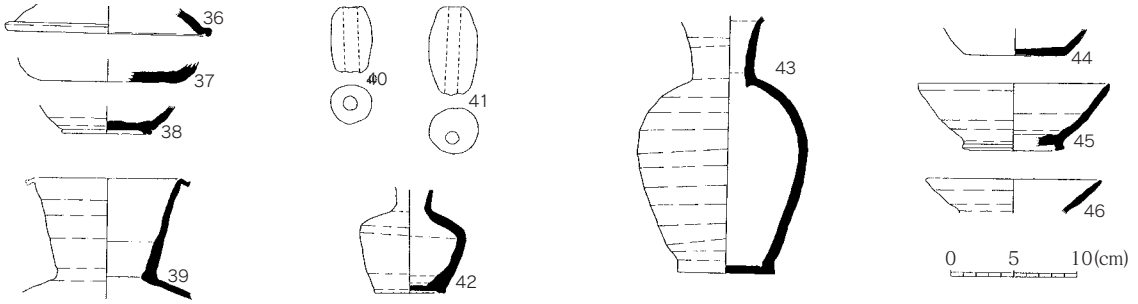
B区



井戸跡実測図（縮尺不明、S＝1/50か）



井戸跡出土遺物（S＝1/6）



第５図　昭和59年度調査区の遺構と遺物（増山1986から転載）

確実な建物跡としては復元できない。遺物も決して多くないが、遺構から出土したものにはP01の土師器（1）、SD07の須恵器（2）、SK04の須恵器（3・4）と土師器（5）、SX01の須恵器（6・7）があり、年代はおおむね9世紀代である。遺構外から出土した遺物は須恵器（9～27)、土師器（28～35)、珠洲焼（36)、土錘（37・38）がある。須恵器については、判読できないが墨書された無台杯(20）が見られる。須恵器と土師器は、遺構出土のものに比べやや時期幅が広く、8世紀代に遡るもの、10世紀代に降るものを含んでいる。

平成8年度の発掘調査地点は、今回の発掘調査区のB地区に接し、遺構が多い調査区南部はB7・11区とB12区の中間に位置する。遺構の分布はその北限・東限を示すものとして重要である。遺構・遺物の年代については、遺構外出土遺物の時期幅を含めても、今回の調査で明らかになっている遺跡の存続年代の中で矛盾なく理解できよう。

以上、既往の調査成果について簡単に紹介したが、今後は畝田ナベタ遺跡としての一体的な評価が必要であろう。

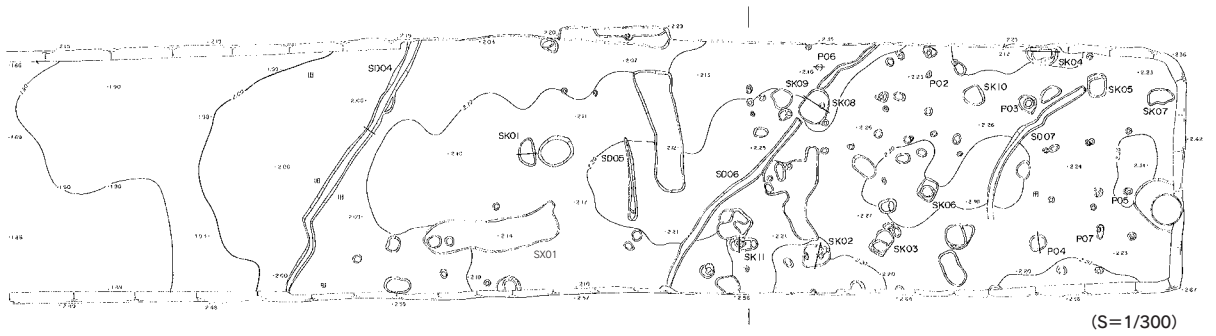
第6図　平成8年度調査区垂直写真

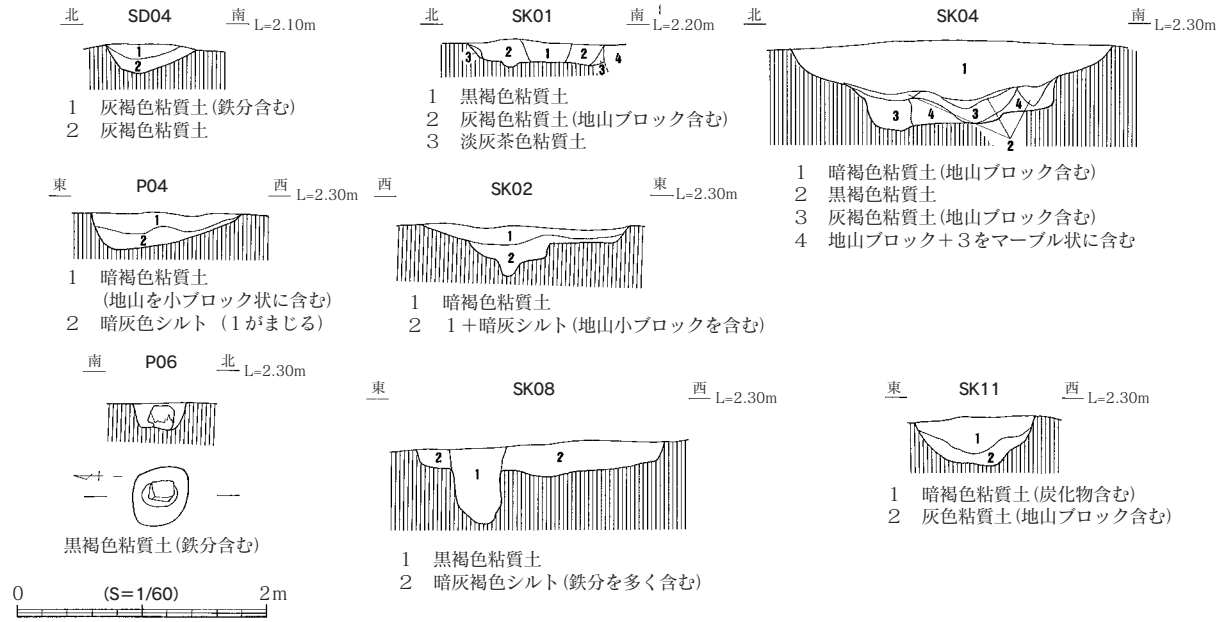
参考文献

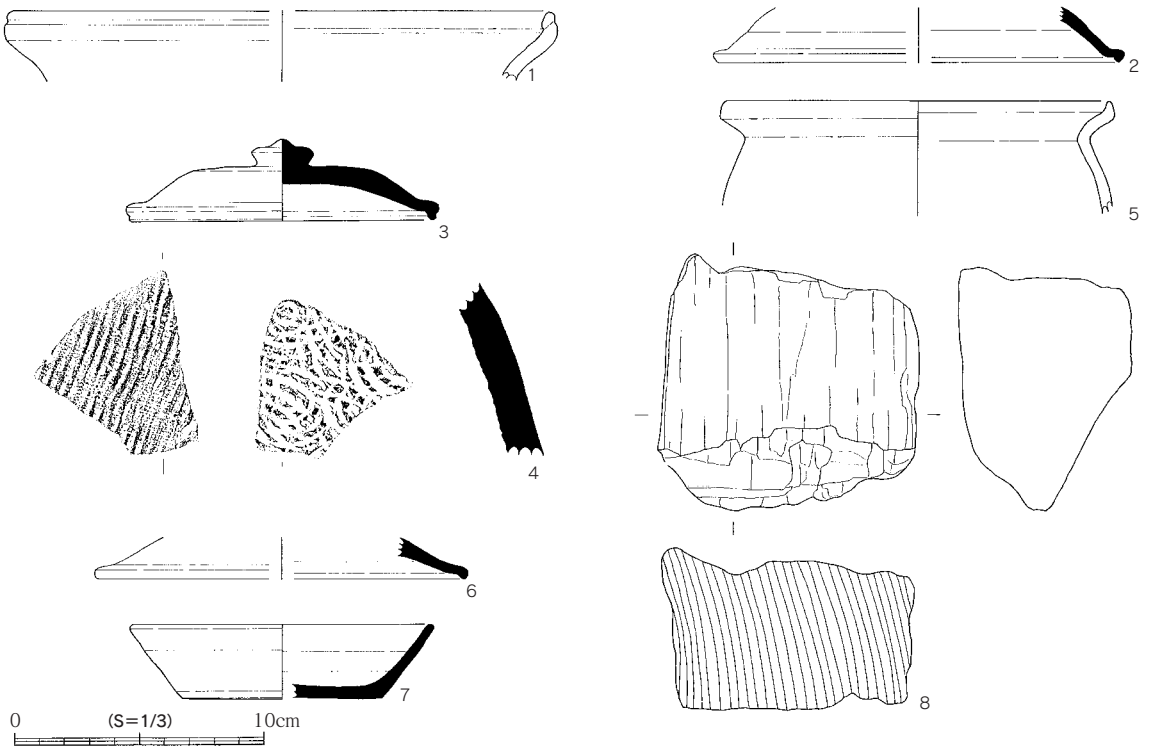
福田弘光　1970　『大徳郷土史』　大徳公民館

増山　仁　1986　『金沢市畝田ナベタ遺跡』　金沢市教育委員会

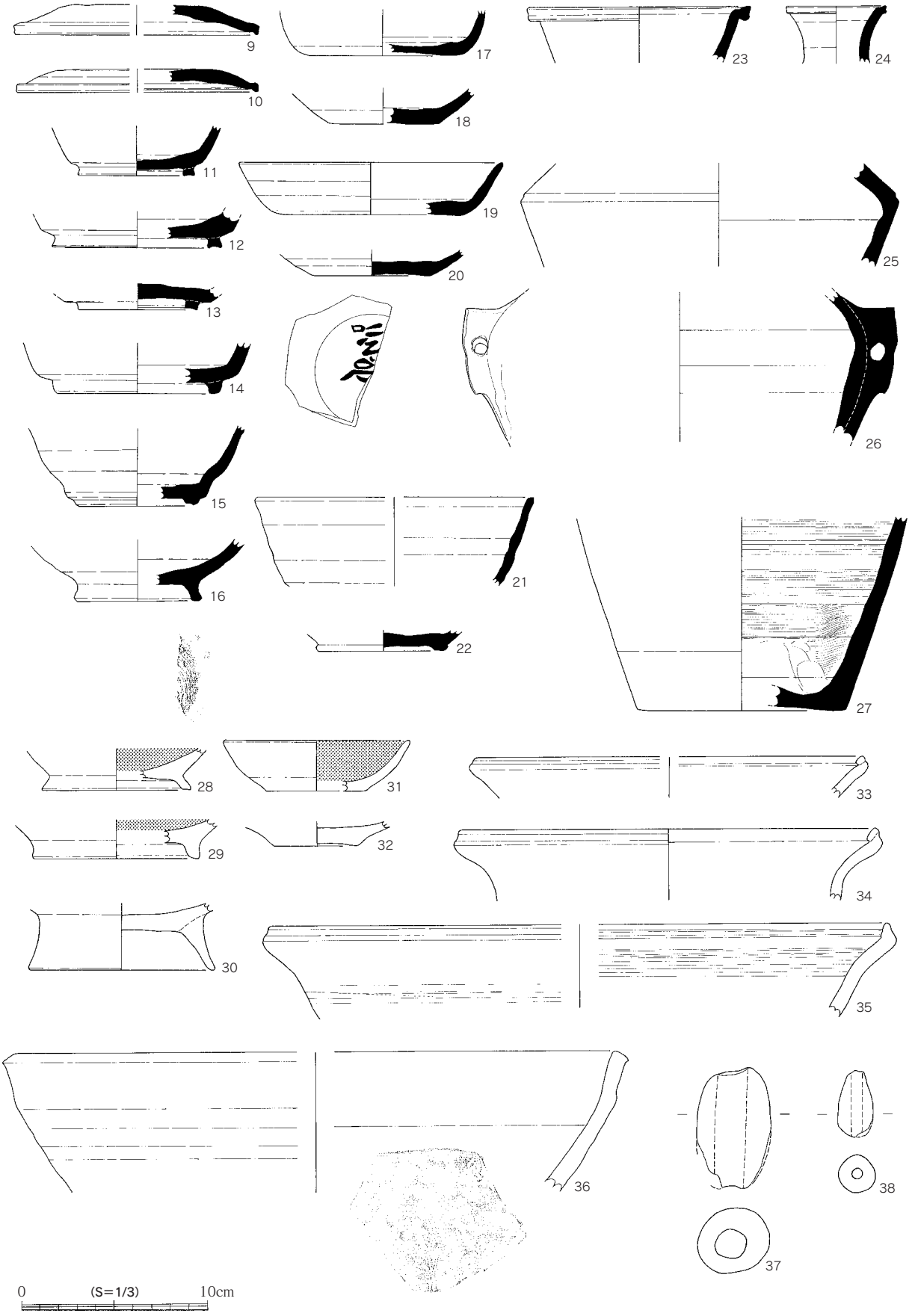
松浦郁乃　1997　「畝田ナベタ遺跡」『石川県立埋蔵文化財センター年報』第18号　石川県立埋蔵文化財センター







第７図　平成８年度調査の遺構と遺物１



第 8 図　平成 8 年度調査の遺構と遺物 2

第２章　経緯と経過

第１節　調査の経緯

金沢西部第２土地区画整理事業にかかる発掘調査の経緯は、『畝田･無量寺遺跡、畝田B遺跡』(2003)で詳述したので略述する。遺跡の有無の確認調査は平成９・10年度にわたって行われ、一部の未了地を残して遺跡の範囲をほぼ確定した。発掘調査は平成11年度から行った。開発事業が平成17年度完了のため、発掘調査報告書の完了から逆算して、年間３万㎡前後の調査を行うという工程であった。

なお、本書で報告する畝田東遺跡群は畝田ナベタ遺跡と畝田D遺跡からなっている。本章では、これら２遺跡の経過を述べる。

第２節　現地調査の経過

a　平成11年度

金沢西部第２土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査は本年より開始された。畝田・寺中遺跡他２遺跡、畝田B遺跡、畝田C遺跡、畝田・無量寺遺跡、無量寺C遺跡、畝田ナベタ遺跡の６箇所８遺跡、計18,000㎡（うち畝田ナベタ遺跡は2,200㎡）が当初の依頼面積である。県教育委員会との業務委託契約は平成11年４月１日付けで締結され、冬季を除くほぼ通年での現地調査が計画された。４月15日にセンター、県教育委員会文化財課、県金沢西部開発事務所担当者で現地打ち合わせが行われ、金沢外環状道路（海側幹線）の側道部分を最優先に調査を行ってほしい旨が相手方より提示され、該当する調査面積が最も広い畝田・寺中遺跡他２遺跡を主体として通年２班体制とし、畝田ナベタ遺跡を含む５遺跡は１班が通年で行うという基本方針となった。その際も側道部分を調査対象とする畝田B遺跡、同C遺跡、畝田･無量寺遺跡、無量寺C遺跡が優先され、畝田ナベタ遺跡は調査計画の最後に行われることとなった。

その後、畝田C遺跡の調査面積の拡張により担当班が計画通り畝田ナベタ遺跡の発掘に着手できなくなったことや、畝田・寺中遺跡の遺構密度・遺物出土量が当初の見込みを大幅に上回るものであったことから、９月に入りセンター・文化財課・金沢西部開発事務所の三者により全体の調査計画の見直しが行われた。その結果、畝田・寺中遺跡の完了を最優先事項とし、完了の目処がつき次第できる限り畝田ナベタ遺跡の調査を行うこと、畝田ナベタ遺跡の残面積については次年度以降に送ることで合意がなされた。

11月に入り畝田・寺中遺跡の年内完了の見込みがついたため、１班を割き都市計画道路部分の400㎡の調査を行うことで文化財課と調整し、11月24日に表土除去を行った。ここでも当初の見込みが大きく外れ､400㎡という狭小な調査区内に方形の大型柱穴が密集する事態に直面することとなる。12月４日に作業員を投入、調査区東側で遺物包含層が薄く遺存していたため手掘りで除去を進めたところ、多量の須恵器や「東〇」墨書土器、獣脚付円面硯片などが出土した。包含層下には建物群を区画する南北方向の溝が検出され、ここからも墨書土器等が出土している。遺構検出の状況から、建物群は何時期かに渡って建て替えが行われており、柱穴が複雑に重複していること、次年度以降の調査箇所にも拡がることが想定されたため本来であれば計画的な調査が望まれる遺跡であることが判明したが、調査期間の関係から建物復元等の詳細な検討は次年度調査に持ち越すこととし、検出された柱穴・土

坑等を半截・完掘・記録するという機械的な調査にならざるを得なかった。柱穴の多くに礎板が埋置されており、記録等も含め調査は難航したが、12月17日に完掘撮影を行い、一旦ブルーシートで養生、畝田・寺中遺跡に合流した。12月27日に空中写真測量を畝田・寺中遺跡と併せて行い、作業を完了した。

b　平成12年度調査の経過

平成12年度は畝田ナベタ遺跡の発掘調査が実施された。県教育委員会との業務委託契約は平成12年４月３日付けで締結され、冬季を除くほぼ通年での現地調査が計画された。４月20日にはセンター、県教育委員会文化財課、県金沢西部開発事務所担当者の三者で打ち合わせが行われた。調査の進め方としては、畝田ナベタ遺跡と隣接する畝田・無量寺遺跡の調査を並行して進めることになった。まず担当者の白田・布尾の両名で畝田ナベタ遺跡の調査に入り、その後どちらか一人が畝田・無量寺遺跡の調査に入る計画がたてられた。畝田ナベタ遺跡の宅地部分を調査対象範囲にするかどうかは検討事項として残されたまま調査に入ることになった。とりあえず、都市計画道路部分の調査を先行し、その間に宅地部分の扱いを決定するという方針のもとで調査に入った。その後の協議で、宅地部分の調査を行うことに決定した。

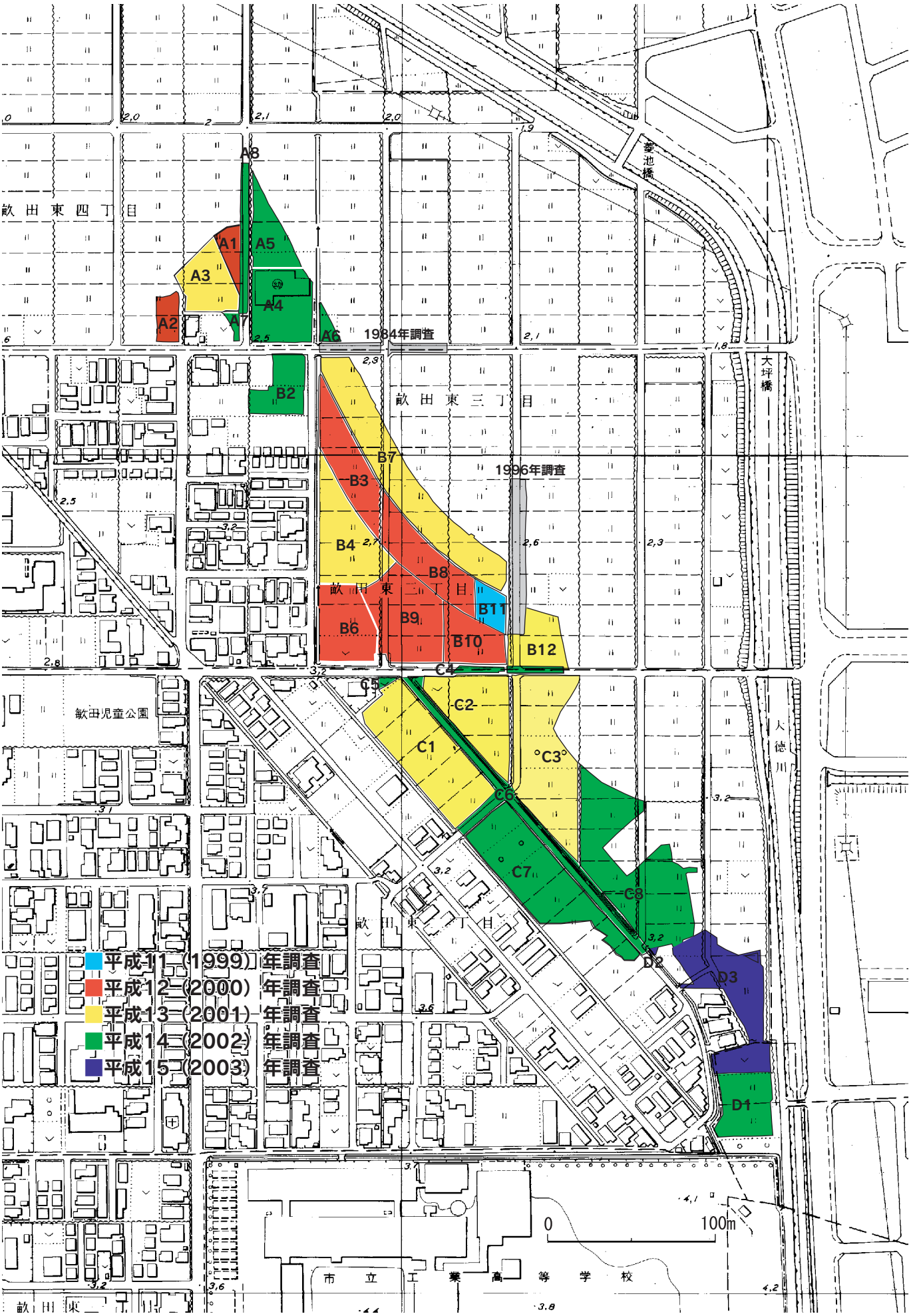
Ｂ８区の表土除去を５月10日～11日の２日間で行った。Ｂ８区の遺構検出、遺構堀り下げ作業を５月16日～同30日の間行った。畝田・無量寺遺跡の調査も５月から並行して行うことになっていたので、白田が畝田・無量寺遺跡の担当として５月17日～６月13日と少しあけて８月17日～30日の間は主に畝田･無量寺遺跡の調査を行った。Ｂ８区の調査を５月中にほぼ終えたので、Ｂ３区の表土除去を６月１日～２日に行った。Ｂ３区の遺構検出、遺構掘り下げ作業を６月５日～７月７日にかけて順次行った。Ａ１・２区の表土除去を７月11日～12日にかけて行った。Ａ１・２区の調査は布尾が担当した。Ａ１・２区の遺構検出、遺構掘り下げ作業を７月12日～８月１日にかけて順次行った。Ｂ３・８区、Ａ１・２区の空中写真測量を８月９日に行った。

次の調査箇所について協議の結果、Ｂ９区を排土置き場とし、Ｂ６･10区の調査を並行して行うこととなった。Ｂ６区は主に布尾が担当し、B10区は主に白田が担当した。Ｂ６・10区の表土除去を８月21日～23日にかけて行った。B10区の遺構検出、遺構掘り下げ作業を８月25日～10月17日にかけて順次行った。

B10区の調査のめどがたった時点で、Ｂ９区の調査を同年度に行うかどうかの協議がもたれた。協議の焦点は年末までにＢ９区の調査を終了させ、Ｂ６・９・10区の空中写真測量を同年度にできるかどうかであった。協議の結果、日程的にやや厳しかったが、Ｂ９区の調査を行うことに決定した。Ｂ９区の調査は主に白田が担当した。Ｂ９区の表土除去は10月18日から行い、表土除去終了後、順次遺構検出、遺構掘り下げ作業を行った。

B10区の空中写真測量を10月26日に行った。B10区のみで行った理由は、Ｂ６・９・10区を同時に行うには面積が広いことと、Ｂ９区の調査終了予定が12月末になり天候が悪くなってくるので、最後の空中写真測量の負荷をできるだけ少なくするようB10区、Ｂ６・９区と２回に分けて行うことにしたからである。

Ｂ９区にはＢ３区から続く旧大野庄用水が検出され、古代の遺構はこれにより切られていたため、遺構密度は比較的低く作業は順調に進んだ。Ｂ６・９区の空中写真測量を12月15日に行った。Ｂ９区に大型の井戸（SK107）が検出されたので、測量後の補足調査としてこの井戸の平面図作成作業、井戸枠取り上げ作業を行った。この井戸枠取り上げ作業には同課の浜崎の助力を得た。12月22日～25日に撤



第９図　調査区位置図（縮尺１/3,000）

収準備を行い、年内の作業を終了した。１月11日に機材をセンターに運び、12年度の現地調査を終了した。

なお、９月７日に教職員初任者研修のプログラムである発掘体験をＢ６区で受け入れた。11月21日には記者発表を行い、引き続き11月23日に現地説明会を行った。

c　平成13年度

平成13年度の調査は、都市計画道路東端部分と東側の側道部分（B12区･Ｂ７区）及び西側の街区部分（Ｂ４区）、遺跡北端の街区（Ａ３区）、遺跡南半の街区部分（Ｃ１～３区）の、計16,200㎡について調査を行った。県教育委員会との業務委託契約は平成13年４月１日付けで締結され、４月末～５月初頭の調査着手が計画された。４月半ばにセンター、文化財課、西部開発事務所の三者で現地打ち合わせが行われ、仮設事務所用地、排土置き場等の問題が協議された。調査の進め方としては、藤江北４丁目（現鞍月町１丁目１番）に建設中の、石川県庁新庁舎へのアクセスのための都市計画道路（西部中央通り線）の開通を新庁舎開庁に間に合わせるため、都市計画道路とその周辺の調査区であるＢ７・４区を優先し､その後にＣ１～３区の調査を行うこととなった。B12区は隣接する県立金沢西高校への進入路部分にあたるため、調査は切り回しの仮設道を設置後に行うこととなった。Ａ３区については、仮設事務所から離れており１調査区で完結する単独調査区であったため、畝田C遺跡･無量寺C遺跡担当班が調査を行うこととなった。現地調査は平成13年５月14日に着手し、同年12月20日に現地を引き渡して完了した。

なお、６月１日付けで担当調査員１名が転出する人事異動があったため、余裕のないぎりぎりの人員配置を余儀なくされた。このことは次年度にも重くのしかかってくることとなる。

調査はまず５月14日から24日まで､Ｂ４区とＢ７区の表土除去を行う。以降２班同時進行で２つの調査区の調査を進めた。Ｂ４区は東側約３分の１が近世の用水路（旧大野庄用水）で損壊しており、遺構も希薄であったことから、７月２日に作業を終了し、Ｂ７区へ合流しその南半部分を調査した。Ｂ７区は前年度からの中心建物群の北への拡がりが予想されたため、遺構の希薄な北から南へと調査を進め、遺構が濃密な南半に関しては２班で調査を進めることとした。予想通り南半では中心建物群の北限を確認でき、３基の縦板組横桟留井戸が検出されている。うち１基には牛骨が投棄されており、前年の大型井籠組井戸に続いて２例目となった。なお、金箔張りの宝相華唐草文が施された帯金具（巡方）が掘立柱建物の雨落溝から出土した。独立行政法人奈良文化財研究所に帯金具の成分分析を依頼、８月に菅谷文則滋賀県立大学教授に調査指導を依頼している。

Ｂ７区の調査と並行して、７月24日～30日にＣ１区北半・Ｃ２区・Ｃ３区の表土除去を行った。Ｃ３区に関しては調査の全体量（遺構密度）を把握するために北半部分の表土除去のみ行った。Ｃ１区・２区は廃土置き場の確保が困難であったのと、Ｃ１区を流れるSD67の掘削土置き場を考慮するとＣ１区の南半部分を廃土の仮置き場とせざるを得なかった。Ｃ１区では調査区中央に古代の自然河道であるSD67が蛇行して流れ、Ｃ２区では北側に大型の東西建物＋総柱建物のセットが確認された。８月６日にはＢ７区の調査も完了し、８月８日にＢ４・Ｂ７区の空中写真測量を実施した。Ｃ２区では建物柱穴の記録に手間を要したこともあり、作業に間隙が生じないようにＣ２区の検討・図化中は遺構の希薄なＣ３区の遺構検出･掘削を行うという変則的な調査となった。Ｃ２区完了の目処がついたことから10月17日～18日にはＣ１区南半の排土を移動、南半の調査に備え、併せてＣ３区の南半も表土除去（～26日）を行った。10月19日にはＣ２区の空中写真測量を実施し、調査を完了した。別班によるＡ３区の調査も10月１日に表土除去を開始した。調査区全面に平安時代頃の畝溝が検出され、畝田ナベタ遺跡

の北限を確定することができた。A３区は10月31日に空中写真測量を実施し、完了した。

C１区北半の調査を継続しながらC３区も調査を進め、11月５日～６日にC１区南半の表土除去を行った。B12区も仮設迂回道路が完成し、11月12日に表土除去を行う。11月21日にはC１・C３区の空中写真測量を実施した。以後、B７区で残してあった井戸の断ち割り作業をB12区の調査と並行して進める。

12月10日には、畝田・寺中遺跡と併せ、遺跡検討会を実施した。参加者は下記の通りである（機関、職名は当時）。

山中敏史（奈良文化財研究所集落遺跡研究室長）、平川南（国立歴史民俗博物館副館長）、北野博司（東北芸術工科大学助教授）、吉岡康暢（石川県立歴史博物館長）、橋本澄夫（金沢学院大学教授）、出越茂和・小西昌志（金沢市埋蔵文化財センター）

12月12日にB12区の空中写真測量を実施、全ての調査が完了し、12月20日に現地を県金沢西部開発事務所に引き渡し、現地作業が終了した。

その他

７月11日には県教育委員会が平成12年度から実施している職場体験活動「わく・ワーク体験」を受け入れており、B７区で金沢市立犀生中学校生徒が発掘調査作業を体験した。８月18日にはC１区でセンターの普及事業である親と子の発掘体験教室が行われ、約40名が参加した。９月13日には県教育委員会による教員初任者研修のプログラムである発掘体験をC３区で受け入れた。

金箔張帯金具については10月11日に記者発表を行い、13日に現地説明会を行っている。10月12日にはセンター理事・評議員による視察が行われている。12月１日より現場完了日までの間、県教育委員会が実施した市町村職員研修（埋蔵文化財研修）により、泉妙宗研修生（中島町教育委員会生涯学習課、現在は七尾市）が現地調査に参加している。

d　平成14年度

平成14年度は畝田ナベタ遺跡と畝田D遺跡の発掘調査が実施された。県教育委員会との業務委託契約は平成14年４月１日付けで締結され、冬季を除くほぼ通年での現地調査が計画された。４月15日にはセンター、県教育委員会文化財課、県金沢西部開発事務所担当者で現地打ち合わせが行われ、着手の順序、仮設事務所用地、排土置き場等の問題が協議された。調査の進め方としては、複数調査班を組織して作業を並行させるものとするが、新県庁舎へ連絡する都市計画道路の工事を急ぐため畝田ナベタ遺跡A地区・B地区の調査を先行させ、現行の街路及び用水路の除去が必要な部分がある畝田ナベタ遺跡C地区はその後とし、畝田D遺跡（D地区）は今年度で完了させる必要はないが可能な限り進める、という基本方針となった。現地調査は平成14年４月22日に着手し、平成15年１月14日に完了した。調査の経過は、調査班が分かれたA・B地区とC・D地区の別に述べる。

第10図　調査風景

なお、５月１日付けで担当調査員１名が退職し、７月１日付けで同じく２名が転出する人事異動があったため、余裕のないぎりぎりの人員での調査を余儀なくされた。

A・B地区

A・B地区はまず４月22日から30日まで、A４～７区とB２区のうち、工事が急がれる部分について表土除去を行う。B２区は用地取得の関係で、北半部を年度後半に調査することとなり、南半部についても排土の関係で三分割しての調査となった。現農道部分（A８区）はその取り扱いを文化財課と協議した結果、農道を除去して調査することとなった。５月９日から作業員を投入して順次遺構検出、遺構掘削を進める。５月17日にはA４・５区残りとB２区南半部（一部残す）の表土除去、５月28日にはA８区北半部の表土除去、５月31日にはA８区南半部とB２区南半部残りの表土除去を行う。５月29日には工事が急がれる部分について空中写真測量を行う。６月13日は残り部分の空中写真測量を行う。A４区が旧建物による攪乱が著しかったこと、全体に建物跡が少なかったこともあり、作業は比較的順調に進んだ。ただし、B２区・A５区・A６区では井戸が検出され、木製枠が良く遺存していたことから、掘削と取り上げに時間を要したが、６月26日には作業を完了した。

B２区北半部は担当調査班が畝田・寺中遺跡、畝田B遺跡、畝田C遺跡の各調査区と組み合わせた工程で実施した。10月２日・３日に表土除去を行い、遺構検出、遺構掘削と進める。10月24日には空中写真測量を行う。10月28日に補足作業を行い、この日でA・B地区の調査は完了した。

C・D地区

基本的にはD１区→C７区→C８区→C６区→C５区→C４区の順に着手しており、順に述べる。後述するが、C７・８区では遺跡の分布範囲が南側へ拡大することが調査中に確認され、当初は別遺跡とされていた畝田D遺跡（D地区）と連続することが明らかになった。各調査区の中では、最も範囲の拡大が著しかったC８区の調査が遅れていき、最終的にはC８区に人員を集中させることになった。C８区の完了をもって、現地作業は完了となる。

D１区は４月22日から26日まで重機による表土除去を行った。５月前半はA・B地区へ人員を集中させたためしばらく中断し、５月15日から作業員を投入して５月21日まで遺構検出、５月22日から６月４日まで遺構掘削と進めた。遺構・遺物とも少なかったが、過去の調査では希少な古墳時代の建物跡や井戸が確認されている。６月５日には空中写真測量を実施し、６月10日には完了した。

C７区は６月６日から11日まで北半部の重機による表土除去を行った。６月11日から作業員を投入し、７月５日まで遺構検出を行い、７月８日から遺構掘削へと進んだ。作業は順調に進み、８月26日から28日までは南半部の表土除去を行い、北半部の調査と並行させつつ９月９日から12日まで遺構検出、13日から遺構掘削に移った。C７区では建物跡は少ないが、井戸が多く、SE801やSE805など多様な木製枠が見られ、その掘削と取り上げに時間を費やした。10月11日には全体の空中写真測量を行った。当初の予想ではこれで作業完了の予定であったが、C８区の状況からC７区でも南側へ遺跡の分布が広がる可能性が高くなり、県教育委員会文化財課と協議の結果、調査区を拡張することになった。10月30日に表土除去を行ったが、柱穴を検出してさらに広がりが確認された。11月20日には再び表土除去を行い、掘立柱建物跡を検出し、ようやく調査範囲が確定した。順次遺構検出・遺構掘削を進め、12月24日にC４区とあわせて空中写真測量を行い、作業を完了した。

C８区は６月17日から21日まで北半部の表土除去を行う。以降の人力作業は遺物包含層が遺存していたため、まず遺物包含層の掘削を行い、順次遺構検出作業へ移行し７月15日までを費やした。C８

第２表　現地調査総括表

年　度	遺跡名	調　査　区	担　当	面積㎡	期　間
平成11年度	畝田ナベタ遺跡	B11区	岩瀬由美、和田龍介	400	平成11年11月24日～平成12年１月６日
平成12年度	畝田ナベタ遺跡	A１・２区、B３・６・８～10区	白田義彦、布尾幸恵	9,050	平成12年４月26日～平成13年１月11日
平成13年度	畝田ナベタ遺跡	A３区、B４・７・12区、C１～３区	岩崎英雄、滝川重徳、白田義彦、熊谷葉月、和田龍介、兼田康彦、金田哲也、布尾幸恵	16,200	平成13年５月10日～12月20日
平成14年度	畝田ナベタ遺跡 畝田D遺跡	A４～８区、B２区、C４～８区、D１区	伊藤雅文、岩崎英雄、冨田和気夫、安　英樹、熊谷葉月、和田龍介、兼田康彦、布尾幸恵、山田由布子	15,850	平成14年４月22日～平成15年１月14日
平成15年度	畝田D遺跡	D２・D３区	安　英樹、渡邉大輔	1,906	平成15年９月24日～12月15日

区北半部は遺構・遺物とも少なかったため作業は順調に進み、７月25日には南半部の表土除去を行った。この際、南端に柱穴が検出され、遺跡の分布が当初の予想より広がることが確認された。８月29日には全体の空中写真測量を行う。10月17日には県教育委員会文化財課による南端部の確認調査が行われ、分布の広がりが確認され、調査範囲が南側へ拡大した。また、防火水槽の建設で破壊される部分の調査も追加された。10月21日には防火水槽部分の表土除去を行い、11月７日から８日には南側の表土除去を行った。しかし、作業を進めていくうちに、遺構の分布はさらに南へ広がることが予想され、11月28日にはさらに南側へ向かって表土除去を行う。その結果は、検出された掘立柱建物跡が畝田D遺跡（D地区）の北端に伸びており、畝田ナベタ遺跡と畝田D遺跡は分布が連続することが確認された。調査はD地区と接する地点の掘立柱建物跡までをこの年度で完了させることになり、ようやく調査範囲が確定した。順次遺構検出・遺構掘削を進めたが、すでに冬季となり、降雪など悪天候に阻まれ、作業は難航した。12月24日にはC４・７区とあわせて防火水槽部分について空中写真測量を行う。１月９日に残り拡張部分の空中写真測量を行い、１月14日に作業を完了した。

C６区は10月22日から24日まで南半部の表土除去、11月５日から８日までは北半部の表土除去を行い、遺構検出、遺構掘削を順次進めた。街路、水路部分の細長い調査区であったが、周辺の調査区と関係の深い掘立柱建物跡や井戸が検出された。特にSE1002は大型で深く、悪天候も重なって掘削が難航した。12月３日にC５区とあわせて空中写真測量を実施し、作業を完了した。

C５区は11月５日に表土除去を行う。ほぼ全域がC１区から伸びる河川跡SD67に相当するものと予想されていたが、その通りとなる。作業員を投入してSD67を検出･掘削した後は常時排水とし、12月３日にC６区とあわせて空中写真測量を実施し、作業を完了した。

C４区は担当調査班が畝田・寺中遺跡、畝田B遺跡、畝田C遺跡の各調査区と組み合わせた工程で実施した。11月25日から27日にかけて表土除去を行う。28日から遺構検出、遺構掘削へと進んだ。C２区やB10区と連続する区画溝や掘立柱建物跡が検出された。12月24日にC７・８区とあわせて空中写真測量を実施し、12月27日に作業を完了した。

その他

７月９日にはA７区の宅地に近接して調査できなかった部分について、文化財課による工事立ち会いが行われた。７月15日には県教育委員会が平成12年度から実施している職場体験活動「わく・ワーク体験」を受け入れており、C７区で金沢市立犀生中学校生徒が発掘調査作業を体験した。８月17日にはC７区でセンターの普及事業である親と子の発掘体験教室が行われ、約40名が参加した。10月11日にはセンター理事・評議員による視察が行われている。

第３表　調査工程表

平成11（1999年度）

	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月
B11区										

平成12（2000年度）

	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月
Ａ１区										
Ａ２区										
Ｂ３区										
Ｂ６区										
Ｂ８区										
Ｂ９区										
B10区										

平成13（2001年度）

	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月
Ａ３区										
Ｂ４区										
Ｂ７区										
B12区										
Ｃ１区										
Ｃ２区										
Ｃ３区										

平成14（2002年度）

	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月
Ａ４区										
Ａ５区										
Ａ６区										
Ａ７区										
Ａ８区										
Ｂ２区										
Ｃ４区										
Ｃ５区										
Ｃ６区										
Ｃ７区										
Ｃ８区										
Ｄ１区										

平成15（2003年度）

	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月
Ｄ２区										
Ｄ３区										

e　平成15年度

平成15年度は畝田D遺跡の発掘調査が実施されている。県教育委員会との業務委託契約は平成15年４月１日付けで締結され、９月からの現地調査着手が計画された。９月９日にはセンター、県教育委員会文化財課、金沢西部開発事務所担当者で現地打ち合わせが行われ、仮設事務所用地、排土置場等の問題が協議された。調査の進め方としては、民家に隣接する街路予定地の隅切り部分（Ｄ２区）をまず完了させ、次いでその他の未調査部分（Ｄ３区）を完了させることとなった。

９月24日から30日まで重機による表土除去を行った。以降は遺構検出、遺構掘削を順次北から南へと進めていった。Ｄ２区は狭小なため10月２日に完了した。Ｄ３区は北半に古代の遺跡、南半に古墳時代の遺跡の中心があり、分布が重なり合っていることが判明した。また、管玉の製品や未成品がまとまって出土し、管玉を生産していた集落であることも確認された。さらに、調査区を貫く墳砂が検出され、地震痕跡と確認された。調査区の北東側については、区画整理の事業地へ遺構が伸びていたため、県教育委員会文化財課と協議して調査区を拡張することが決定した。拡張区は11月13日に表土除去を行ったが、遺構の分布は希薄であった。作業は比較的順調に進み、12月３日と５日には空中写真測量を実施した。12月10日には産業技術総合研究所から寒川旭氏を招き、発見された地震痕跡について、調査指導を受けた。12月15日には現地調査を完了、撤収した。

第３節　出土品整理

出土品の整理作業のうち、遺物の洗浄については調査した翌年度に実施し、記名等の作業はその後となる。畝田・寺中遺跡ほか２遺跡で多量の土器・木器を出土したことから、金沢西部第二土地区画整理事業に係る発掘調査で出土した遺物のすべてを当財団法人で整理作業を行うことは不可能であった。つまり、処理能力を超えていたのである。

このようなことから、畝田ナベタ遺跡出土品のうち土器についてはほとんどが古代に属するものであり、弥生土器や古墳時代の土師器に比べ実測等の作業は容易であること、畝田・寺中遺跡他２遺跡に比べて土器の出土量がそれほど多くないことから、発掘調査現場で整理作業を行うこととした。

しかし、井戸枠や祭祀具をはじめとする木製品は、いったん埋蔵文化財センターに搬入した木器を整理のために現場に持ち込むと遺物を損なう恐れが高いこと、木製品の実測には、木取りを見るなど土器以上に実測が難しいこと、などから、当財団の企画部整理課が担当することとなった。

第11図　遺物整理風景(1)

畝田ナベタ遺跡は現場で遺物整理、それ以外は整理課、という基本路線は平成12年度にきめた。平成12年度では主に畝田・寺中遺跡他の遺跡出土品の整理作業に当たったが､それは畝田ナベタ遺跡の調査が畝田･寺中遺跡他２遺跡よりも実質的に１年遅れたためである。畝田・寺中遺跡他２遺跡の遺物整理量が整理課の業務量を大きく上回ったために現場での整理作業が必要であった。このような理由で平成12年度から現地での整理作業を行ったものだが、結果として平成13年度からの整理作業が順調に

行うことができた。

畝田ナベタ遺跡出土品の現場での整理作業は、平成13年度から平成15年度の３ヵ年に及んだ。４月後半から作業を開始し、12月末まで８ヶ月強の期間にわたって、遺物の洗浄、記名・分類・接合、遺物の実測・トレースに従事した。その具体的な内容は、企画部整理課で行っているものと同じである。異なるところは、遺物の乾燥を天日干しとすることであった。また、通常整理課では記名からトレースまで一連の作業として行うが、現場では記名・分類・接合を主に行う班と実測を主に行う班など作業内容によって作業員の配置を変えた。これは、現場での整理という通年で作業を行えなかったことから、実測になれた作業員の確保が困難であったことによる。

整理作業の管理監督は、調査員が当たった。基本的に１名をあてたが、現地調査の状況によっては休憩時間しか作業の管理がおこなえないときもあった。とくに、平成14年度は調査担当のうち２名が文化財課へ転出となったために調査員の不足から調査課長まで現場に立ったために、十分に整理作業の内容と進捗を管理するのは困難があったものの、順調に行いえたのは調査員のがんばりに尽きるのである。

なお、畝田ナベタ遺跡のA地区の発掘調査の遺物整理は、整理課の遺物整理量が減少したために西部関係の遺物整理に余裕が出たことと、現場での遺物整理の進捗にやや遅れを生じていたことから、整理課で遺物整理作業を行った。

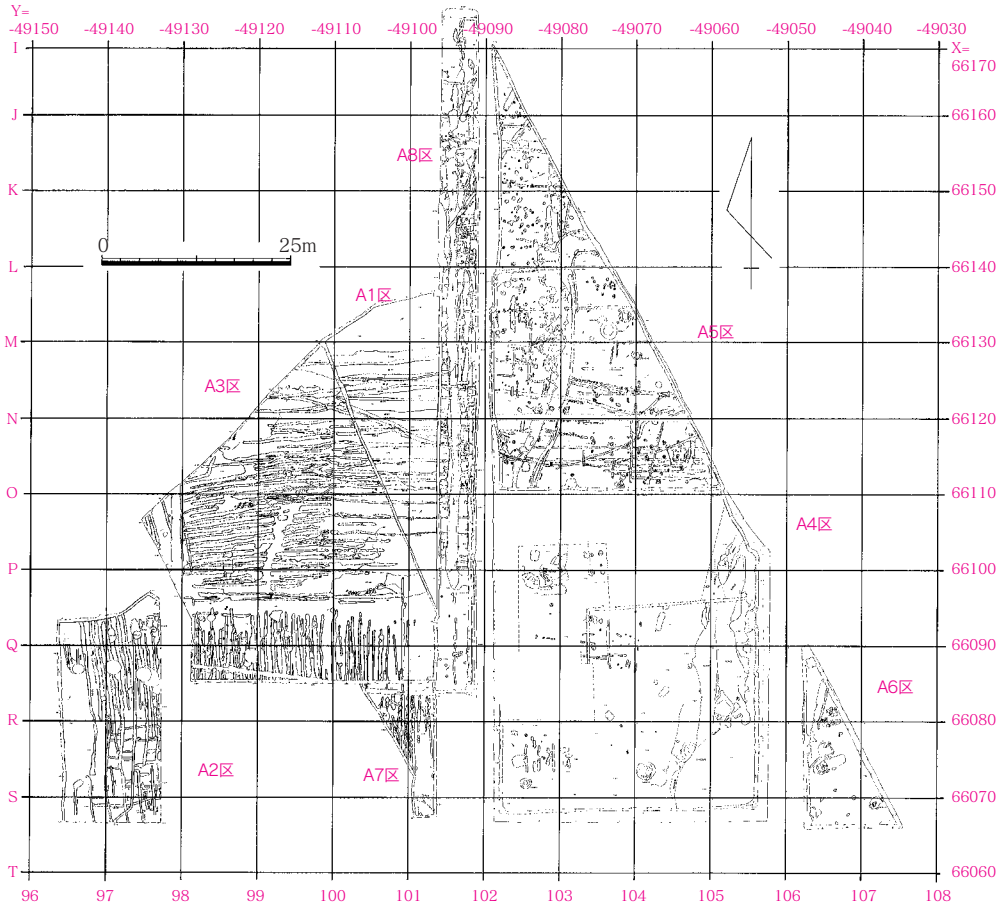
第12図　遺物整理風景(2)

第３章　調査の概要

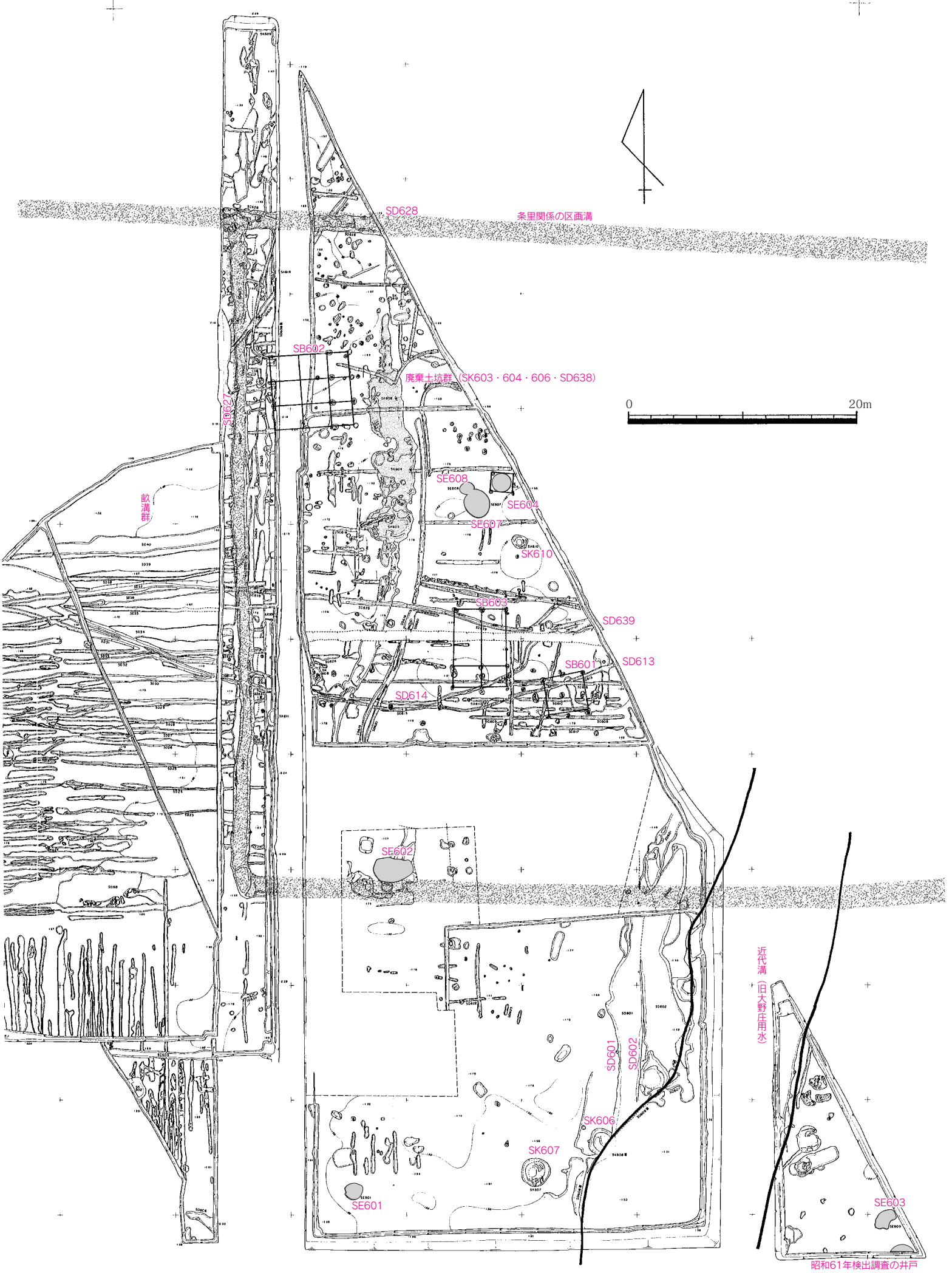
今報告のA区は、昭和59年に金沢市教育委員会によって発掘調査された市道よりも北側の区域を総称している。この地区は、他の調査区に比べて掘立柱建物の分布が極めて薄く、出土する土器も10～11世紀代と新しい。しかも遺構の分布が薄くなっていく状況から遺跡の縁辺であるとわかる。

A地区は、平成12・13・15年度にかけて調査を実施し、掘削の関係でいくつかの調査区にさらに区分される。平成12年度はＡ１区とＡ２区で、Ａ１区が都市計画道路敷にあたり、Ａ２区が区画道路部分にあたる。平成13年度は街区にあたるＡ３区を調査し、それ以外を平成15年度に行った。Ａ４区には保育園が営業しており、その移転作業が平成14年末に完了したために、この部分の調査が最後まで残された。このようなことから保育園が建てられていた部分は撹乱が及び遺構の遺存状況がきわめて悪いことが予想された。Ａ４区とＡ５区の境界は保育園の敷地で区分し、Ａ８区は農道部分にあたる。Ａ４区とＡ６区の間には排水路が流れていた。

グリッドの設定は第13図に示すとおり、金沢西部第二土地区画整理事業地全体にかかるグリッドを採用し、グリッド名称は北西杭であらわしている。基本的に包含層は遺存せず、厚さ15㎝の耕土を除去するとすぐに遺構面となる。遺構面のベースとなる土は淡黄色シルト土で、砂分の多いところや粘性の強い部分などがある。なお、SK603掘削時にベース土中から倒木が出土したが、地山形成にかかるものである。



第13図　グリッド配置図



第14図　主要遺構配置図

遺構は大きく３箇所に区分して整理することができる。それは、Ａ８区で検出した条里にかかる区画溝を中心に、①その内側であるＡ５区の大部分とＡ４区の北半分、②その南側、そして③として①と②より西側の畝溝遺構の部分である。

③は、条里区画溝が南で直角に曲がるところを境にして、北側は東西方向の溝となり、南側は南北方向の溝となっているので、条里の区画の意識が働いている。ただし条里溝の痕跡はなく、溝の西への延長上に畝溝が存在することから、条里溝の存在は否定でき、その区画意識のみ存在したものである。この区域は古代の生産域である。

②は保育園敷地の部分であり、遺構の残りは極めて悪く、深い遺構のみ検出しえた。SE601やSE603、井戸の可能性もあるSK606・607そして南から畝田ナベタ遺跡を縦断する古代の溝（SD601・602）である。畝溝の検出区域には井戸が分布しないので、この区域に畝溝が作られていないことがわかる。つまり、集落居住域なのである。おそらく、より南のB区からの続きの遺構群と考えられるが、建物遺構がまったく未検出の状況にあっては、どのような区域となるのか不明といわざるを得ない。ただし、明確な井戸が３基も近隣に存在することから、B区の建物群の北側に井戸が配置されているものとも考えられよう。

①は条里溝で区画された内部に建物群が配置されている。金沢西部の多くの遺跡でそうだが、条里の区画を意識しつつも、条里溝で明確に区画することはしない。南新保E遺跡で建物を条里溝で区画しており、この地区も建物を区別する目的で条里区画にのっとって溝を掘削したものと考えられる。区画の中央に井戸SE604・607・608があり、南と西に建物が配置されている。特徴的なのは、SB602と井戸との間に鍛治関係の遺物や残滓を廃棄した土坑（SK603･604･606）が南北に並びさらにSD639からも同様の遺物を出土しているので、一連の遺構である。このような廃棄物はＡ２区やＡ３区の小土坑（SK25･26など）からも出土し、この周辺で鍛治作業が行われていたことがわかる。特に、これらの遺物群の中から土製仏像の破片が出土しており、近隣に宗教施設の存在があったことがわかる。ただしそれが仏堂として認識できる遺構であったかどうかは別である。もしかすると、草堂のような簡易な建物の中に仏像が厨子のような入れ物の中に入っていたならば、考古学的な検出はきわめて困難である。

また、調査区を東西に横断する板塀のような溝（SD639）や小溝（SD613・614）、そして道路の側溝のように等間隔にはしる南北に伸びる小溝がある。さらに調査区北端を北東から南西に斜めに横断する小溝がある。具体的な遺構の性格はつかみがたく、そのいくつかは近世の遺構の可能性が考えられる。

第15図　調査風景

第４章　遺構と遺物

第１節　建物跡

SB601（遺構：第16図、図版21）

［地区］Ａ４　　［調査年度］2002　　［グリッド］Ｋ・Ｌ－101・102　　［遺構面標高］1.62m

［構造］側柱［規模］１間（東3.5m西3.3m）×２間（南3.5m北3.6m）［軸方向］Ｎ７°

［柱穴番号］P6002・6004・6005・6007・6008・6010

［柱穴形状］

［柱穴その他］P6001・6011・6021・6035・6062・6068・6070・6078・6080・6095

［出土遺物］

［特記事項］柱間は一定ではなく、それぞれの建物壁の長さも異なるので、必ずしも直角を持つ長方形の建物ではない。建物規模からわかるように、梁行が１間であるよりも２間での方が収まりがよい。40cmほどずれて柱が存在する（P6003）が、これがこの建物に付くものと考えられない。建物の柱は、10cm×20cm前後の方形を呈するようで、P6003の柱が心持ち材の円柱であることからも、この建物に付随する柱ではないことがわかる。さらに、SB602や603とともに建物群を構成すると思われるが、その主軸が異なる。以上より、堅牢な建物というよりも簡便な建物であると考えられる。建築時期は明確にしがたいが、11世紀を前後する時期と考えている。

SB602（遺構：第17図）

［地区］Ａ４　　［調査年度］2002　　［グリッド］Ｋ・Ｌ－101・102　　［遺構面標高］1.62m

［構造］総柱　　［規模］３間（6.5m）×３間（6.9m）［軸方向］北から５度

［柱穴番号］P6036・6039・6040・6045・6046・6048・6049・6050・6051・6052・6053・6075

［柱穴形状］

［柱穴その他］

［出土遺物］

［特記事項］南北の柱間は、ほぼ220cmで７尺であるが、東西の柱間のうち東１間分がやや狭く約180cmで６尺、西側が約250cmで８尺となっている。柱の掘り方は直径15～20cmだが、東端の柱掘り方はやや小さい。柱間の違いと掘り方の大きさの違いから、２間×３間の建物の東に庇を持つものと考えることもできるかもしれない。しかし、SB603でも柱間寸法に違いが見られ、それを土間構造と理解しこの遺跡の特徴と捉え、本報告ではその可能性は少ないと考える。柱の抜き取りは不明確でP6040やP6048で柱痕と思われる土層状況を確認しているが、基本的に柱は抜き取られている。建築時期は明確にしがたいが、11世紀を前後する時期を考えている。

SB603（遺構：第18図）

［地区］Ａ４　　［調査年度］2002　　［グリッド］Ｍ・Ｎ－103　　［遺構面標高］1.79m

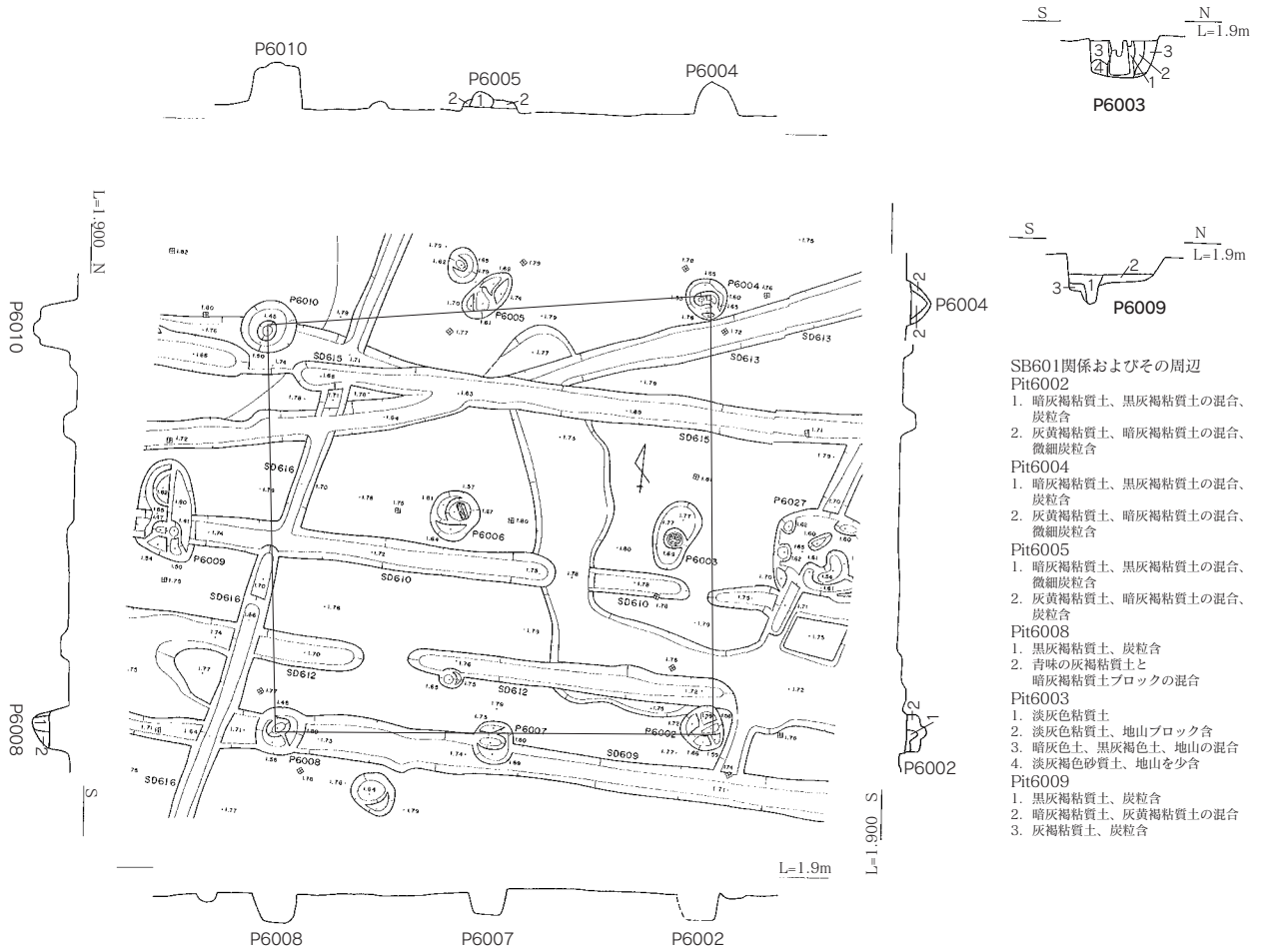
［構造］総柱　　［規模］２間（4.6m）×３間（6.9m）［軸方向］北から0.5度

［柱穴番号］P6015・6016・6017・6019・6081・6082

［柱穴形状］

［柱穴その他］P6018

［出土遺物］



SB601関係およびその周辺

Pit6002
1. 暗灰褐粘質土、黒灰褐粘質土の混合、炭粒含
2. 灰黄褐粘質土、暗灰褐粘質土の混合、微細炭粒含

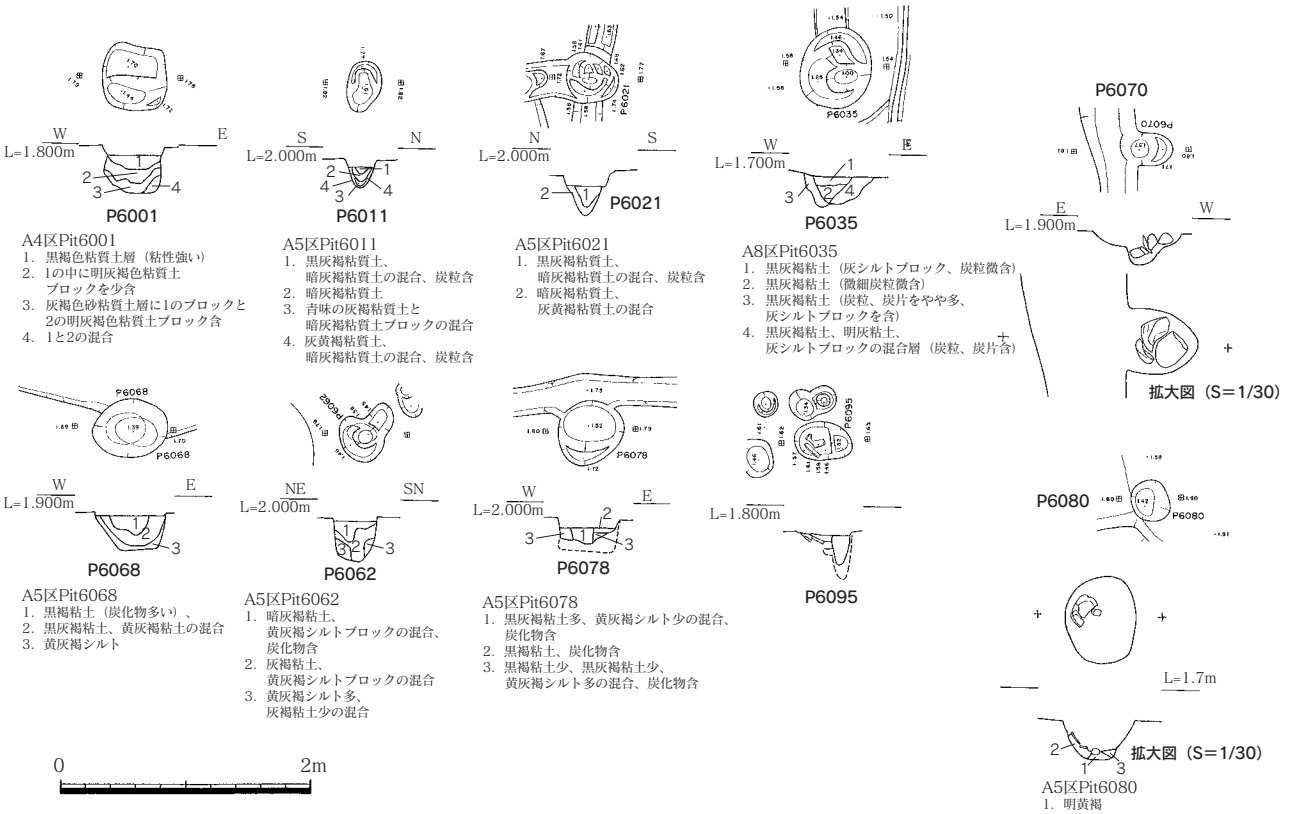
Pit6004
1. 暗灰褐粘質土、黒灰褐粘質土の混合、炭粒含
2. 灰黄褐粘質土、暗灰褐粘質土の混合、微細炭粒含

Pit6005
1. 暗灰褐粘質土、黒灰褐粘質土の混合、微細炭粒含
2. 灰黄褐粘質土、暗灰褐粘質土の混合、炭粒含

Pit6008
1. 黒灰褐粘質土、炭粒含
2. 青味の灰褐粘質土と暗灰褐粘質土ブロックの混合

Pit6003
1. 淡灰色粘質土
2. 淡灰色粘質土、地山ブロック含
3. 暗灰色土、黒灰褐色土、地山の混合
4. 淡灰褐色砂質土、地山を少含

Pit6009
1. 黒灰褐粘質土、炭粒含
2. 暗灰褐粘質土、灰黄褐粘質土の混合
3. 灰褐粘質土、炭粒含



A4区Pit6001
1. 黒褐色粘質土層（粘性強い）
2. 1の中に明灰褐色粘質土ブロックを少含
3. 灰褐色砂粘質土層に1のブロックと2の明灰褐色粘質土ブロック含
4. 1と2の混合

A5区Pit6011
1. 黒灰褐粘質土、暗灰褐粘質土の混合、炭粒含
2. 暗灰褐粘質土
3. 青味の灰褐粘質土と暗灰褐粘質土ブロックの混合
4. 灰黄褐粘質土、暗灰褐粘質土の混合、炭粒含

A5区Pit6021
1. 黒灰褐粘質土、暗灰褐粘質土の混合、炭粒含
2. 暗灰褐粘質土、灰黄褐粘質土の混合

A8区Pit6035
1. 黒灰褐粘土（灰シルトブロック、炭粒微含）
2. 黒灰褐粘土（微細炭粒微含）
3. 黒灰褐粘土（炭粒、炭片をやや多、灰シルトブロックを含）
4. 黒灰褐粘土、明灰粘土、灰シルトブロックの混合層（炭粒、炭片含）

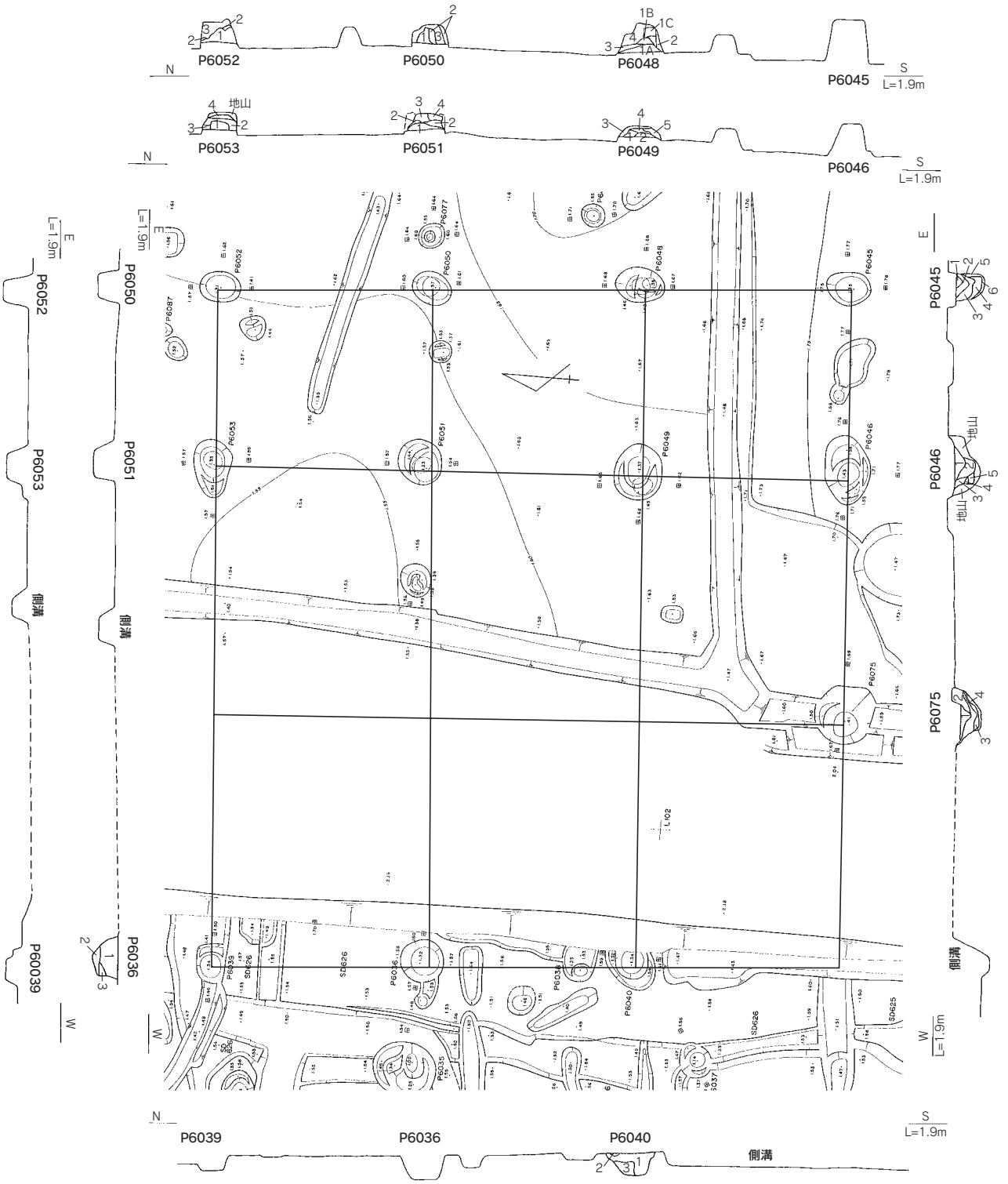
A5区Pit6068
1. 黒褐粘土（炭化物多い）、
2. 黒灰褐粘土、黄灰褐粘土の混合
3. 黄灰褐シルト

A5区Pit6062
1. 暗灰褐粘土、黄灰褐シルトブロックの混合、炭化物含
2. 灰褐粘土、黄灰褐シルトブロックの混合
3. 黄灰褐シルト多、灰褐粘土少の混合

A5区Pit6078
1. 黒灰褐粘土多、黄灰褐シルト少の混合、炭化物含
2. 黒褐粘土、炭化物含
3. 黒褐粘土少、黒灰褐粘土少、黄灰褐シルト多の混合、炭化物含

A5区Pit6080
1. 明黄褐
2. 暗灰褐
3. 暗灰褐・黒褐　炭混

第16図　SB601実測図柱穴実測図



Pit6036
1. 黒褐粘土（灰シルトブロック、黄褐粘土ブロック含、炭粒多）
2. 灰黄褐シルト
3. 黒灰褐粘土（炭粒微含）

Pit6040
1. 黒褐粘土（炭化物含）
2. 黄灰褐シルト（炭化物含）
3. 黒褐粘土、黄灰褐シルトブロックの混合（炭化物含）

Pit6045
1. 黒灰褐粘土、炭化物含
2. 黒褐粘土、黄灰褐粘土ブロック混合
3. 黒灰褐粘土、炭化物少
4. 黒褐粘土、灰褐粘土ブロック混合
5. 暗灰褐粘土、黄灰褐粘土ブロック混合
6. 暗灰褐シルト

Pit6046
1. 黒褐粘土、炭化物多
2. 黒褐粘土、灰褐シルト混合層、炭化物多
3. 灰褐シルト多め、黒褐シルト混合
4. 茶褐砂
5. 黒褐粘土、灰褐粘土混合、炭化物含

Pit6048
1A. 黒灰褐粘土、灰褐シルト混合、炭化物含
1B. 黒褐粘土、炭化物含
1C. 黒褐粘土、灰褐シルト混合
2. 灰褐シルト多、黒灰褐粘土混合
3. 黄灰褐シルト、黒灰褐粘土混合
4. 黄灰褐シルト多、黒灰褐粘土少混合

Pit6049
1. 黒褐粘土、炭化物多
2. 黒灰褐粘土、灰褐シルト混合、炭化物含
3. 灰褐シルト、黒灰褐粘土混合、炭化物含
4. 灰褐シルト、黄灰褐粘土ブロック混合
5. 灰褐砂、暗灰褐粘土混合

Pit6050
1. 黒褐粘土、黄灰褐粘土混合、炭粒、焼土粒含
2. 黒灰褐粘土、黄灰褐シルト（地山土）混合
3. 黒灰褐粘土多、黄灰褐シルト少混合

Pit6051
1. 黒褐粘土、炭化物含
2. 灰褐シルト多、黒褐粘土少混合
3. 黒褐粘土多、灰褐シルト少混合
4. 黒灰褐粘土多、灰褐シルト少混合

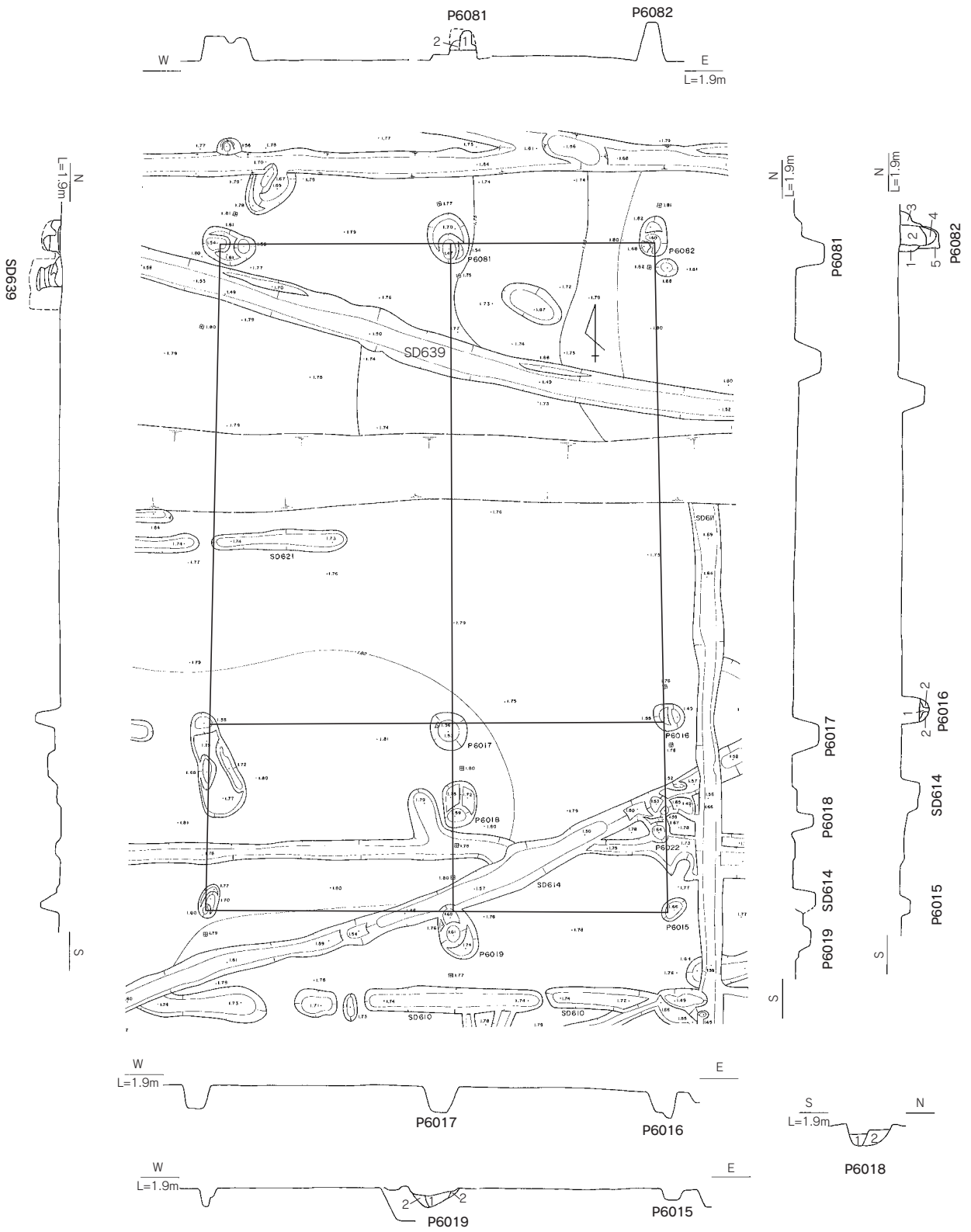
Pit6052
1. 黒褐粘土多、黄灰褐シルトブロック、灰褐シルトブロック、炭化物多混合
2. 灰褐シルト、黒灰褐粘土混合
3. 淵灰褐砂、灰褐シルト混合

Pit6053
1. 黒褐粘土、黄灰褐シルト、炭化物多混合
2. 黄灰褐シルト、炭化物、暗灰褐シルト混合
3. 暗灰褐シルト、黄灰褐シルト、炭化物多、焼土粒微混合
4. 暗灰褐粘土、黄灰褐シルトブロック混合

Pit6075
1. 黒褐粘土、黄灰褐シルトブロック多混合、炭化物含
2. 1とほぼ同じ、黄灰褐シルトブロック少
3. 黒褐粘土、黄灰褐シルトブロック、炭化物混合
4. 黒灰褐粘土、炭化物、焼土粒混合

0 2m

第17図　SB602実測図



Pit6016
1. 暗灰褐粘質土、炭粒含
2. 青味の灰褐粘質土と灰黄褐粘質土混合

Pit6019
1. 砂質土、暗灰褐粘質土ブロックの混合
2. 砂質土、暗灰褐粘質土ブロックの混合

Pit6081
1. 黒灰褐粘土、黄灰褐シルトブロック混合、炭化物微含
2. 暗灰褐シルト、炭化物微含

Pit6082
1. 黒灰褐粘土
2. 暗灰褐粘土、黄灰褐シルトブロック多混合
3. 暗灰褐粘土、黒灰褐粘土ブロック混合
4. 2と同じだが、黄灰褐シルトブロック少
5. 黄灰褐シルト、暗灰褐粘土混合

Pit6018
1. 黒灰褐粘質土、炭粒含
2. 暗灰褐粘質土、地山砂質層

0 2m

第18図　SB603実測図

［特記事項］北から２列目の柱列が撹乱によって失われているので、正確には総柱建物とは断定できない。SB602とほぼ同じ建物主軸を持っているが、柱の掘り方は一回り小ぶりである。柱は方形を呈する（P6081）ようで、SB602よりも建物規模が小さいことが柱掘り方および柱の大きさに影響しているのであろう。さらに、南の柱列はさらに小さくなっているようであるが、この建物も調査中には気づかれることなく、これらの柱穴も建物の一部と意識されて調査されていないので、柱痕跡等不明確である。ただし、南の柱底の深さが北２間の柱の深さよりも約10㎝浅くなっているので、同じ床構造であったとは思えず、北２間が床を持ち、南１間が土間構造の可能性を考える。この建物もSB602同様、11世紀を前後する時期と考えられる。

第２節　井戸跡

SE601（遺構：第19図、図版６、遺物：第32図）

［地区］Ａ４　［調査年度］2002　［グリッド］Ｒ－102　　［遺構面標高］1.85m

［井戸側構造］不明　［井戸側形状・規模］不明

［水溜］不明　［掘り方形状・規模］ほぼ円形（長3.36×短2.07×遺存高0.94m）

［堆積］下半分に井戸内自然堆積土（色調未記載）が厚く堆積し、それより上層には、周囲から明灰色粘質土や灰褐色粘質土、黒灰色粘質土が落ち込むように見られ、黒褐色粘質土や黒灰色粘質土が内部に入り込んでいる。

［出土遺物］遺物量が少なく、須恵器杯身１点のみ図示した。

［特記事項］掘り方断面形が漏斗状を呈する。調査では井戸枠の抜き取りを想定していたが、その痕跡が井戸底まで及んでいないことから、井戸枠の存在は否定できる。むしろ自然堆積した井戸内をさらった状況と理解し、素掘りの井戸であった可能性が高い。井戸の時期は９世紀である。

SE602（遺構：第19図、図版６～８、遺物：第32図、図版26）

［地区］Ａ２　［調査年度］2002　［グリッド］Ｏ－102　　［遺構面標高］1.72m

［井戸側構造］隅柱縦板組　［井戸側形状・規模］平面方形（長3.36×短2.07×遺存高0.94m）

［水溜］曲物　［掘り方形状・規模］長楕円形（長3.36×短2.07×遺存高0.94m）

［堆積］水溜には黄灰色粘質土の自然堆積層があり、それより上部にある井戸枠内では暗褐色シルトや黒灰褐色シルト、黒褐色粘質土が互層の状態で遺構検出面まで厚くみられ、自然堆積によって埋没したものである。東にあった井戸の作り直しの関係で、掘り方は東西の傾斜が異なる。掘り方埋土は灰色シルトあるいは黄灰色粗砂などがある。SE602（古）埋土を利用しているのであろう。

［出土遺物］３や４は体部の傾きが強く古代Ⅵ期の製品であろう。５は大型の杯である。156から159は隅柱材で、横木をはめ込むほぞ穴のうち下段は貫通し上段は途中で止まっている。158のみ芯持ち材を用いている。160は縦板の一部で先が矢板状に削られ釘穴が２箇所ある。転用部材である。161から164は横木である。両端を削り込んで細く仕上げている。173はラベルが外れていたが出土状況写真と照合してこの井戸の水溜に使われた曲物であることは間違いない。底板を止める木釘のあとがある。タガはない。

［特記事項］井戸枠隅柱は１辺45㎝（１尺５分）でおかれ、下面から10㎝と20㎝にほぞ穴があけられてそれぞれ高さを合わせるように横木を組み込む。東の横木が外れているのは井戸建設の際のミスである。横木外側には幅20㎝の縦板を２枚ずつ置いている。東にあった井戸を廃棄したあとに西に井戸を作り直したのがSE602である。廃棄された井戸をSE602（古）とする。SE602（古）は完全に井

戸枠が抜き取られ、掘り方底に凹凸が見られるのは抜き取り作業に伴うものである。掘り方底には黄灰色粗砂や青灰色粗砂との混合層があり、地山土の攪拌層である。その上にも粗砂層が厚く見られ、抜き取り後に壁面の崩落等によって地山土が堆積したのであろう。それより上層には暗灰色粘土や灰色シルト土が斜め堆積し、掘り方埋土の流入土であろう。

SE603（遺構：第20図、図版９～13、遺物：第32・46～51、53図、図版26・27・32）

［地区］Ａ６　［調査年度］2002　［グリッド］Ｒ・Ｓ－107　［遺構面標高］1.74m

［井戸側構造］曲物縦置　［井戸側形状・規模］平面円形（長2.0×短1.17×遺存高1.92m）

［水溜］曲物　［掘り方形状・規模］楕円形（長2.0×短1.17×遺存高1.92m）

［堆積］検出面から90㎝下がったところで全周する井戸枠を認識し、１段目の曲物とした。検出面から50㎝まで漏斗状の堆積で暗褐色粘質土などに地山質土のブロックや焼土粒・炭粒が入り込んでおり、井戸枠の抜き取りの痕跡はない。むしろ、曲物の自然腐朽に伴って井戸枠内に土砂が流入堆積する状況であろう。しかしながら、その土層が井戸上部で収まっているのは、かなりの自然堆積が進んでいることを示す。厚く井戸枠内に堆積した土層は注記がないのでよくわからないが、内部から土器や木器とともに焼石など多く出土していることから、井戸廃絶時にいろいろな物を廃棄していることを示す。なお、山川史子氏の同定により小形ほ乳類の骨片が出土している。残滓として捨てられたものと考えられる。

［出土遺物］６・７は須恵器杯、７・９は須恵器瓶類で、これら以外はほとんどが土師器である。10－12は内黒椀で内面は横方向のミガキが見られ、12の高台は小さな三角形を呈する。口縁端部がヨコナデによって小さくやや外反する。13から23（16以外）は土師器で17には墨書「大」？がある。23は長胴甕で外面にススが厚くこびり付いている。174・175は斎串で、墨書等の痕跡はない。176は漆器皿で高台はない。177・178の櫛は白木で別個体である。179は石帯、180は馬の大腿骨である。181・182は焼石で、181の全面に182の周囲に研磨によると思われる平滑な面が存在する183から188は井戸枠に使われた曲物である。183は明確な遺物の注記が不明だが２段目と思われる。側板に底と上から９㎝のところにタガを取り付け、さらに４方向に幅５㎝の縦板をタガと側板との間に入れて補強している。底板との結合は木釘留めである。184は口縁部のみタガをめぐらす。185は底板との接合穴なし。186は木釘止め。201と202は熱を受けて焼けた石である。

［特記事項］８段以上の曲物を井戸枠としており、上部になるにしたがって大きな曲物を使用しているが、土圧によってかなり楕円形に歪んでいる。

SE604（遺構：第21図、図版14－16、遺物：第34・44・53図、図版27・28・32）

［地区］Ａ５　［調査年度］2002　［グリッド］Ｌ－103　［遺構面標高］1.79m

［井戸側構造］横板組み　［井戸側形状・規模］平面方形（一辺63㎝×遺存高15m）

［水溜］なし　［掘り方形状・規模］方形（長1.59×短1.52×遺存高0.92m）

［堆積］抜き取り後の堆積土は広いすり鉢状を呈し、暗褐色粘質土に砂ブロックを含むなど人為的な堆積土との調査所見がある。掘り方埋土とされるのが暗灰褐色粘質土とともに下部には青灰色砂などの地山土がある。また、井戸枠内最下部には青灰色砂があり、井戸枠が掘り方内部に埋め込んでいる状況であり、それゆえ抜き取られずに済んだのである。明確な井戸枠内堆積土が観察できなかったことから、土砂の堆積は少なかったものと判断できる。なお、抜き取り土下面には板材などが見られるが、抜き取り作業の足場に利用されたものもあろう。

［出土遺物］51から57は須恵器、58から61は土師器椀である。これらの遺物は井戸枠抜き取り後の

土層中に入っている。169～172は井戸枠材である。169と171の組合せの切込みが互い違いとなっており、170と172が方向に切り込みをつけている。４枚のうちの３枚に、上の井戸枠材との接合のためにそれぞれ２箇所のほぞ木を入れている。ほぞ木は、幅３㎜、厚さ２㎜の板である。169と172の一方の切り込みは、後で部材を組み合わせる構造となっている。組み合わせる時の調節機能である。

198から200はSK603出土の197と同じもので、全体的に熱を受けて黒く変色している。199にはその痕跡が見られず未使用品である。

［特記事項］横板組み井戸枠は最下部のみ遺存しており、それより上部は抜き取られている。井戸枠は、切り込みを組み合わせて方形を組み、上段の井戸枠とずれないように接合するために、接合面に２箇所のほぞ木をはめ込んでいる。井戸には覆屋の柱穴を確認した。１間×１間で1.9m×1.6mの規模である。柱痕は10㎝の方形で20㎝強の不正円形の掘り方である。

SE607（遺構：第21図、図版16、遺物：第33図、図版26）

［地区］Ａ５　［調査年度］2002　［グリッド］Ｌ－103　［遺構面標高］1.79

［井戸側構造］不明　［井戸側形状・規模］不明

［水溜］不明　［掘り方形状・規模］楕円形（長2.41×短1.14×遺存高0.68m）

［堆積］井戸枠内堆積土と思われる黒褐色シルト上部に暗灰褐色シルトがあり、その周囲に井戸枠埋土と考えられる地山系の砂（濁灰褐色砂など）がある。さらに掘り方上部では皿状に堆積する黒褐色粘土等があり、他の土がブロック上に混合することから抜き取り後の埋め立て土であろう。

［出土遺物］25は灰釉陶器。胎土中に白い粒子が顕著である。

［特記事項］すり鉢状の掘り方を呈し井戸枠が抜かれている。

SE608（遺構：第21図、図版16、遺物：第33図）

［地区］Ａ５　［調査年度］2002　［グリッド］Ｌ－103　［遺構面標高］1.79m

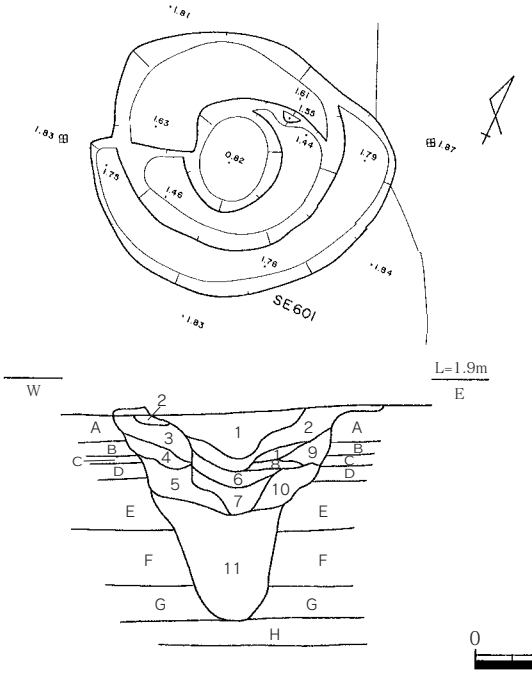
［井戸側構造］不明　［井戸側形状・規模］不明

［水溜］不明　［掘り方形状・規模］円形（長1.19×短0.98×遺存高0.70m）

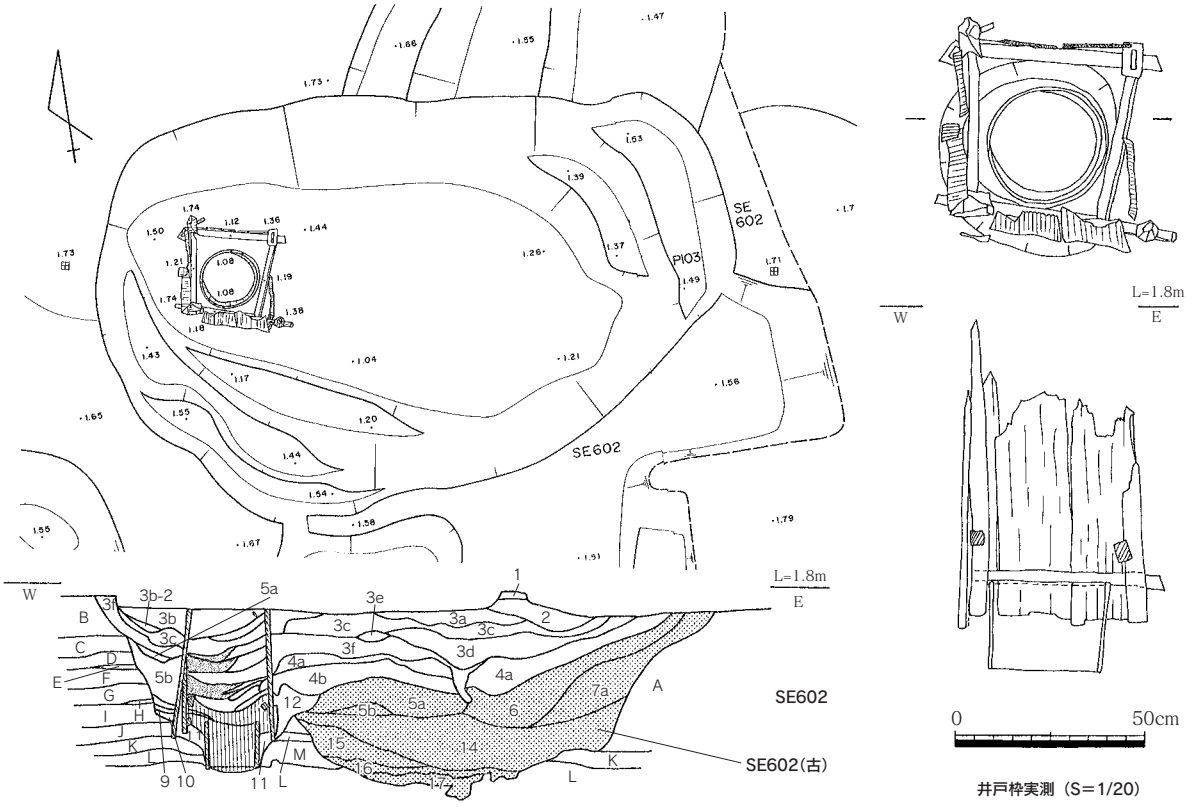
［堆積］底には灰褐色シルトや暗灰褐色シルトが水平堆積し、次第にすり鉢レンズ状の堆積になっており、黒灰褐色系の粘土が厚く見られる。

［出土遺物］上層を中心に土師器杯等が極少量出土している。磨滅しているものが多く、２次的な混入物が多い。

［特記事項］底面が平らな素掘り井戸で、SE607に切られている。自然に埋まっていったものであり、SE601のような堆積土のさらえ作業も見られない。

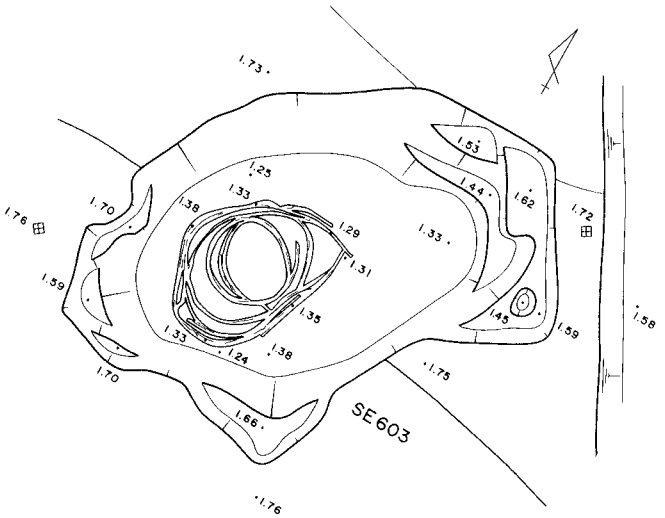


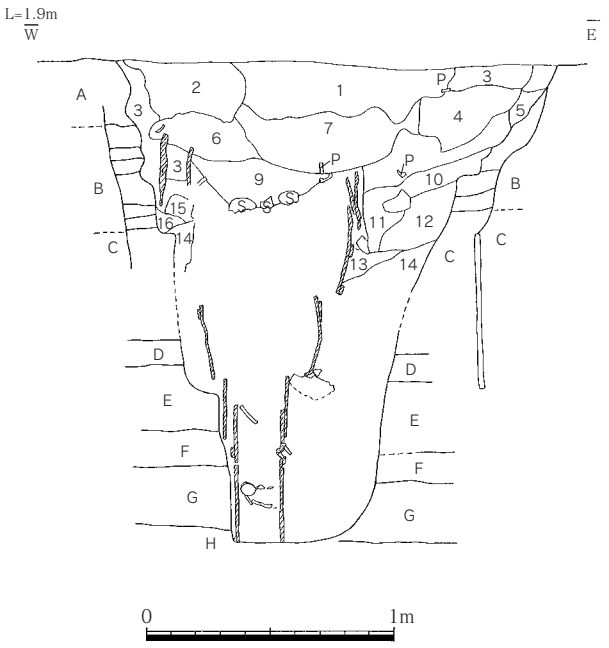
SE601
1. 黒褐色粘質土
2. 黒灰色粘質土、粘性強い
3. 1・2の混合土に4の小ブロックを含
4. 明灰色粘質土
5. 4に黒色粘土小ブロック少含
6. 2に4小ブロック少含
7. 1に4小ブロックやや多含
8. 暗灰色粘質土
9. 灰褐色粘質土に4小ブロック含
10. 黒灰色粘質土
11. 井戸内自然堆積土
A 黄灰褐粘土
B 茶色砂層
C 黄褐シルト
D 灰褐砂層
E 明灰褐粘土
F 暗灰褐粘土
G 灰褐シルト、植物性腐食物を含む
H 灰褐シルト

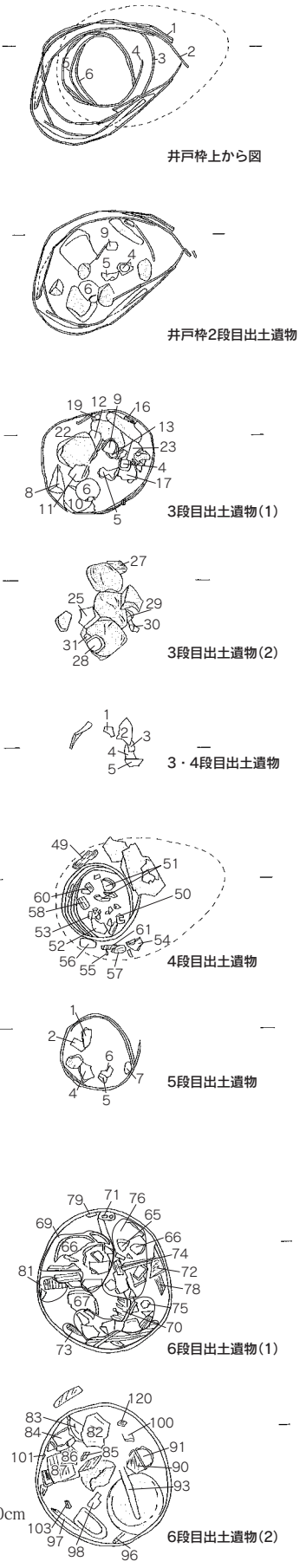


SE602
1. 暗褐色シルト（旧耕土床土の残りか）
2. 暗灰色粘土
3. 灰褐色粘質土と粘土、シルトブロックの混合層
3a. 暗灰色粘土粒多
3b. 灰色シルト、3b-2は炭粒多
3c. 灰色細砂多
3d. 灰色細砂に暗灰粘土ブロック混、黄灰色シルトブロック少混
3e. 暗灰色粘土ブロック
3f. 暗灰色シルト、粘土ブロック、粗砂ブロック混
4. 黄灰色粗砂
4a. 粗砂＋シルトブロック少
4b. 粗砂＋シルトブロック多
5. 暗灰色シルト
5a. 灰色粗砂中混
5b. 暗灰色粘土ブロック
6. 暗灰色粘土
7. 灰色シルト
7a. 暗灰色粘土ブロック混
7b. 灰色粗砂
9. 灰褐粗砂層
10. 灰褐シルト層
11. 暗灰砂層
12. 暗灰褐シルト層
14. 粗砂層、暗灰シルト層の混合層
15. 明灰粗砂層
16. 黄灰粗砂層
17. 暗灰粗砂層、青灰粘土層の混合層
8 井戸枠内土層
8a. 暗灰褐シルト、自然堆積土層
8b. 黒灰褐シルト、自然堆積土層
13. 黒褐粘質土、自然堆積土層
8k 黄灰褐シルト、自然堆積土層
A 青灰～黄褐色粗砂
B 黄灰砂層
C 灰黄シルト層
D 濁灰砂層
E 濁灰粗砂層
F 灰砂層
G 黄褐粗砂層
H 灰黄シルト層
I 明灰粗砂層
J 灰粗砂層
K ピート層（クルミ、木片、小枝）粘土層
L 青灰粘土層

第19図　SE601・602実測図





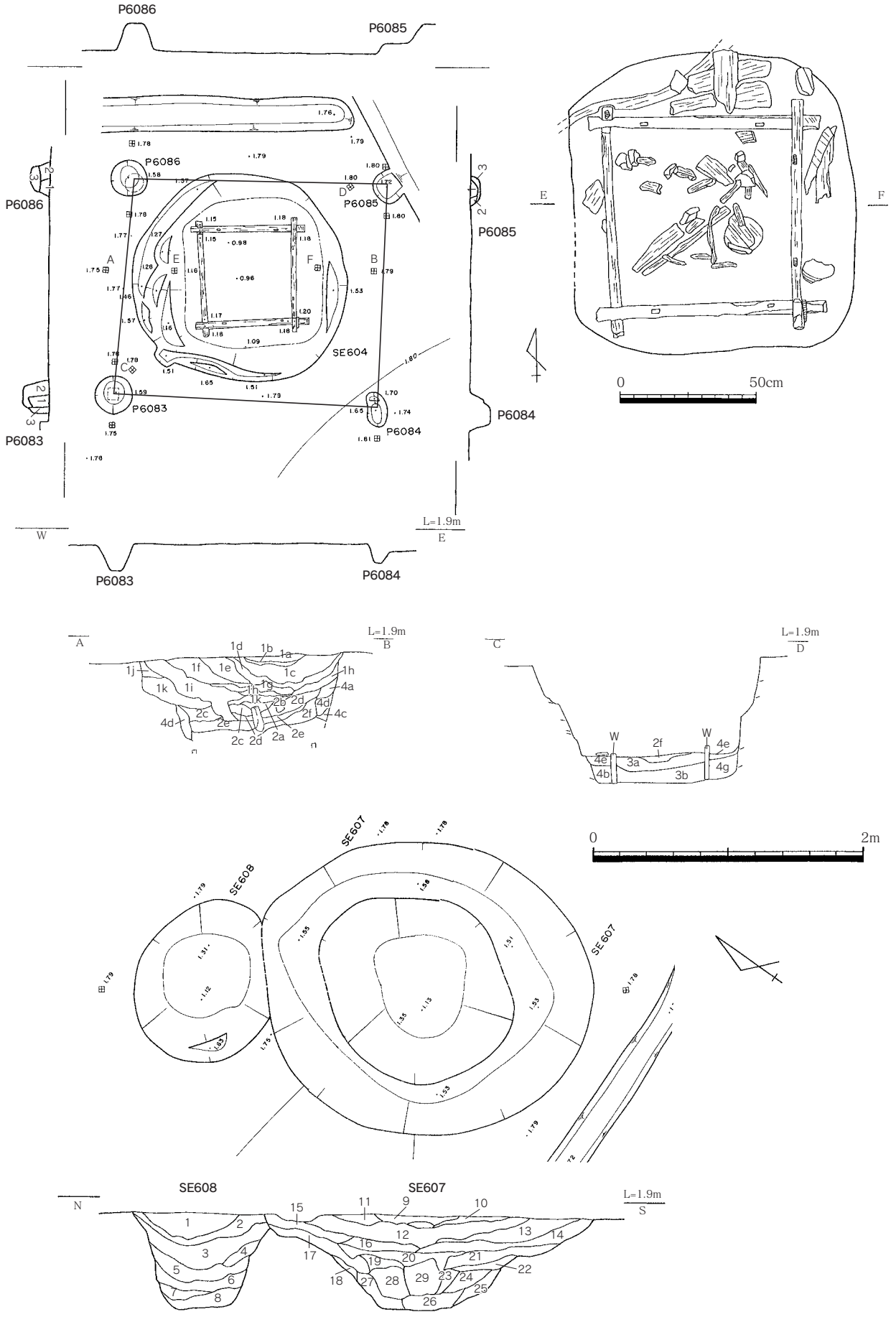


1. 暗灰褐粘質土、暗褐粘質土、灰黄褐粘質土の混合、焼土粒少、炭粒
2. 黒灰褐粘質土、灰黄褐粘質土の混合がブロック状、焼土粒微、炭粒
3. 暗灰褐粘質土、灰黄褐粘質土の混合がブロック状
4. 灰黄褐粘質土、黒灰褐粘質土の混合、ブロック状
5. 黒褐灰粘質土、焼土
6. 黒褐粘質土、暗黄褐砂質ブロックの混合
7. 黒色粘質土、黒褐粘質土、小さな灰黄褐粘質土ブロックの混合、焼土粒微
9. 黒褐色粘質土、シルト系
10. 黒褐色粘土、腐植物混合多
11. 黒灰色粘質土、黄灰色粘土ブロック混、炭粒混
12. 黒灰色粘質土、黄灰色粘土ブロック少混
13. 暗灰色粘質土　緑灰色粘土ブロック多
14. 暗緑灰色粘土（地山）と黒灰シルトの混合
15. 黄灰色シルト（地山）ブロックと黒灰シルトの混合
16. 黒灰色粘土ブロック

A　黄褐色細砂
B　黄灰色シルト～粘土
C　淡灰褐色粘土
D　灰褐粘
E　青灰粘
F　青灰シルト
G　青灰粘（粗砂含む）
H　青灰ピート層

網かけ部分は石材

第20図　SE603実測図



第21図　SE604・607・608実測図

SE604
1a.　灰褐色粘質土（くすんだ橙色砂ブロック少含）
1b.　暗褐色粘質土（くすんだ橙色砂ブロック少含）
1c.　灰褐色砂質土（暗褐色粘土をブロック少含）
1d.　1cよりブロック多い
1e.　灰褐色砂　（暗褐色粘土ブロックと地山質少含）
1f.　1eより粘土ブロック多含
1g.　1eより混入物少、炭化物微含
1h.　暗褐色粘質土（灰褐色砂含む）
1i.　灰褐色砂（黄褐色粘質土ブロック含）
1j.　灰黄色砂質土（灰褐色砂少含）
1k.　暗褐色粘質土（灰褐色砂含）
2a.　暗褐色粘質土と灰褐色粘質土の混合
2b.　暗灰褐色砂質土（地山ブロック、暗褐色粘土ブロック少含）
2c.　暗灰褐色粘質土（地山ブロック、灰褐色砂含）
2d.　2cより地山ブロック多含、炭化物含
2e.　暗褐色粘質土（地山ブロック含、炭化物含）
2f.　暗灰褐色砂質土（同色粘土ブロック含）
3a.　暗灰褐色土（砂、青灰色粘土ブロック含）、廃棄直前などの自然堆積層
3b.　青灰色砂層（暗灰色粘土ブロック含）、廃棄直前などの自然堆積層
4a.　灰褐色粘質土（地山ブロック含）
4b.　黄灰色粘質土（しまりない、地山崩れ）
4c.　暗灰褐色粘質土（地山土少含）
4d.　灰色粘質土（黄灰色砂含）
4e.　暗灰褐色粘質土（砂、青灰色粘土ブロック含）、3a層に類似、廃棄直前などの自然堆積層
4f.　青灰色砂層（暗灰色粘土ブロック少含）、廃棄直前などの自然堆積層
4g.　灰色砂層（粗砂、暗灰色粘土ブロック含）廃棄直前などの自然堆積層
Pit6083
1.　黒褐粘土と暗灰褐粘土の混合
2.　灰褐砂、暗灰褐粘土の混合
3.　暗灰褐シルト、黒褐粘土ブロックの混合
Pit6085
1.　黒褐粘土、茶褐シルトブロック、灰褐シルトブロックの混合
2.　灰褐シルト、黄褐シルト、黒褐粘土ブロック混合
3.　灰褐シルト、暗灰褐シルト少含
Pit6086
1.　黒褐粘土、灰褐砂混合
2.　灰褐砂、黒褐粘土ブロックの混合
3.　灰褐砂、黒褐粘土混合
SE607・608　　(SE608：1～8、SE607：9～29)
1.　黒灰褐粘土、灰褐シルトブロック、茶褐シルトの混合
2.　暗灰褐粘土、茶褐シルトの混合
3.　黒灰褐粘土、茶褐シルトの混合
4.　黒灰褐粘土、灰褐シルトブロックの混合
5.　黒褐粘土、茶褐シルトの混合
6.　黒褐粘土、黒灰褐粘土の混合
7.　灰褐シルト
8.　暗灰褐シルト、灰褐砂の混合
9.　暗茶褐粘土、茶褐シルトの混合
10.　茶褐シルト、灰褐シルトの混合
11.　黒褐粘土ブロック、茶褐シルトの混合
12.　黒褐粘土
13.　暗灰褐粘土、黄褐シルトブロックの混合
14.　黒灰褐粘土、茶褐シルトの混合
15.　黒褐粘土、黄褐シルトブロックの混合
16.　暗褐粘土、茶褐シルトの混合層
17.　暗灰褐粘土、灰褐シルトブロック、茶褐シルトの混合
18.　黄灰褐砂
19.　黒褐粘土、黒灰褐粘土、炭化物の混合
20.　暗灰褐シルト
21.　暗灰褐シルト、黒灰褐粘土の混合
22.　黄灰褐砂
23.　黒灰褐粘土、黄灰褐シルトの混合
24.　黒褐シルト
25.　濁灰褐砂
26.　暗灰褐粘土ブロック、濁灰褐砂の混合
27.　濁灰褐砂
28.　暗灰褐シルト、黄褐砂の混合
29.　黒褐シルト

第３節　土坑

SK603・604（遺構：第22・23図、図版17・18、遺物：第33・53・54図、図版27・32）

［地区］Ａ５　　［調査年度］2002　　［グリッド］Ｌ－102　　［遺構面標高］1.76m

［形状・規模］楕円形（長4.0×短3.15×深0.36m）［断面形］皿形

［堆積］浅い皿状の土坑で、黒色あるいは黒灰褐色粘質土系が土坑底に見られ、上部に黒灰褐色あるいは黒褐色粘質土が周囲から落ち込むように堆積しているので、自然堆積に近い。上層ほど炭化物が多い傾向にある。須恵器や土師器の土器片とともに石や焼石、スラッグ、軽石や土製品などがSK605などと同じように出土している。これらの遺物は廃棄されたものであり、土坑を埋め戻す過程で入り込んだものである。遺物は上層に多い傾向にある。

［出土遺物］上層出土の30は140と同じ土製品で、手づくねによる成形でその痕跡を荒く残す。類例はないが飲食器（おんじき）脚部の可能性を考える。197はレンガのような土製板で一面が黒く焼け焦げている。炉壁に使われたのであろうか。胎土中に籾殻を含み、耐熱効果を高めるためにスサを入れるのと同じ機能を持っている。SE604からも同じものが出土している。207は軽石で、１面に穴があけられているほか、反対側は鋭利なもので切られている。おそらく、大きな塊から切り取ったものであろう。

［特記事項］廃棄土坑群の南端に位置する廃棄土坑で一気に埋められているわけではなく、自然堆積に近い状況で埋まっている。しかし土質が良く似ていることから、比較的短時間に埋まったと推測される。遺物の出土はSK606に比べて少ない。なお、SK604はSK603とSK605の間の不定形な落ち込みとしている。SK604からは上層出土の32の灰釉皿がある。

SK605（遺構：第22・26図、図版17・18、遺物：第33・39・40・53・54図、図版27・31）

［地区］Ａ５　　［調査年度］2002　　［グリッド］Ｌ－102　　［遺構面標高］1.80m

［形状・規模］不正形（長4.42×短3.10×深0.29m）［断面形］皿形

［堆積］土層はSK603とよく似ているが、地山土である黄灰色ブロックを含む。またレンズ状の堆積も見られず、水平堆積に近い。上層ほど炭化物を多く含む傾向は変わらない。

［出土遺物］36･37は土師器椀で38は須恵器長頸壷である。39は須恵器甕で、同一個体がSK606までの広範に及んでいる。133は半跏思惟の菩薩の下げた右足部である。指はなぜか６本表現されており、製作ミスであろう。足先以外は衣の表現が側面に２本の刻線で見られ、正面は不明確ながら衣の襞が指ナデで表現されている。136は胸飾りをとめる瓔珞と思われ、花弁の飾りを線刻で表現している。143は糸巻きのような形状で中心に孔が貫通し一方端面に途中までの小孔が３つある。203･204は軽石で、SE603出土の207と同じように孔や切削痕が見られるので、塊から切り取った残りである。204には溝が掘られ、細分される工程であろう。

［特記事項］SK603の北に接する廃棄土坑で、遺物が多く出土する地点は単一な土層状況にあり、埋まり方がSK603と異なるようである。遺物は、土坑北側に多く出土し廃棄物が土砂主体なのかそれとも器物を多く含んでいるのかという違いである。つまり廃棄過程の違いと認識できる。

SK606（遺構：第22・24図、図版17－19、遺物：第34・39・40・54図、図版27・31）

［地区］Ａ５　　［調査年度］2002　　［グリッド］Ｋ・Ｌ－102　　［遺構面標高］1.70m

［形状・規模］長方形（長5.51×短2.90×深0.4m）［断面形］皿形

［堆積］二箇所の断面状況は微妙に異なるが、おおむね下には黒灰褐色土に地山ブロックを含み、上部にはブロックを含むのが少ない傾向にある。断面Ｅ－Ｆではレンズ状堆積の最上層に黄褐色砂質土

があり、最終的には人為的に埋め立てられた土であろう。土の堆積はSK603に近く、小さな土砂の単位で埋まっていく過程が読み取れる。

［出土遺物］41から47はすべて土師器である。131は仏像の上半部と思われ、下半が中空となって組み合わすことができるようになっている。背後に腰紐が表現され、衣の襞が線刻で表現されている。134も座位の仏像のひざ部分。135は如来頭部で、裏面がやや反りをもつようだが平坦である。磨滅が激しいが、眉や鼻筋の突出がみられ、口や耳が線刻で表現されている。137は仏像の体部と思われ、線刻は衣の襞であろう。139は僧形で目・耳・鼻・口が線刻で表現される。悲しげな下向きの目線で口をあけている。六波羅密寺の空也像のように念仏を唱えているのであろうか、それとも法隆寺五重塔北面塑像群のように釈迦入滅の弟子の慟哭を表現しているのであろうか。140は手づくねの飲食器（おんじき）、141は熱を受けている。142は非常に薄い手づくねの土器で、胎土は砂が少ないが製塩土器かもしれない。144は上部が大きく窪み、反対側に刺突がある。何らかの部品であろう。205と206は軽石で205が小さく切られて砥石に使われる製品で、206は塊から切り取った残余である。208は上面が甚だしい熱を受けて周囲が剥離しているもので、鍛冶の金床がわりに使われた石であろう。

［特記事項］SK605とは東端に溝でつながっており一連の土坑である。廃棄土坑中最も多く遺物を出土している。比較的大きな川原石が多く見られるのも特徴である。

SD608（遺構：第22・23図、遺物：第35・40図、図版29）

［地区］Ａ５　［調査年度］2002　［グリッド］Ｍ－102　［遺構面標高］1.80m

［形状・規模］　形（長2.3×短1.0×深0.24m）［断面形］逆台形

［堆積］断面図が取られていないので堆積状況は不明だが、SD328と同じものであろう。

［出土遺物］81は須恵器甕。148は石帯の破片で大きさの推定は不可能。

［特記事項］SK603と重複する遺構であり、溝として報告すべきだがSD638同様に理解した。

SD638（遺構：第22・24図、図版18・20、遺物：第37・40図、図版20）

［地区］Ａ５　［調査年度］2002　［グリッド］Ｋ－102　［遺構面標高］1.64m

［形状・規模］　形（長5.10×短0.80×深0.12m）［断面形］逆台形

［堆積］土層注記が無いので廃棄土坑と土層の比較はできないが、周囲から土が入っていく様子を見ると、同じような堆積状況であると判断できる。

［出土遺物］104は緑釉皿で外面に工具が当たった刻がある。106は体部に突帯があり、双耳瓶であろう。107は壷だが、頸部の屈曲がなだらかであまり見かけない器形である。108は内黒椀。109～112は土師器椀。147は断面台形を呈し、外面に熱を受けているようであるので、鋳型の内型の可能性も考えられる。

［特記事項］溝の遺構記号を調査中に与えているが、遺物の出土状態から廃棄土坑群と共通する遺構である。SK606と一連の遺構であり、廃棄土坑群のひとつである。遺物の出土はSK606と連続的だが、より細かい遺物が出土する傾向にある。遺構の大きさからすれば当然であり、器物の廃棄が土砂の中に入っている状態で行われているからである。

SK607（遺構：第25図）

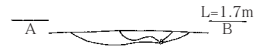
［地区］Ａ４　［調査年度］2002　［グリッド］Ｒ－104　［遺構面標高］1.85m

［形状・規模］円形（長2.60×短2.48×深0.57m）［断面形］すり鉢形

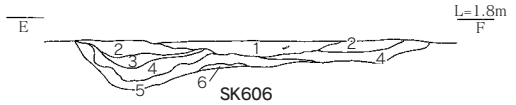
［堆積］調査記録なし

［出土遺物］須恵器、土師器が少量出土しているのみである。

［特記事項］なし

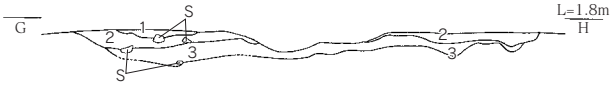


SD638



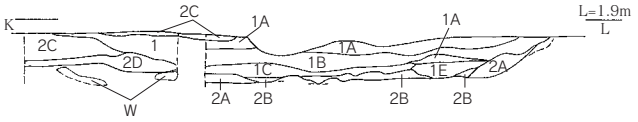
SK606

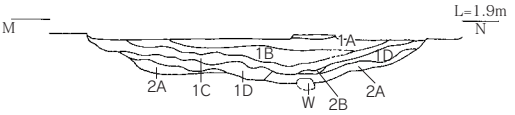
SK606（断面C－D）
1．黒褐粘土
2．黒灰褐粘土
3．2と地山ブロックの混合
4．地山ブロックと2の混合
（断面E－F）
1．淡黄褐色砂質土
2．暗灰褐色砂質土、炭化物少含
3．暗灰褐色土、しまりのある土
4．暗灰褐色土、地山ブロックを含
5．暗灰褐色土、地山の土を多含
6．地山質、5の土を含



SK605

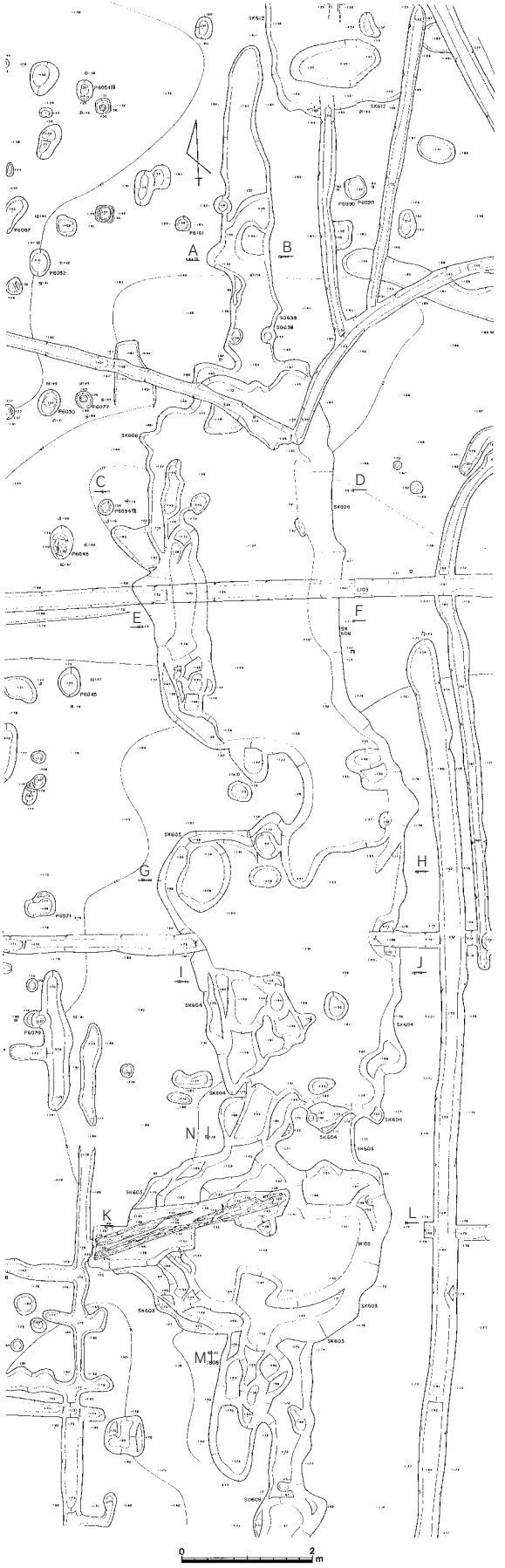
SK605（断面G－H）
1．暗灰褐粘土、炭化物多
2．黒灰褐粘土、黄灰褐シルトブロック（地山土ブロック）含、炭化物多
3．黒褐粘土、黄灰褐シルトブロック（地山土ブロック）多含、炭化物含
（断面I－J）
1D．黒灰褐粘質土層、炭粒含
1E．黒褐粘質土層、炭粒含
2．黒灰褐粘質土と灰黄褐砂粘質土ブロックの混合
3．地山、砂質層





SK603

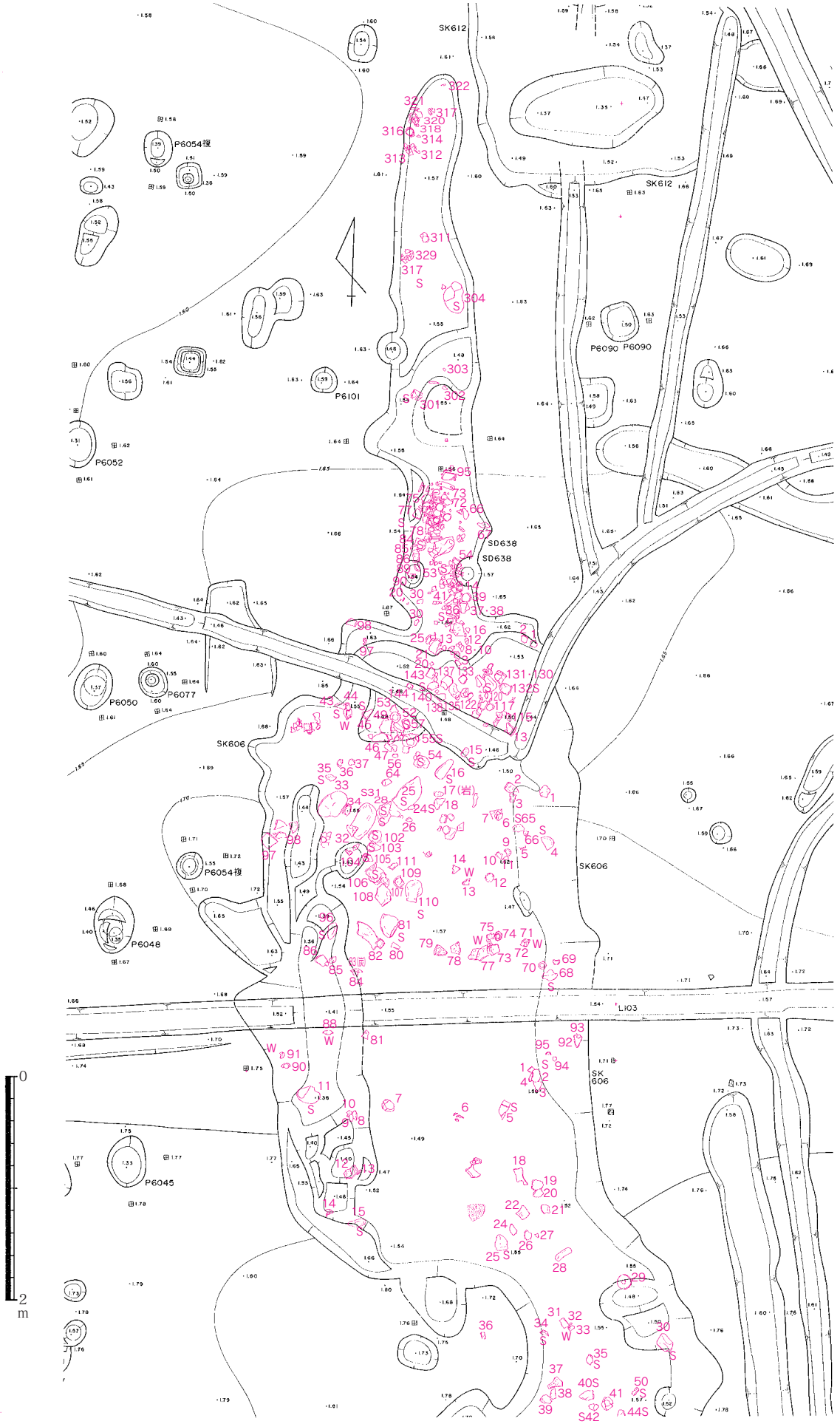
SK603
1A．黒灰褐粘土、黒灰褐粘質土、炭含、下に炭多
1B．黒褐粘質土、炭含、下に炭多
1C．黒色粘質土、炭含、下に炭多
1D．黒色粘質土と灰黄褐粘質土ブロックの混合
1E．黒灰褐粘質土、灰黄褐粘質土の混合
2A．灰黄褐粘質土層と砂質土層の混合
2B．暗灰褐粘質土



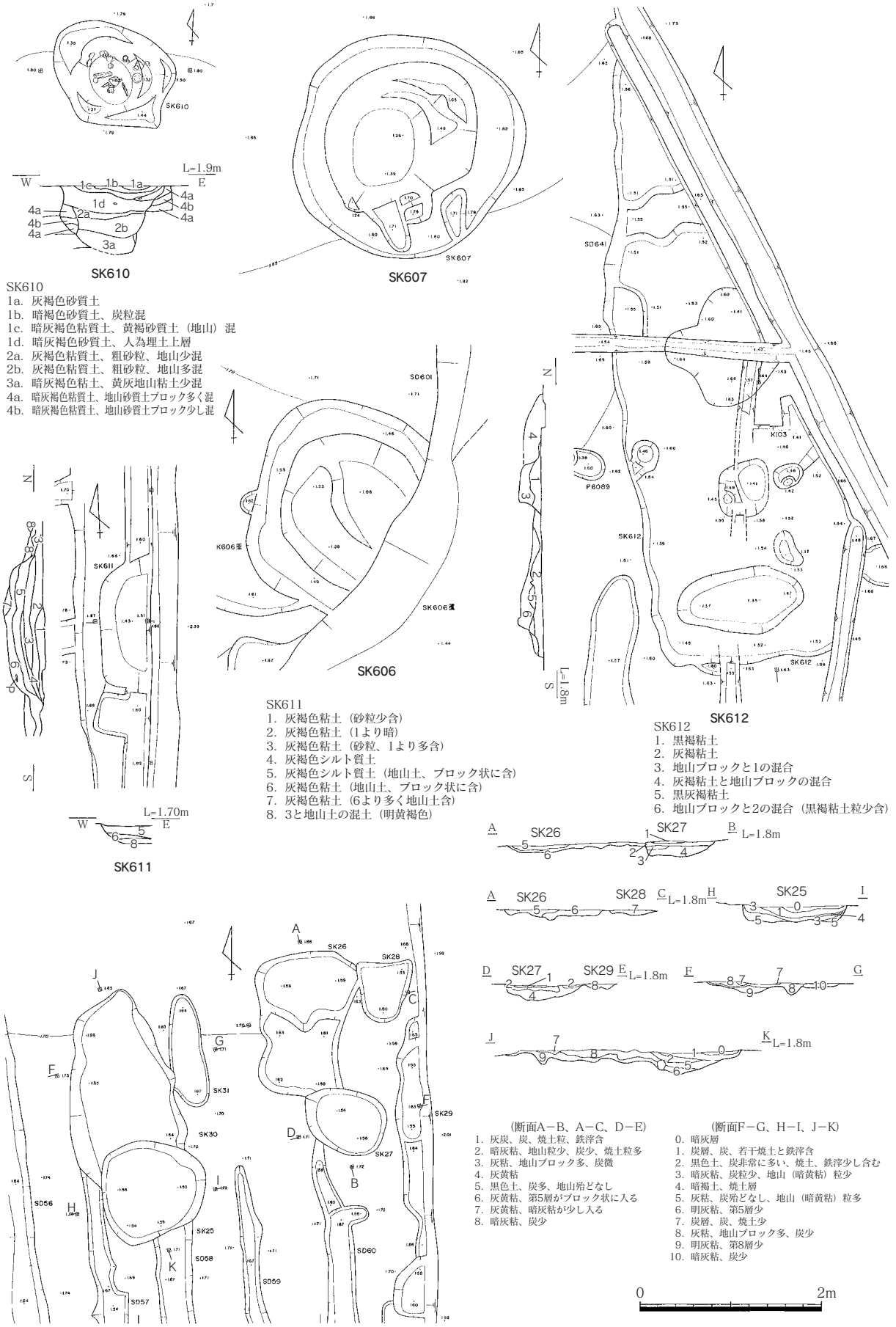
0　2m

第22図　廃棄土坑関係実測図

第23図　SK603・604遺物出土状況



第24図　SK606・SD638遺物出土状況



SK610
1a. 灰褐色砂質土
1b. 暗褐色砂質土、炭粒混
1c. 暗灰褐色粘質土、黄褐砂質土（地山）混
1d. 暗灰褐色砂質土、人為埋土上層
2a. 灰褐色粘質土、粗砂粒、地山少混
2b. 灰褐色粘質土、粗砂粒、地山多混
3a. 暗灰褐色粘土、黄灰地山粘土少混
4a. 暗灰褐色粘質土、地山砂質土ブロック多く混
4b. 暗灰褐色粘質土、地山砂質土ブロック少し混

SK611
1. 灰褐色粘土（砂粒少含）
2. 灰褐色粘土（1より暗）
3. 灰褐色粘土（砂粒、1より多含）
4. 灰褐色シルト質土
5. 灰褐色シルト質土（地山土、ブロック状に含）
6. 灰褐色粘土（地山土、ブロック状に含）
7. 灰褐色粘土（6より多く地山土含）
8. 3と地山土の混土（明黄褐色）

SK612
1. 黒褐粘土
2. 灰褐粘土
3. 地山ブロックと1の混合
4. 灰褐粘土と地山ブロックの混合
5. 黒灰褐粘土
6. 地山ブロックと2の混合（黒褐粘土粒少含）

（断面A−B、A−C、D−E）
1. 灰炭、炭、焼土粒、鉄滓含
2. 暗灰粘、地山粒少、炭少、焼土粒多
3. 灰粘、地山ブロック多、炭微
4. 灰黄粘
5. 黒色土、炭多、地山殆どなし
6. 灰黄粘、第5層がブロック状に入る
7. 灰黄粘、暗灰粘が少し入る
8. 暗灰粘、炭少

（断面F−G、H−I、J−K）
0. 暗灰層
1. 炭層、炭、若干焼土と鉄滓含
2. 黒色土、炭非常に多い、焼土、鉄滓少し含む
3. 暗灰粘、炭粒少、地山（暗黄粘）粒少
4. 暗褐土、焼土層
5. 灰粘、炭殆どなし、地山（暗黄粘）粒多
6. 明灰粘、第5層少
7. 炭層、炭、焼土少
8. 灰粘、地山ブロック多、炭少
9. 明灰粘、第8層少
10. 暗灰粘、炭少

0　2m

第25図　土坑実測図

SK608（遺物：第34図、図版27）

［地区］Ａ５　　［調査年度］2002　［グリッド］Ｎ－102　　［遺構面標高］1.78m

［形状・規模］方形？（長1.36×短0.56×深0.22m）［断面形］逆台形

［堆積］調査記録なし

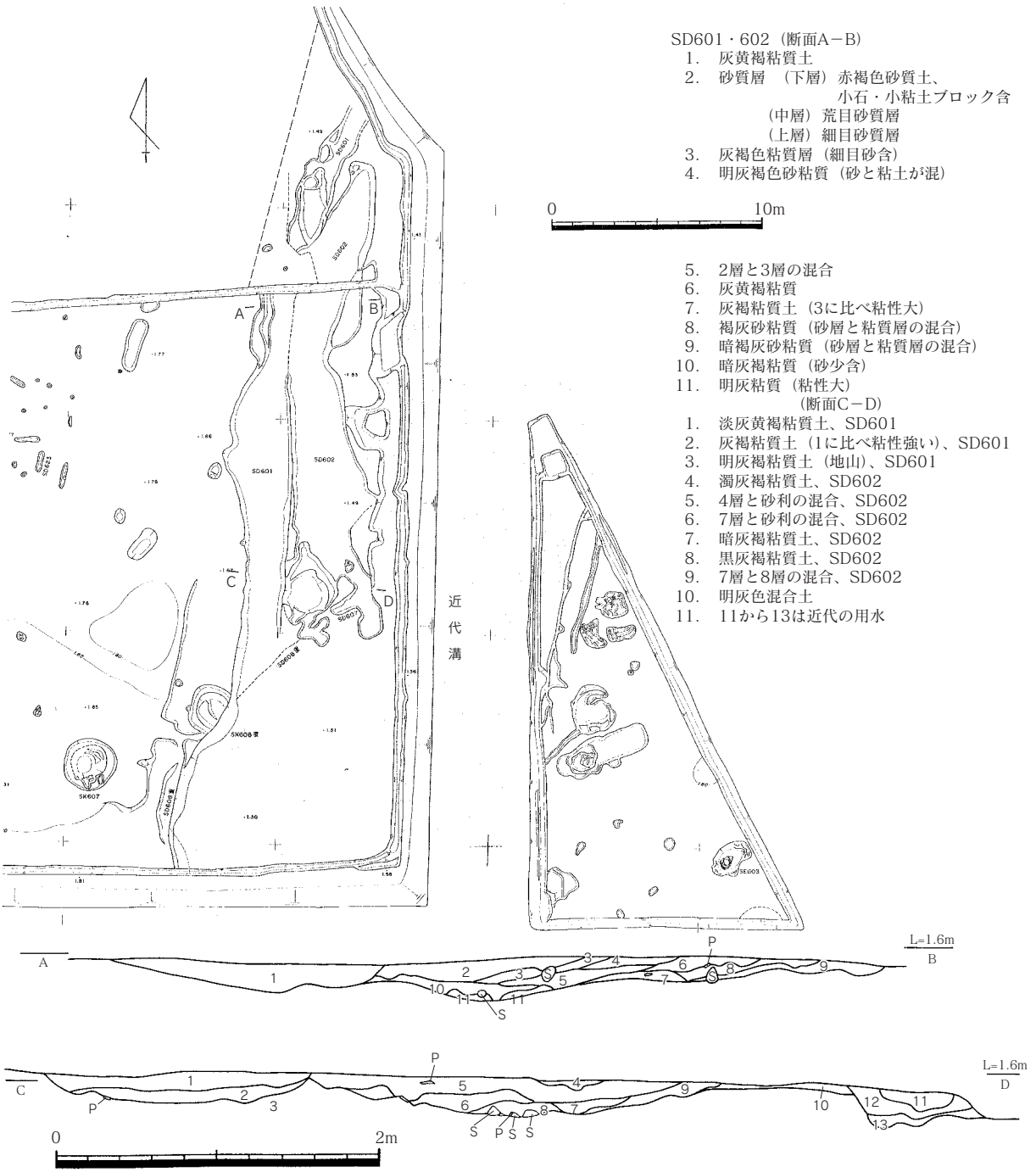
［出土遺物］遺物の出土は極少量。

［特記事項］なし

SK610（遺構：第25図、遺物：第34図、図版27）

［地区］Ａ５　　［調査年度］2002　［グリッド］Ｍ－103・104　　［遺構面標高］1.79m

［形状・規模］円形（長1.48×短1.10×深0.75m）［断面形］底円方形



第26図　SD601実測図

［堆積］底には暗灰褐色粘土があり、上部に中層としてその粘質土、上層に灰褐色土がある。周囲の一部に地山ブロックを多く含む暗灰褐色粘質土があり、井戸枠掘り方埋土と調査所見がある。

［出土遺物］49は須恵器高台杯で、50は土師器椀で底部は小さく回転糸切である。実測以外にも内黒椀や長胴甕片等少量が出土している。

［特記事項］遺物が上層と中層の間からまとまって出土した。また、調査中は井戸枠抜き取りを想定していたが、その抜き取り痕跡は明確でなく、土坑内埋土は水平に安定して堆積しており、井戸としても枠を持つものとは考えがたい。廃絶の時期は、古代Ⅴ期である。

SK611（遺構：第25図）

［地区］Ａ８　［調査年度］2002　［グリッド］Ｎ－101　［遺構面標高］1.67m

［形状・規模］全形不明（長1.46×短0.56×深0.44m）［断面形］方形

［堆積］堆積土は、全体的にレンズ状の自然堆積を示し、底には灰褐色粘土があり、中層にはそのシルトとなり、上層には再び灰褐色粘土がある。中・下層は地山系の土がブロック状に入っている。

［出土遺物］遺物の出土はない。

［特記事項］なし

SK612（遺構：第25図）

［地区］Ａ５　［調査年度］2002　［グリッド］Ｊ・Ｋ－102　［遺構面標高］1.63m

［形状・規模］全形不明（長6.70×短2.04×深0.28m）［断面形］不定形

［堆積］アゼの位置が土坑を横断していないので一定の堆積状況を知ることは難しい。黒灰褐色粘質土や黒褐色粘質土と、他の土坑に比べてやや色調が暗いようである。

［出土遺物］遺物の出土はほとんどない。

［特記事項］浅い落ち込みの中にいくつかの落ち込みがあるという土坑。

SK25～27（遺構：第25図）

［地区］Ａ２　［調査年度］2000　［グリッド］Ｐ－97

［遺構面標高］SK25（1.73m）、SK26（1.68m）、SK27（1.71m）、SK28（1.63m）、SK29（1.64m）、SK30（1.72m）

［規模］SK25（1.25×1.04×0.23）SK26（1.56×0.92×0.12）SK27（0.94×0.68×0.17）
SK28（0.65×0.53×0.06）SK29（1.13×0.3×0.06）SK30（1.67×1.18×0.13）

［堆積］暗灰粘や灰黄粘が土坑下部に堆積し、上層に炭や焼土、スラグを含む層がある。

［出土遺物］スラグや土師器や須恵器小破片が僅かながら出土している。

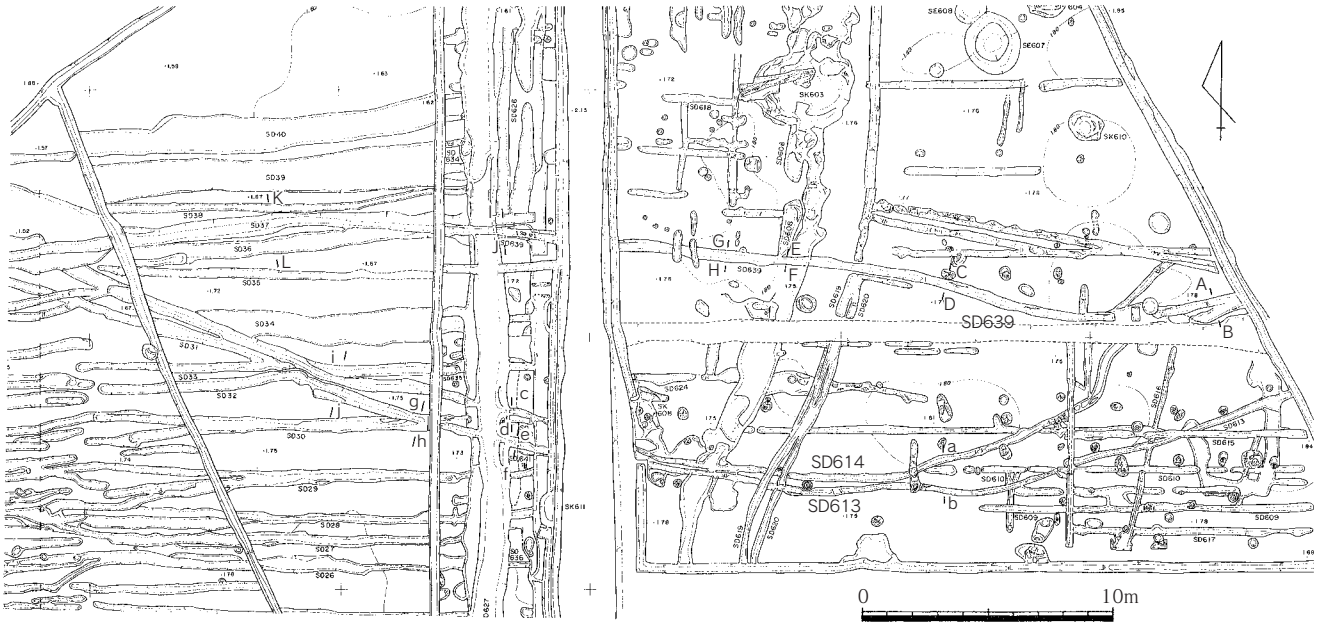
［特記事項］これらの土坑は、SK603等の廃棄土坑とは位置的に50mほど南西にあたり、土器や土製品、焼石などを大量に含まず、しかも土坑上層にスラグ等の鍛冶関係の廃棄物があるという違いがある。SK603等との間には類似する土坑は見られず、これら土坑群は廃棄土坑群との関連は薄いかもしれない。しかし、年代的に、古代Ⅵ期で10世紀はじめごろという年代が近いことや、鍛冶関係廃棄物を出した作業場が確定できていない以上、関連を否定することも難しい。

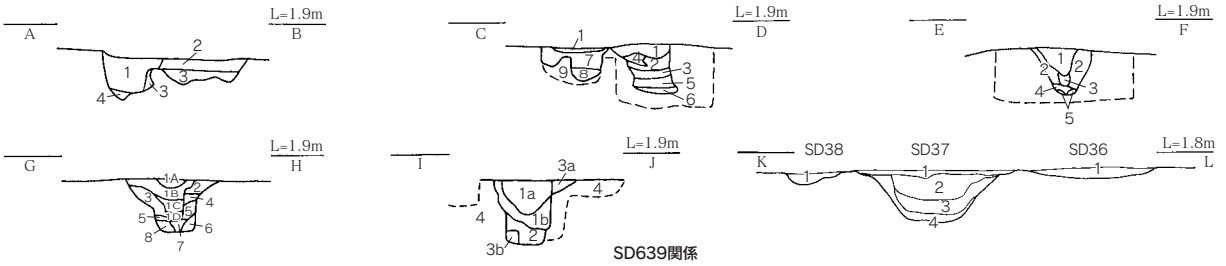
第４節　溝

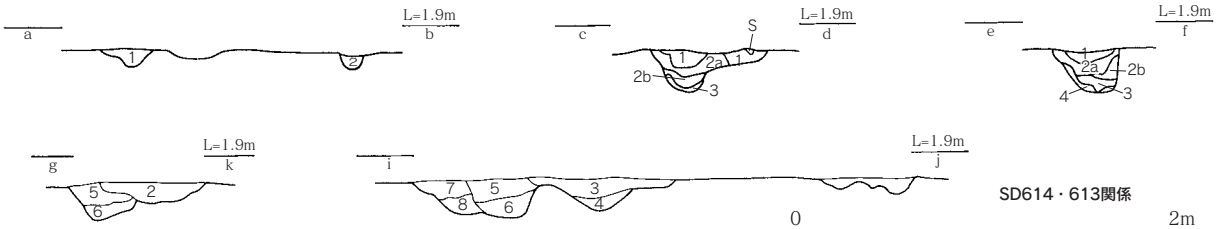
SD601・602（遺構：第26図、遺物：第52図、図版28）

［地区］Ａ４　［調査年度］2002　［グリッド］Ｐ・Ｑ・Ｒ－104　Ｏ・Ｐ・Ｑ－105

［遺構面標高］［幅］［深さ］［延長］SD601：1.67m、3.3m、0.2m、21m







第27図　SD613・614・639実測図

A 5区SD639（断面A－B）
1. 灰褐粘土多、黒褐粘土ブロック混合
2. 明灰褐粘土多、黒褐粘土ブロック混合
3. 黒灰褐粘土、黒褐粘土混合
4. 濁灰褐粘土

（断面C－D）
1. 黒灰褐粘土、茶褐シルト、灰褐シルト混合、炭化物含
2. 黒粘土、黒灰褐粘土、黄灰褐シルトブロック、茶褐シルト混合
3. 暗灰褐シルト、茶褐シルト混合
4. 黄灰褐シルト、暗灰褐シルト、茶褐シルト混合
5. 黒粘土、暗灰褐シルト、茶褐シルト混合
6. 灰褐粘土
7. 黒灰褐粘土、黄灰褐シルトブロック、茶褐シルト混合、炭化物含
8. 暗灰褐シルト、炭化物混合
9. 灰褐砂多、黄灰褐シルト、暗灰褐粘土混合

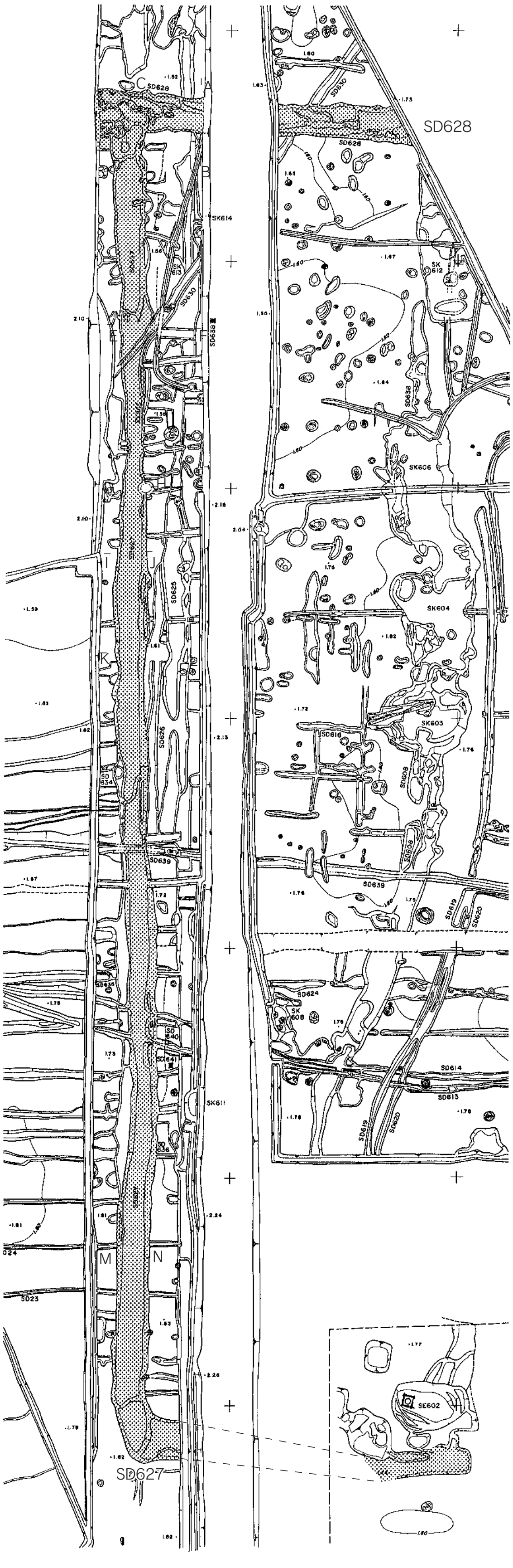
（断面E－F）
1. 黒褐粘土、茶褐シルト、灰褐シルトの混合、炭化物含
2. 黒灰褐粘土、黄灰褐シルトブロック、茶褐シルト、灰褐シルト混合、炭化物含
3. 黒褐粘土、黄灰褐シルトブロック、茶褐シルト、灰褐シルト混合、炭化物含
4. 灰褐シルト
5. 黄灰褐シルト、灰褐シルト混合

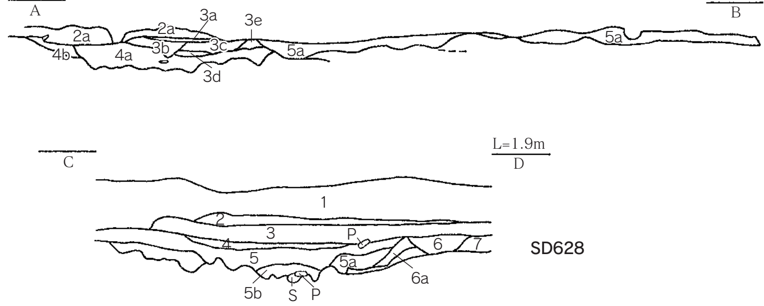
（断面G－H）
1A. 黒灰褐粘土
1B. 黒褐粘土
1C. 黒灰褐粘土
1D. 暗灰褐粘土
2. 黒灰褐粘土、黄灰褐シルト混合
3. 暗灰褐粘土、黄灰褐シルト混合
4. 黒灰褐粘土
5. 黒灰褐粘土、黄灰褐シルト混合、炭化物
6. 暗灰褐粘土、茶褐粘土混合、炭化物
7. 黒褐粘土、炭化物
8. 黒褐粘土、黄灰褐シルト混合、炭化物

（断面I－J）
1a. 暗褐色土　炭小粒中混
1b. 暗褐色土　黄褐土粒少混
2. 暗灰褐色粘質土　軟質、灰色粘土ブロック、黒褐粘質土ブロック混
3a. 暗灰褐色土　黄褐色土粒多
3b. 暗灰褐色土　黄褐色土粒多、黒褐色粘土粒混
4. 明黄褐色粘質土－地山

（断面K－L：SD36・37・38）
1. 暗茶褐粘、炭微、地山殆どなし
2. 暗灰粘、土器多、炭多
3. 暗灰褐粘、土器無、炭少、シルト若干含む
4. 暗灰褐粘、粘質大、地山（暗黄粘）ブロック多

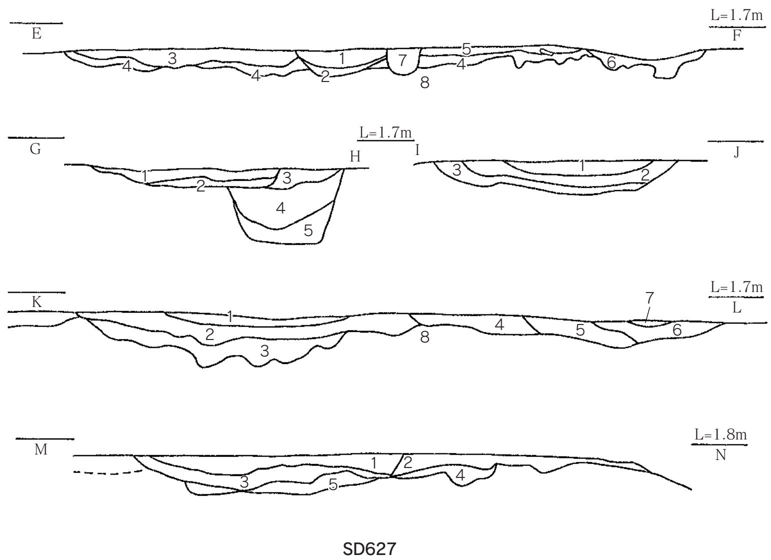
SD613、614関係の土色は62ページ





SD628（断面A－B）
2a. 灰褐色粘質土
3a. 暗褐色粘質土
3b. 暗褐色粘質土（炭粒を多に含）
3c. 暗褐色砂質土（炭粒を多に含）
3d. 暗褐色粘土（黒褐粘土混）
3e. 暗褐色粘質土（地山ブロック混）
4a. 黒褐色粘質土（地山ブロック、炭化物混）
4b. 暗灰シルト、黄灰砂の混合層
5a. 暗褐色粘質土（地山ブロック混、炭粒少混）

（断面C－D）
1. 灰褐色土
2. 黄褐色土
3. 暗灰褐色土（炭粒微含）
4. 暗灰褐色砂質土（炭粒微含）
5. 暗灰色土（炭粒、地山土粒状に含）
5a. 暗灰色土（5より地山粒が大）
6. 淡暗灰色土
6a. 淡暗灰色土（6より地山粒が多）
7. 淡灰黄褐色砂質土（地山質土を多含）



SD627 （断面E－F）
1. 黒褐色粘質土（炭粒、茶褐色粘質土含）、SD630
2. 1層土に地山土（灰黄褐粘質土混）、SD630
3. 暗灰褐色粘質土、茶褐色粘質土（焼土か？）混合（炭粒含）、SD627
4. 3層土に地山ブロック小混、SD627
5. 黒灰褐粘質土（細かな茶褐色粘質土－焼土か？）混、炭粒含、SD626
6. 黒灰褐粘質土、黄褐色粘質土混合層、炭粒含、SD625
7. 灰褐色粘質土層、近現代の溝

（断面G－H）
1. 黒褐色粘質土
2. 暗灰色粘質土（黄褐色粘質土ブロック状に含む）
3. 暗灰色粘質土（黄褐色粘質土少量含む）
4. 黄褐色粘質土、黄褐色砂質土の混土
5. 黄褐色砂質土

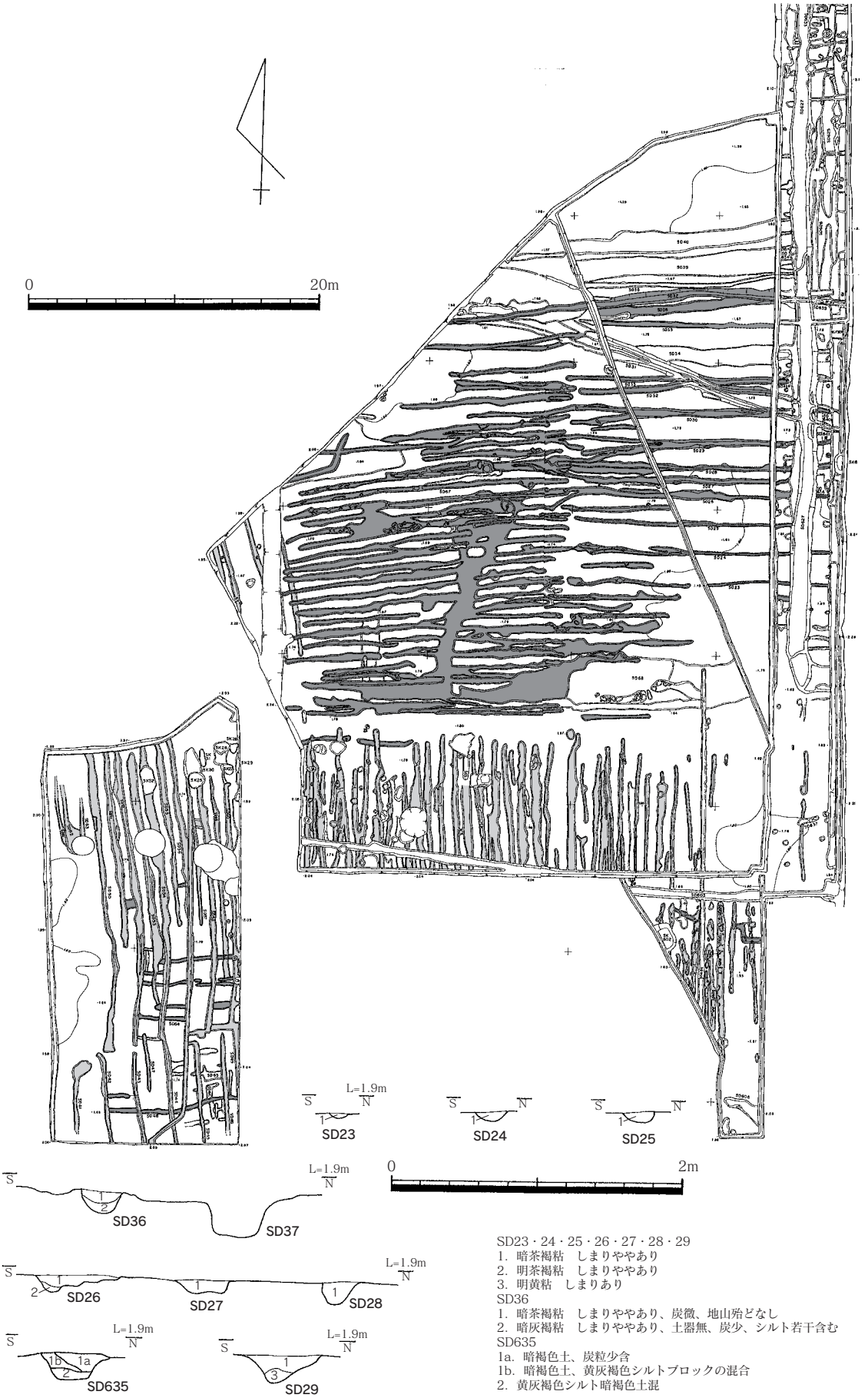
（断面I－J）
1. 暗褐色粘質土（炭粒少含）
2. 暗褐色粘質土
3. 暗褐色粘質土（黄褐色粘質土、ブロック状に含）

（断面K－L）
1. 濁灰褐粘質土（炭粒含）、SD627堆積土層
2. 暗灰褐粘質土（炭粒含）、SD627堆積土層
3. 黒灰褐粘質土（地山小ブロック混）、SD627堆積土層
4. 2層土に地山小ブロック混入（炭粒含）
5. 2層土に茶褐色粘質土混入（炭粒含）
6. 明灰褐粘質土（ビニール混）、現代の溝
7. 6層土に茶褐色粘質土混入、現代の溝

（断面M－N）
1. 灰褐色粘土
2. 黒灰色粘土
3. 灰褐色粘土（シルトブロック含）
4. 黒灰色粘土（シルトブロック含）
5. 灰褐色粘土（シルト質土少含）

0　10m　　0　2m

第28図　条里区画溝（SD627・628）実測図



SD23・24・25・26・27・28・29
1．暗茶褐粘　しまりややあり
2．明茶褐粘　しまりややあり
3．明黄粘　しまりあり
SD36
1．暗茶褐粘　しまりややあり、炭微、地山殆どなし
2．暗灰褐粘　しまりややあり、土器無、炭少、シルト若干含む
SD635
1a．暗褐色土、炭粒少含
1b．暗褐色土、黄灰褐色シルトブロックの混合
2．黄灰褐色シルト暗褐色土混

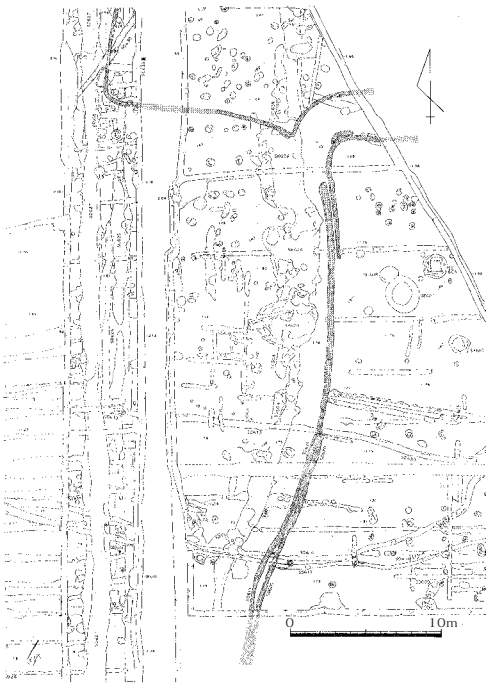
第29図　畝溝平面図（1/400）・断面図抄（1/40）

SD602:1.53m、4.0m、0.24m、19.5m

［堆積］SD601は灰黄褐色粘質土があり、SD602埋土である砂質層を切り込んでおり、SD601のほうが新しい流れである。SD602は灰褐色系の土で粘質土とともに砂層を多く含み、それなりの流れが推測できる。

［出土遺物］62と63は緑釉椀である。64は須恵器蓋で墨書「□女」。70は肩衝壷、75は宝珠のつまみを持つ蓋。76は土師器内黒椀。

［特記事項］近代の用水遺構と重複する溝で、本来は大溝であるが底部分しか遺存せずあたかも二つの流れとなって見えるものである。



第30図　側溝状小溝平面図（1/100）

SD613・614（遺構：第27図、図版22）

［地区］A5　［調査年度］2002　［グリッド］N－102・103・104

SD613：［遺構面標高］1.75m　［幅］0.3m　［深さ］0.1m　［延長］26.3m

SD614：　1.75m　0.4m　0.1m　21.4m

［堆積］溝幅に比べて深さのある溝で、西ほど深いので、そのほうに流れていたと推測できる。底には灰褐色土、上には暗灰褐色土がある。

［出土遺物］遺物の出土はない。

［特記事項］SD613と614はほぼ並行してはしる類似する小溝で、どちらかが作り変えであると思われ、断面i－jではSD613が切っているとなっている。条里溝（SD627）との切りあいは調査記録がないので分からないが、おそらくそれよりも新しいであろう。

SD627・628（遺構：第28図、図版23、遺物：第36・37図、図版29）

［地区］A8　［調査年度］2002　［グリッド］I～P－101

SD627：［遺構面標高］1.55～1.82m　［幅］1.6m　［深さ］0.28m　［延長］58.8m

SD628：　1.52m　1.8m　0.32m　14.7m

［堆積］比較的単純な堆積で、暗灰褐色粘質土や黒灰褐色粘質土があり、それが自然堆積のように溝の傾斜に沿って見られる。SD628もほぼ同じだが少し明るい土の色調である。また、溝底の凹凸も見られるという違いがある。

［出土遺物］SD627は以下のとおり。85は短頸の壷で、86の須恵器甕は外面細かい格子タタキ、87の内面は叩かれて潰れたような小さな剥離痕がある。138は仏像の一部で手を合掌している。145は土製品だが不明品。SD628は以下のとおり。93・94は緑釉椀である。93は花弁様に切り込みを入れ六花弁が推定できる。98は須恵器短頸壷、102は土師器皿。103は土師器鍋の把手である。

［特記事項］SD627と628は一体的な溝で、条里にかかわる溝であるが、条里坪界溝にすると非常に貧弱であるので、条里の区分を意識している区画溝と考える。SD627は南北約56mで東西の溝と交差する。南側の交差は東に曲がるのみで、北の交差は十文字状とおもわれるものの、北への溝は浅く途中で途切れ溝の伸びは不明確である。なおSD630はこの溝を切っている。建物や廃棄土坑群がこの溝によって区画されており、同時存在している。仏像関係の土製品もSD628から出土し、埋没時期も近

いことがわかる。10世紀はじめごろであろう。

SD639（遺構：第27図、図版22）

［地区］Ａ１・３・５・８　　［調査年度］2002

［遺構面標高］　　［幅］0.4m　［深さ］0.3m

［堆積］断面E－FやG－Hでは黒褐色土や暗褐色土が板材抜き取り後の流入土として見られ、その掘り方の土として灰褐色土のブロックを含むなどの土が入っている。明確な時期はわからないが、畝溝を切っていることと近世以降の側溝状小溝を切っていることから、この遺構も近世以降の可能性がある。

［出土遺物］遺物の出土はない。

［特記事項］溝幅の割には深い溝で、底も平坦である。板塀を埋め込んだ溝と考えている。

側溝状小溝（遺構：第30図）

［地区］Ａ４・５・８　　［調査年度］2002

［堆積］記録されていないが、浅いので単一層であろう。

［出土遺物］遺物の出土は皆無である。

［特記事項］遺構番号がつけられていない。２本の並行する溝からなり、SE604北８mで東から南に向きを変えるが、北の溝はSK606で直角に曲がってSB602と重複して止まる。この延長にはSB602北西の隅柱と重複する溝がまた直角に曲がって北東に続くが、一連の遺構であるかどうか不明。南の溝は東から南に向きを変えて５mほどで一旦途切れる。西となりに小溝が平行してＡ４区ではSD619･620に分かれる。また、Ａ４区ではこれらに並行するように溝が流れSK603などの廃棄土坑群の上を通り、調査所見で近世（判断根拠は不明）の溝と認識している。これらを一連の遺構群と捉えると中世から近世耕作地の道路遺構となろう。

畝溝群（遺構：第29図、図版24・25）

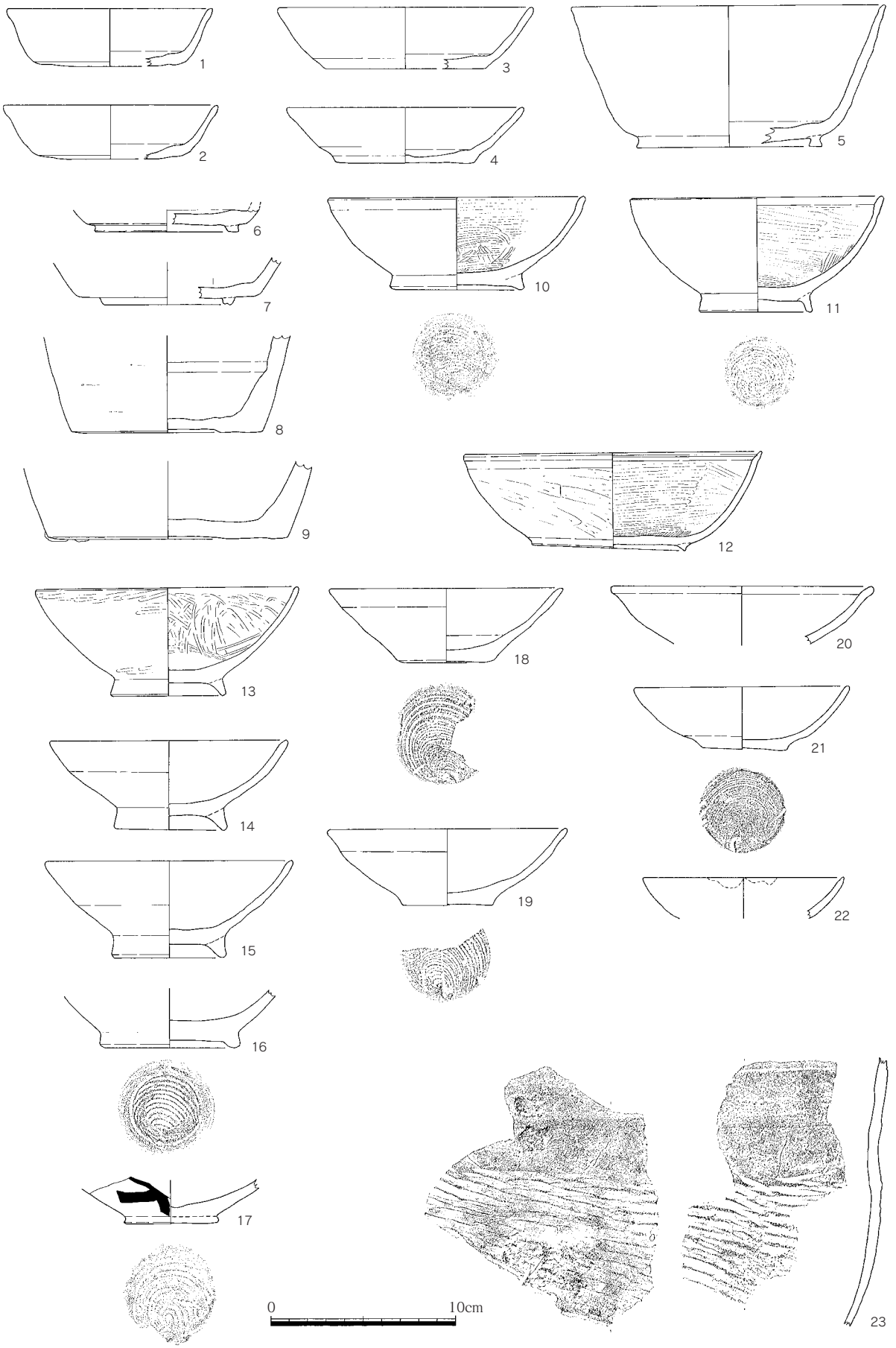
［地区］Ａ１～３・７・８　　［調査年度］2002

［堆積］暗褐色系の粘質土の単一層が多い。

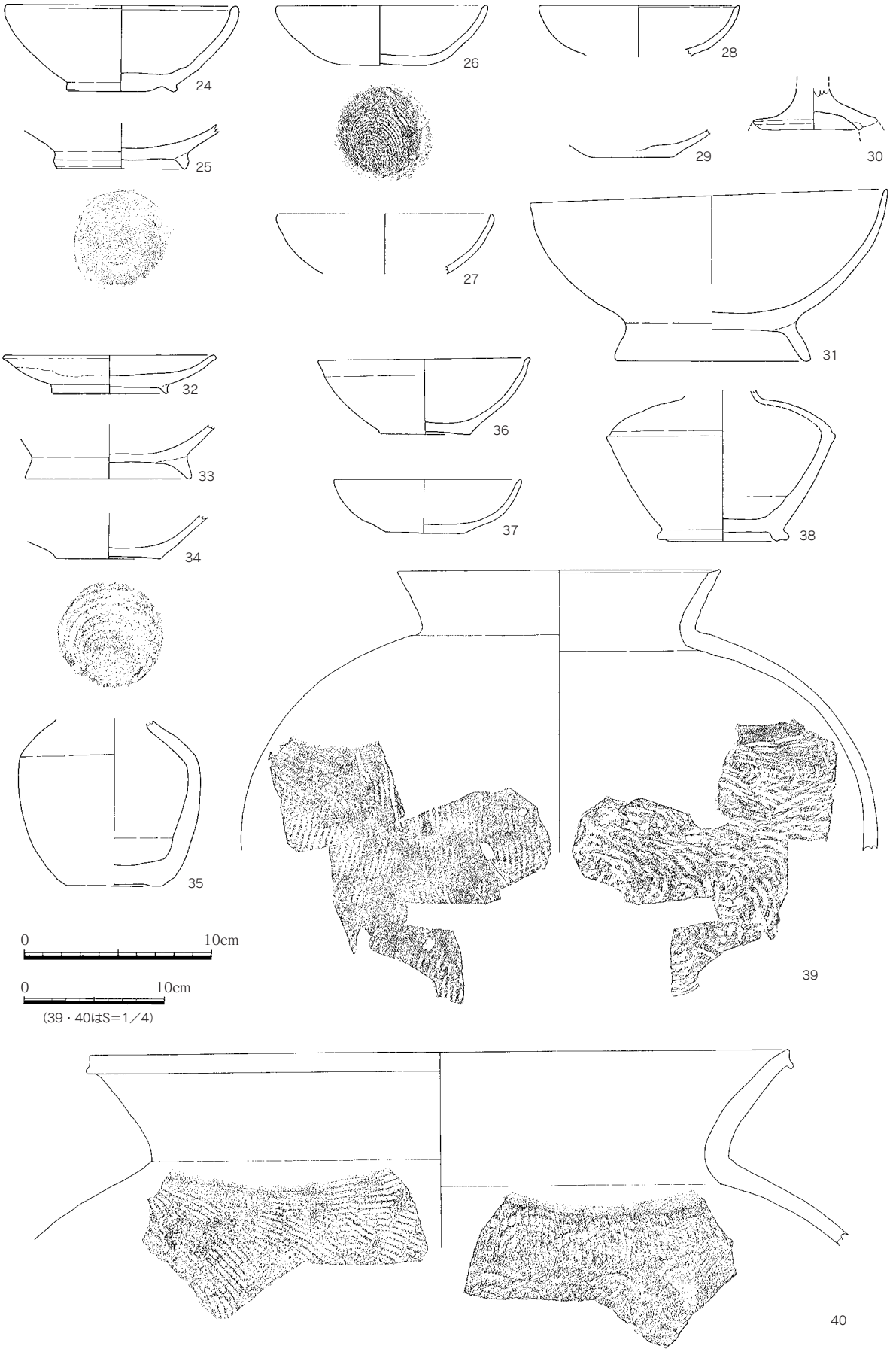
［出土遺物］遺物の出土は皆無である。

［特記事項］溝は幅30cmから60cmを測るものがある。条里溝の区画より南側が南北方向の畝溝となり、北側が東西方向の畝溝となる。畝田C遺跡では畝溝が古代の建物に切られていたが、ここでは一部条里溝と重複するが基本的にその区画を意識して畝が作られていることから、同時存在していることが分かる。詳しく見てみる。南側の区画では北から20mで畝溝群の途切れる部分がある。北側の区画では、条里区画溝から35mで畝溝の西端がそろっており、それより西は一部重複して西に傾くように畝溝がある。この区画の畝溝も西から20mくらいで溝の端がそろう部分があり、一つの区画が存在したのであろう。しかし、この区画を超えて畝溝も部分的に伸びており、それが条里溝と重複している。切り合い関係が記録されていないので明確にはいえないが、条里溝に切られているSD613･614が畝溝に切られていることから、条里溝掘削以前も畑地としての畝溝が広がっていたことが推測できる。

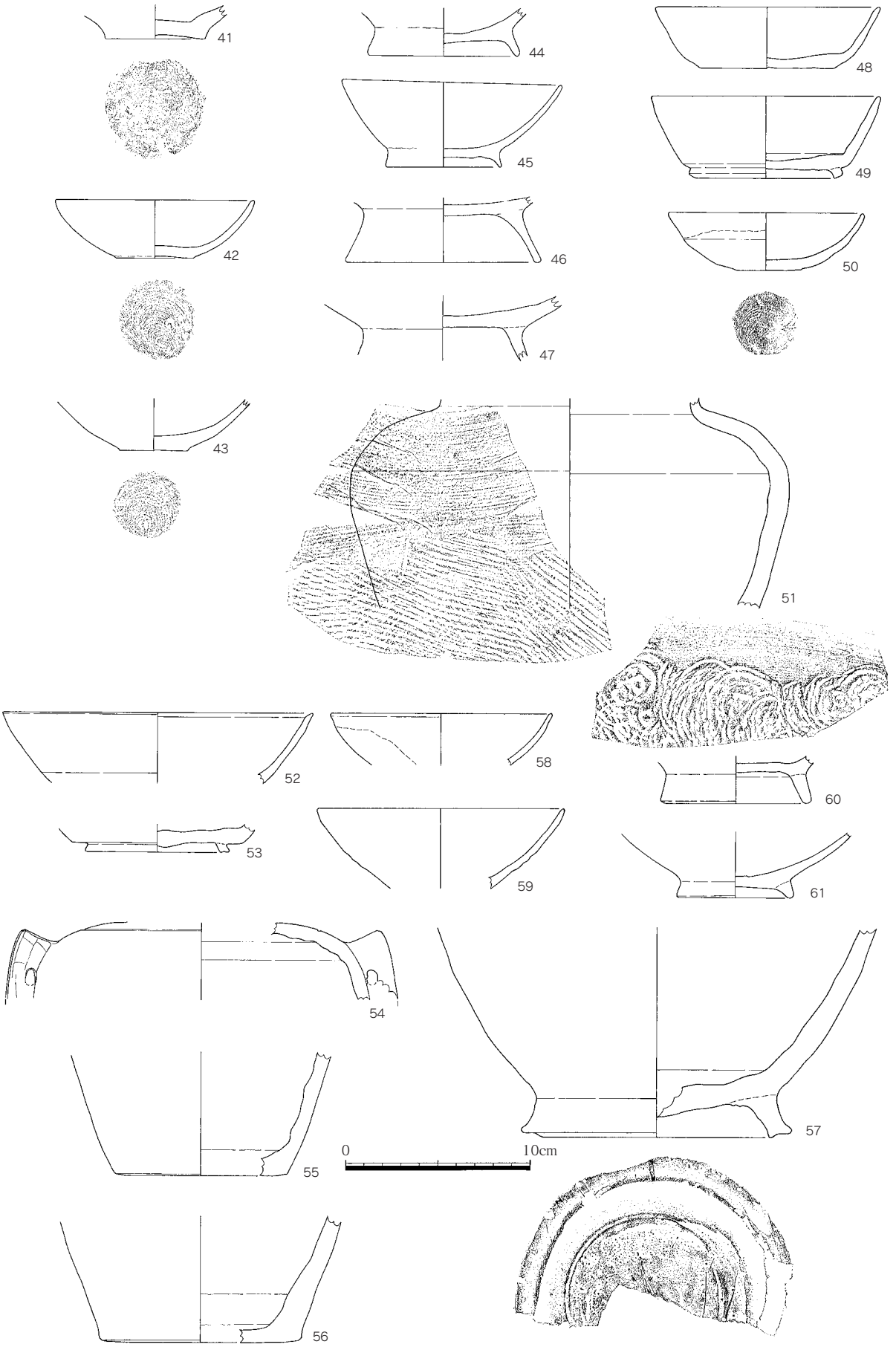
第31図　調査風景



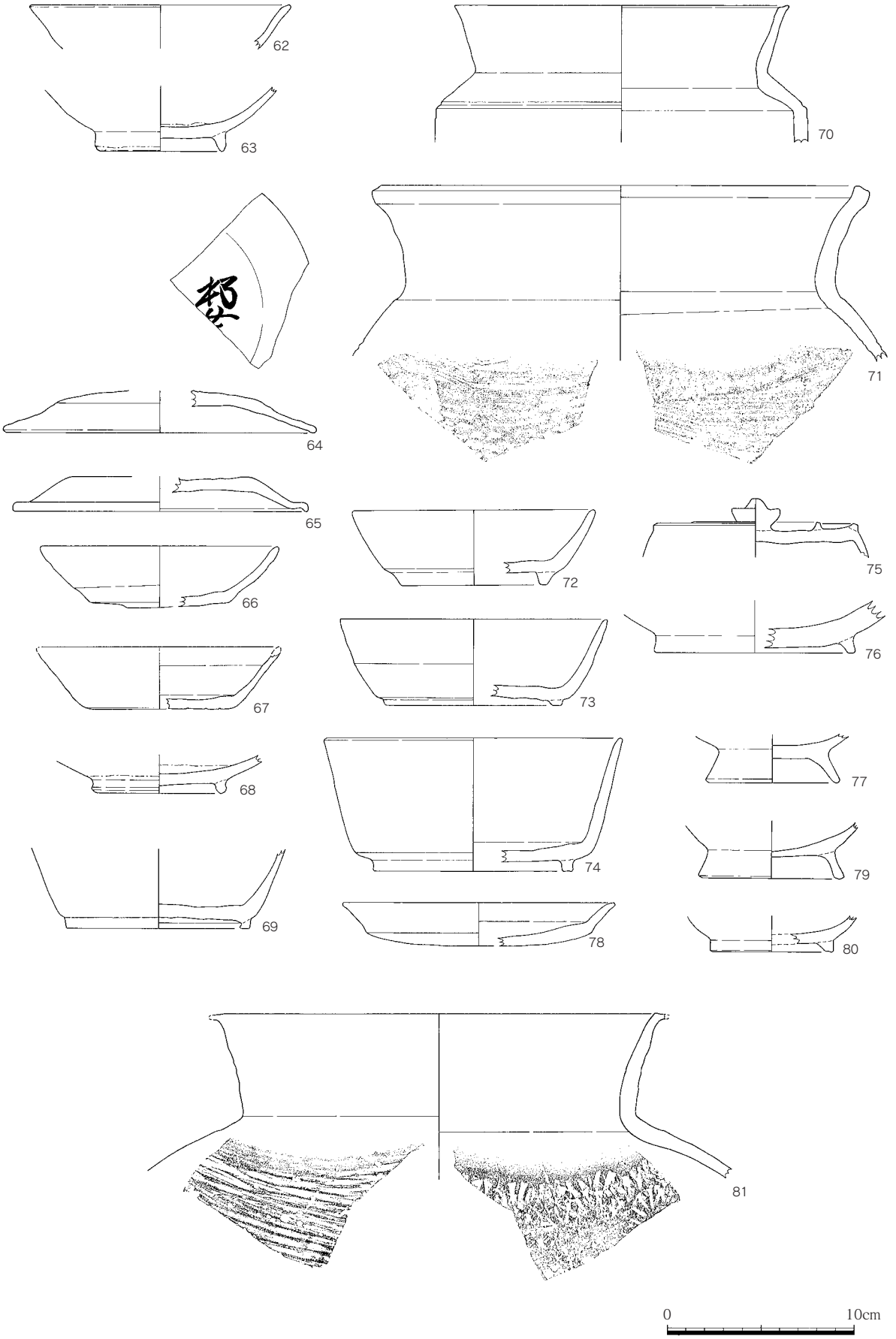
第32図　井戸・土坑出土土器(1)（S＝１／３）



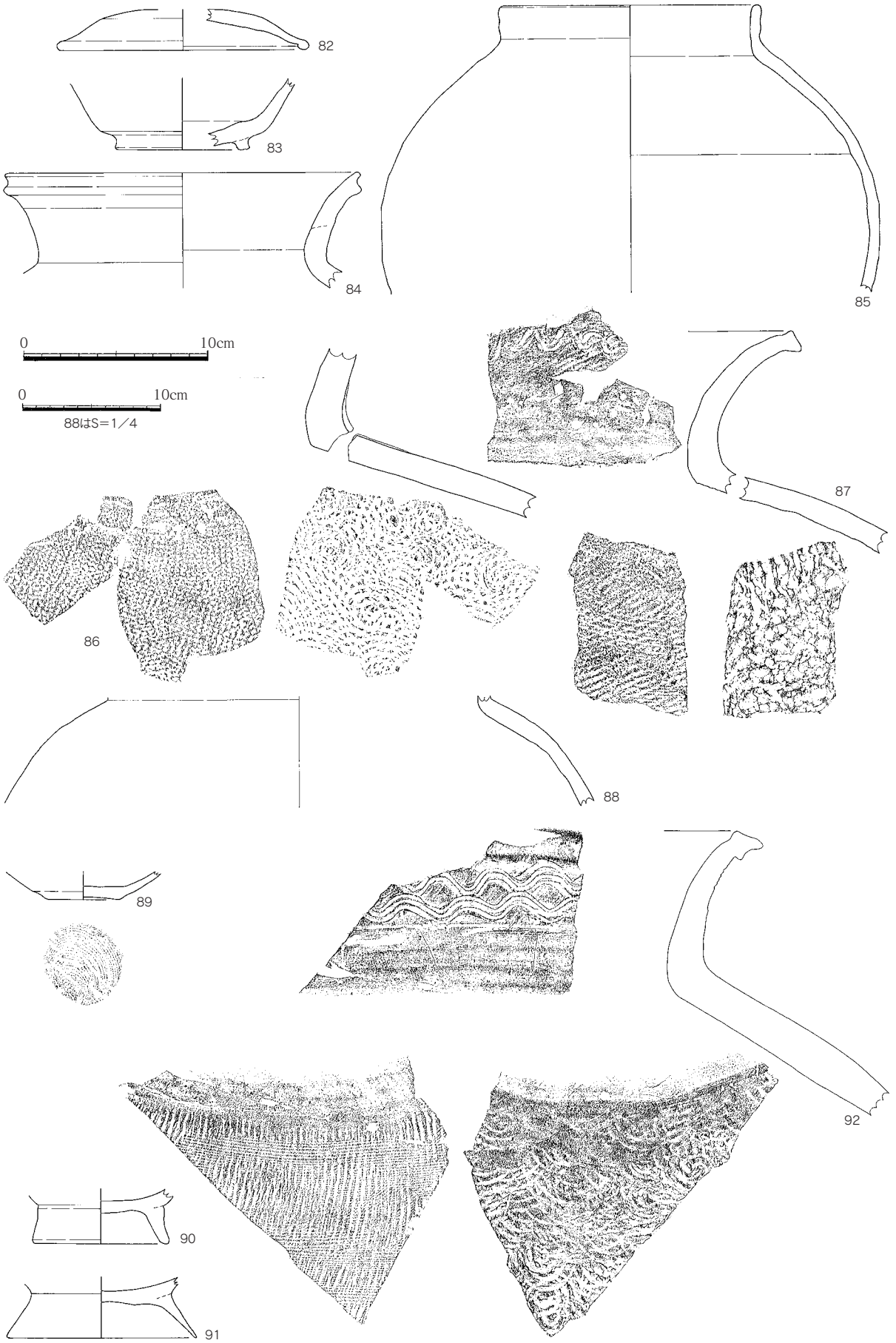
第33図　井戸・土坑出土土器⑵（S＝１／３・１／４）



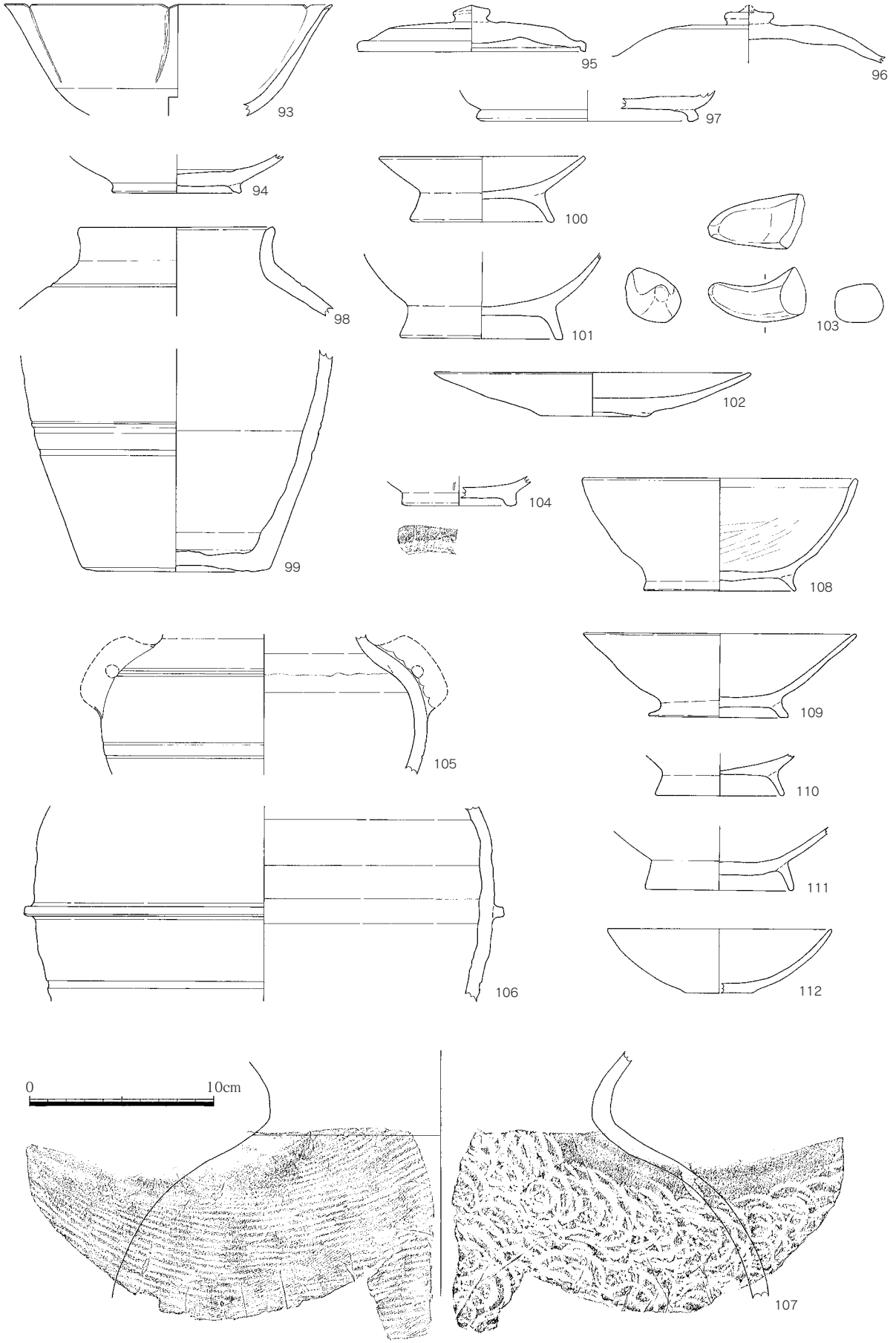
第34図　井戸・土坑出土土器(3)（S＝１／３）



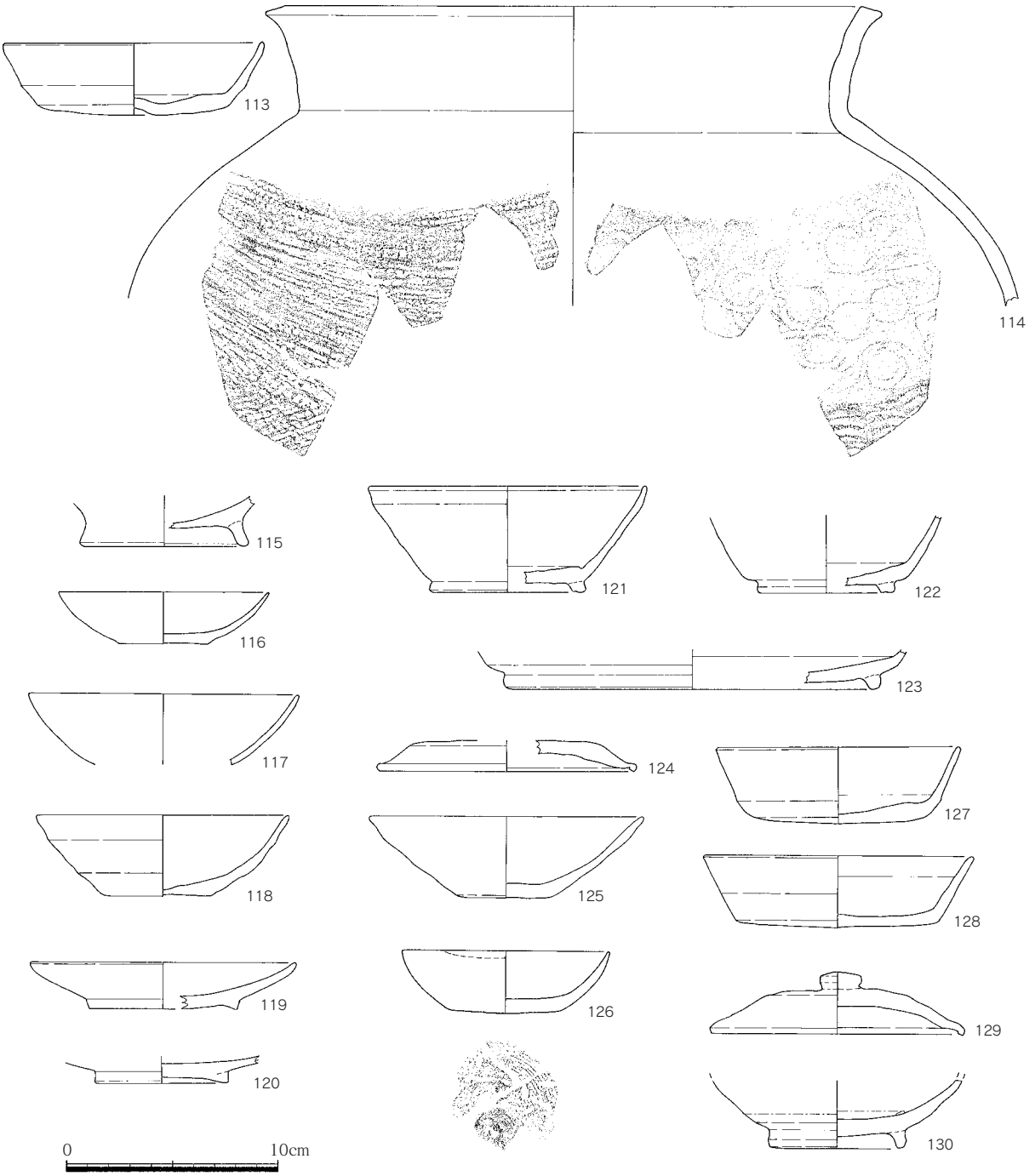
第35図　溝出土土器(1)（S＝１／３）



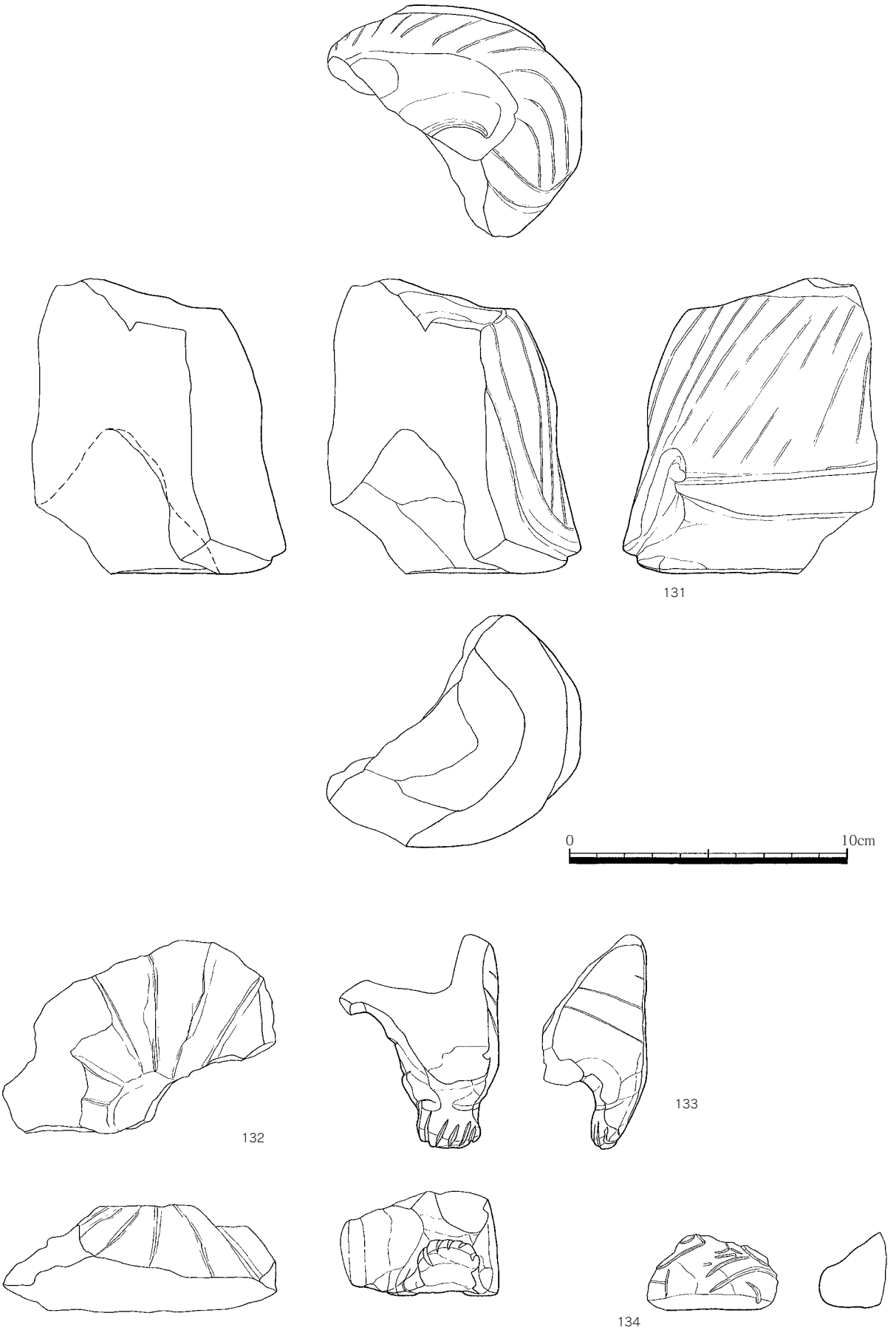
第36図　溝出土土器(2)（S＝1／3・1／4）



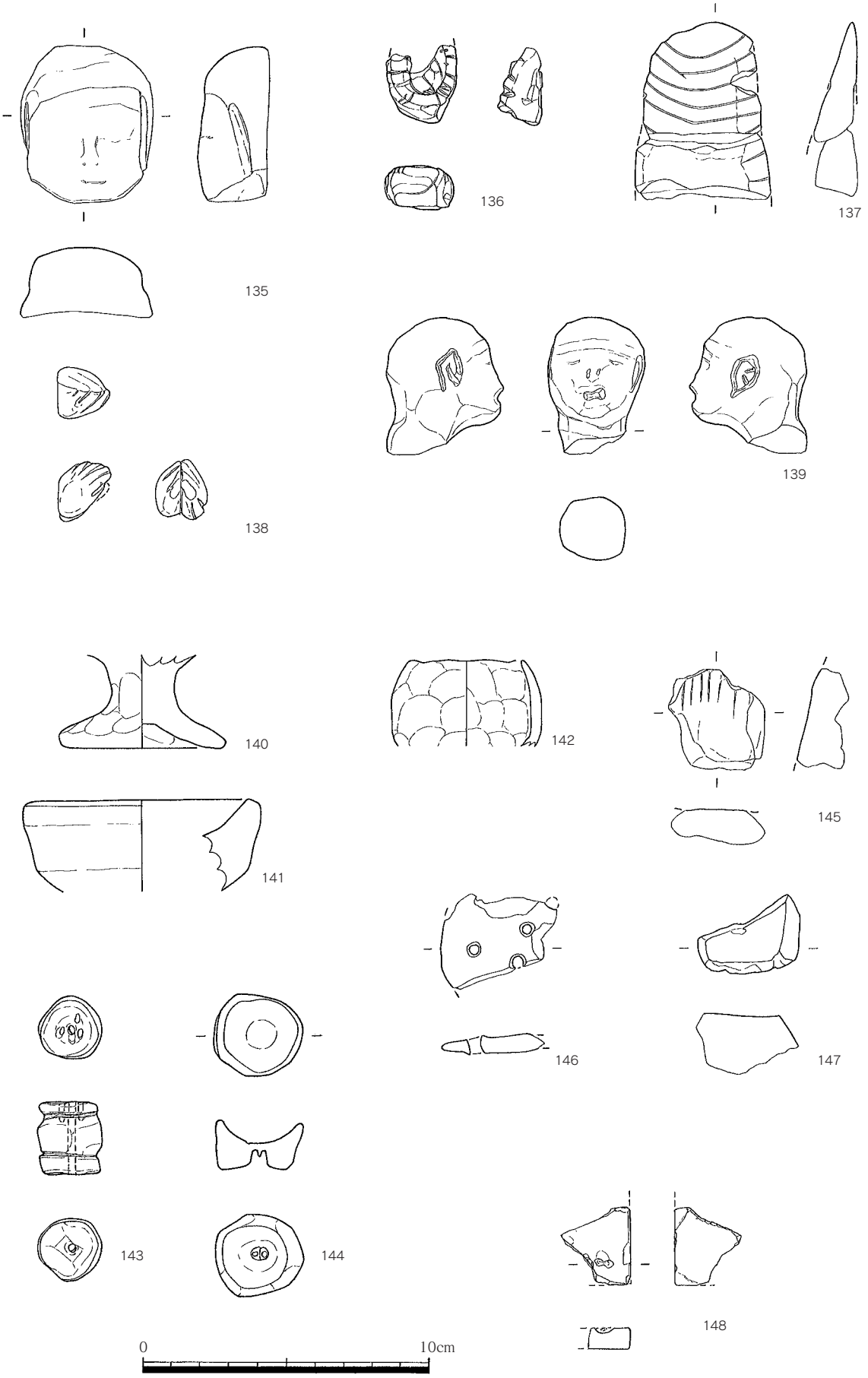
第37図　溝出土土器(3)（S＝１／３）



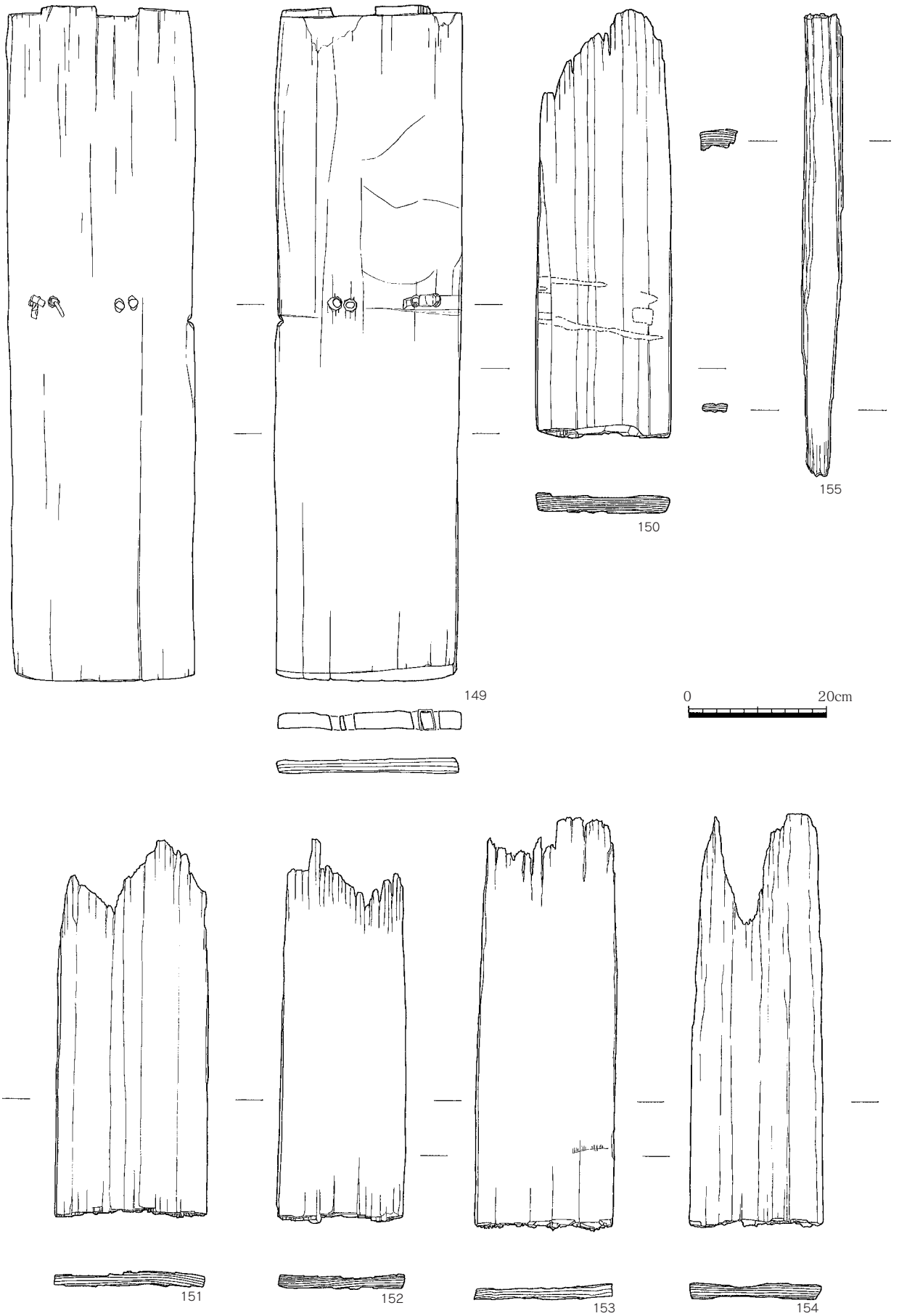
第38図　溝・柱穴等出土土器（S＝１／３）



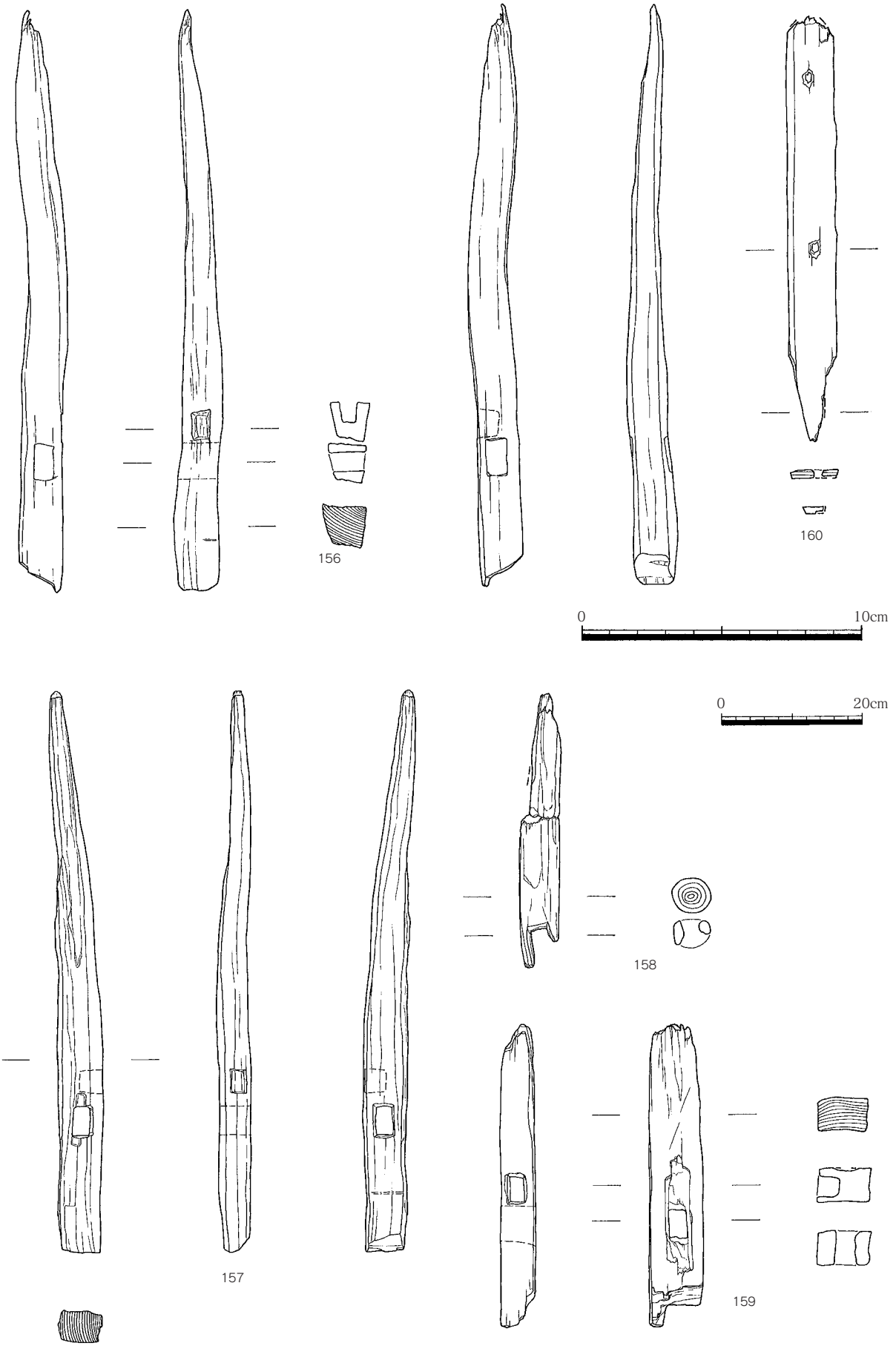
第39図　出土土製品(1)（S＝１／２）



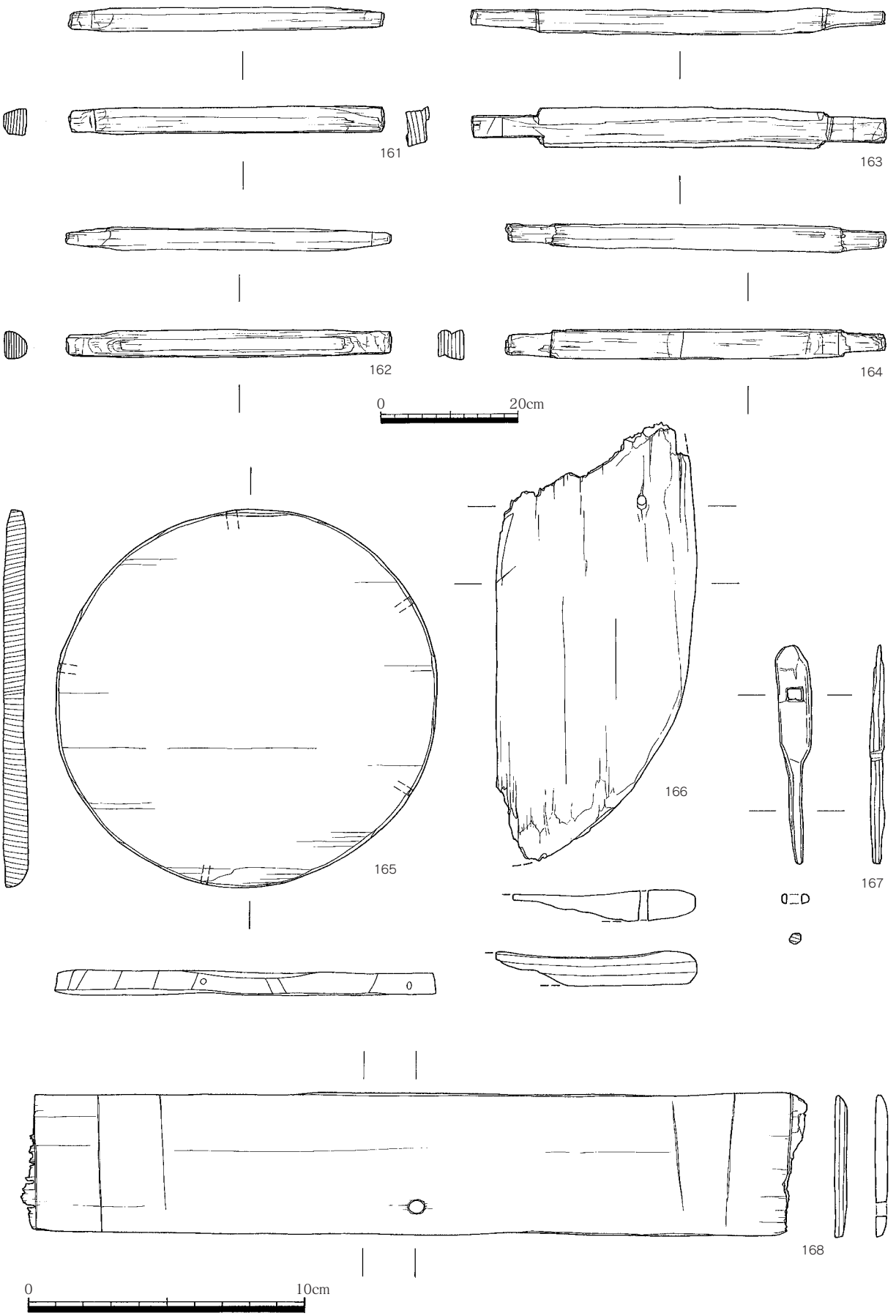
第40図　出土土製品⑵、出土石製品（S＝１／２）



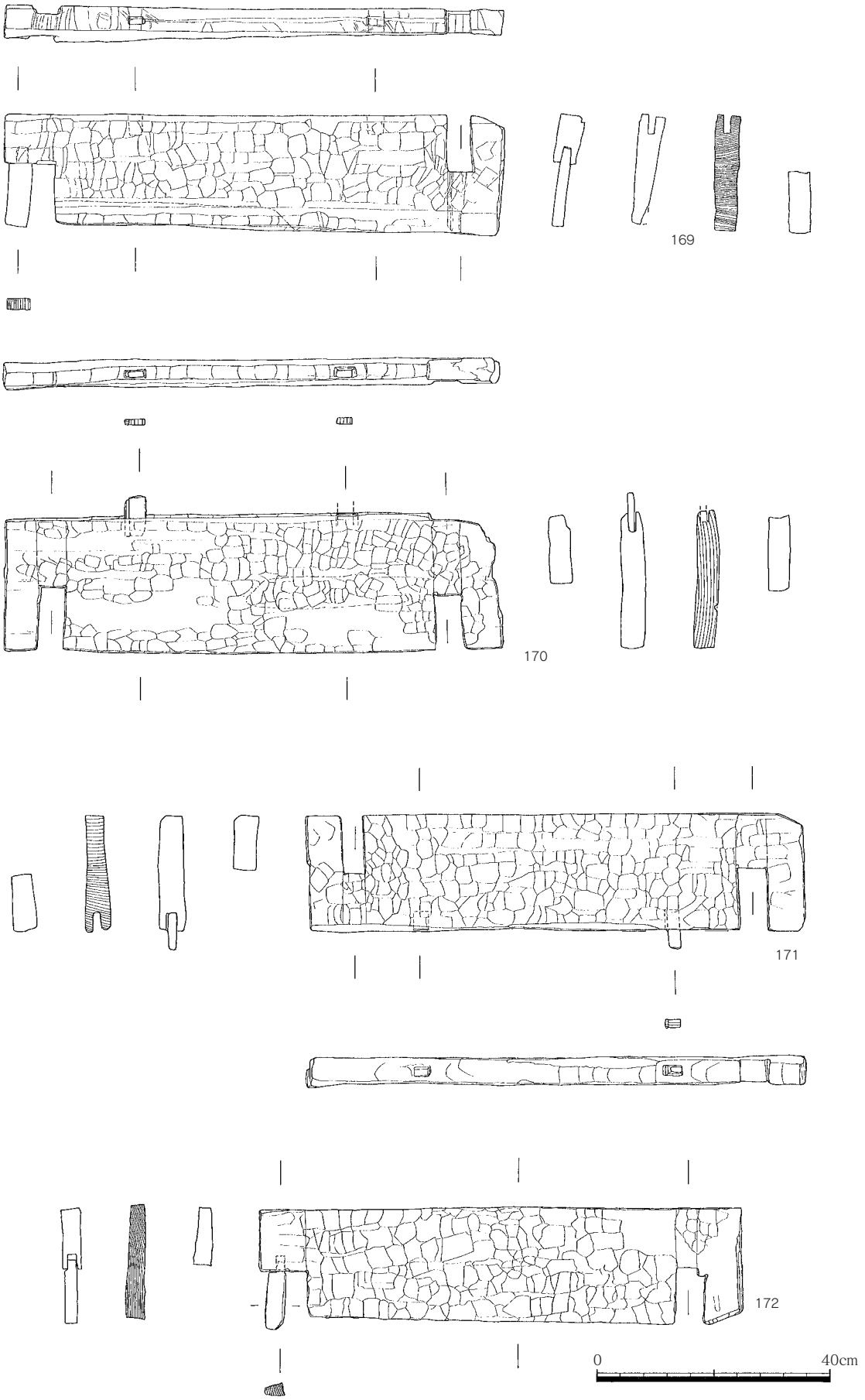
第41図　井戸出土木製品(1)（S＝１／４）



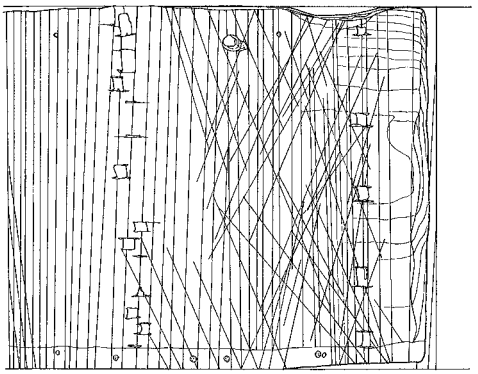
第42図　井戸出土木製品(2)（S＝1／4）

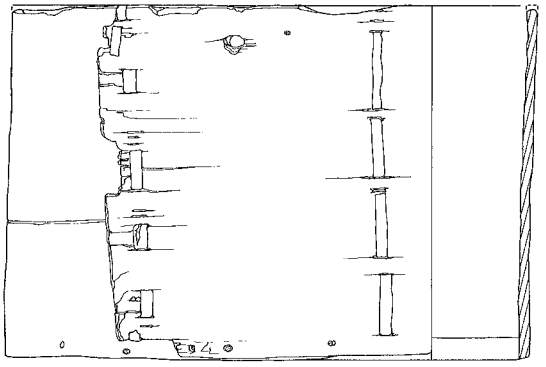


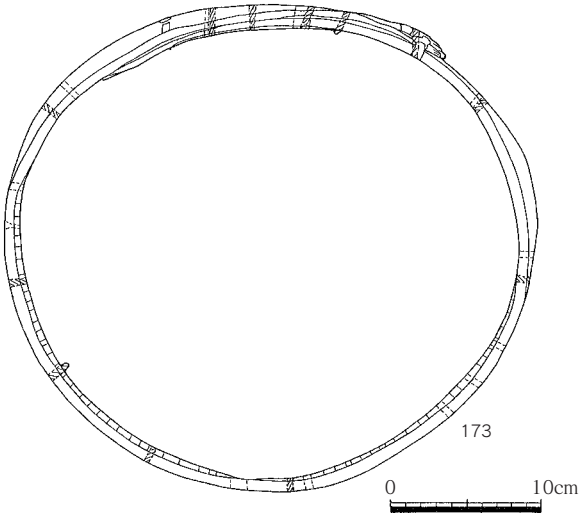
第43図　井戸出土木製品(3)（S＝1／4）



第44図　井戸出土木製品(4)（S＝1／10）







SD613・614の土色

（断面a－b）

1．黒灰褐、暗灰粘質土混合

2．黒灰褐、暗灰褐、灰黄褐粘質土混合

（断面c－d）

1．暗褐色土

2a. 黒灰褐、黄暗灰褐、灰黄褐粘質土混合

2b. 灰褐色粘質土

3. 2aよりブロック多

（断面e－f）

1．暗褐色土

2a. 灰褐色土

2b. 灰褐色土、黄灰シルトブロック混

3．暗灰褐色粘質土、黒褐色粘質土ブロック

4．黄灰褐色シルト、灰褐色土混合

（断面g－h、i－j）

2．茶褐粘　（SD30埋土）

3．暗灰褐粘　（SD31埋土）

4．茶褐粘　（SD31埋土）

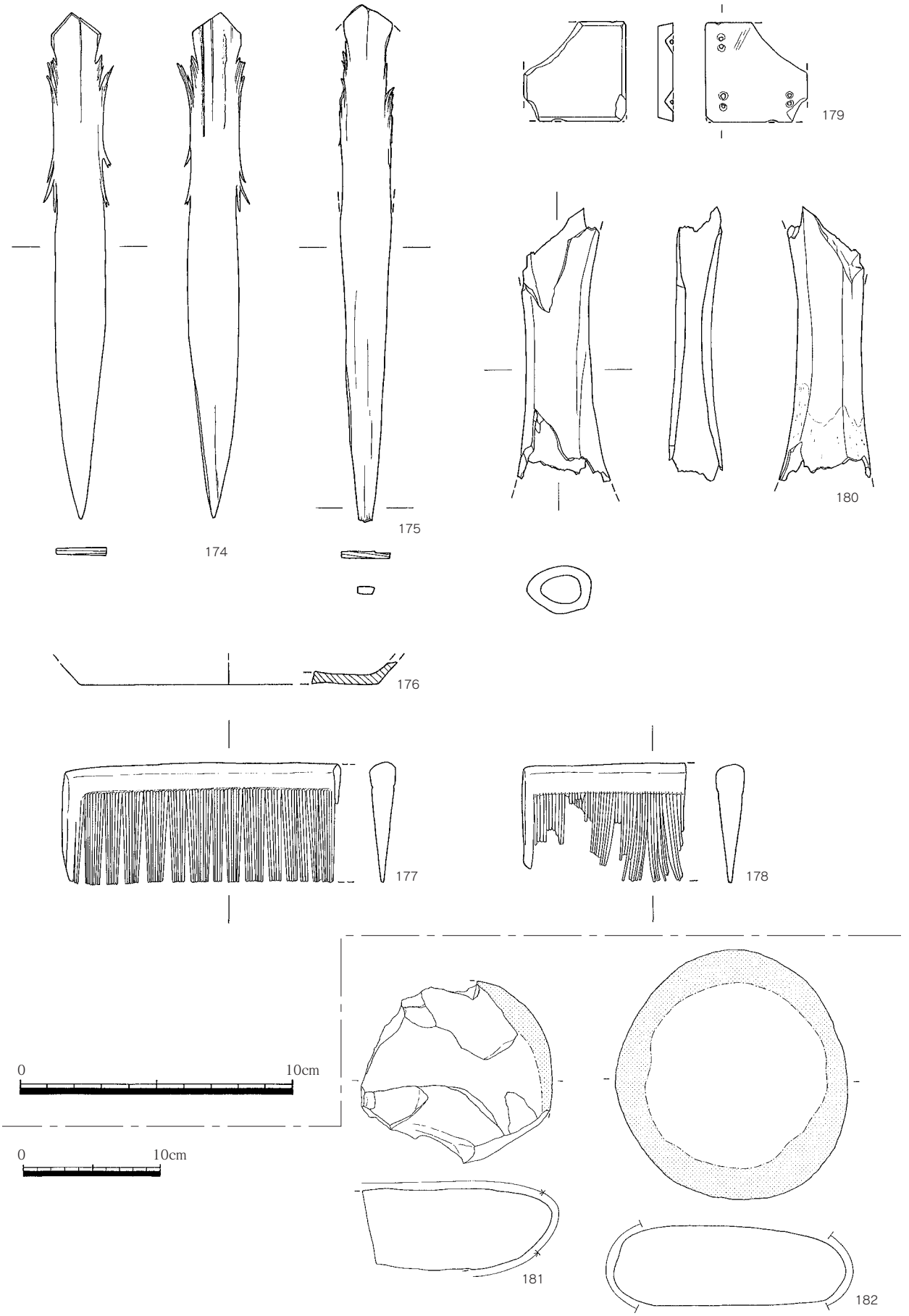
5．暗灰褐粘　（SD32埋土）

6．茶褐粘　（SD32埋土）

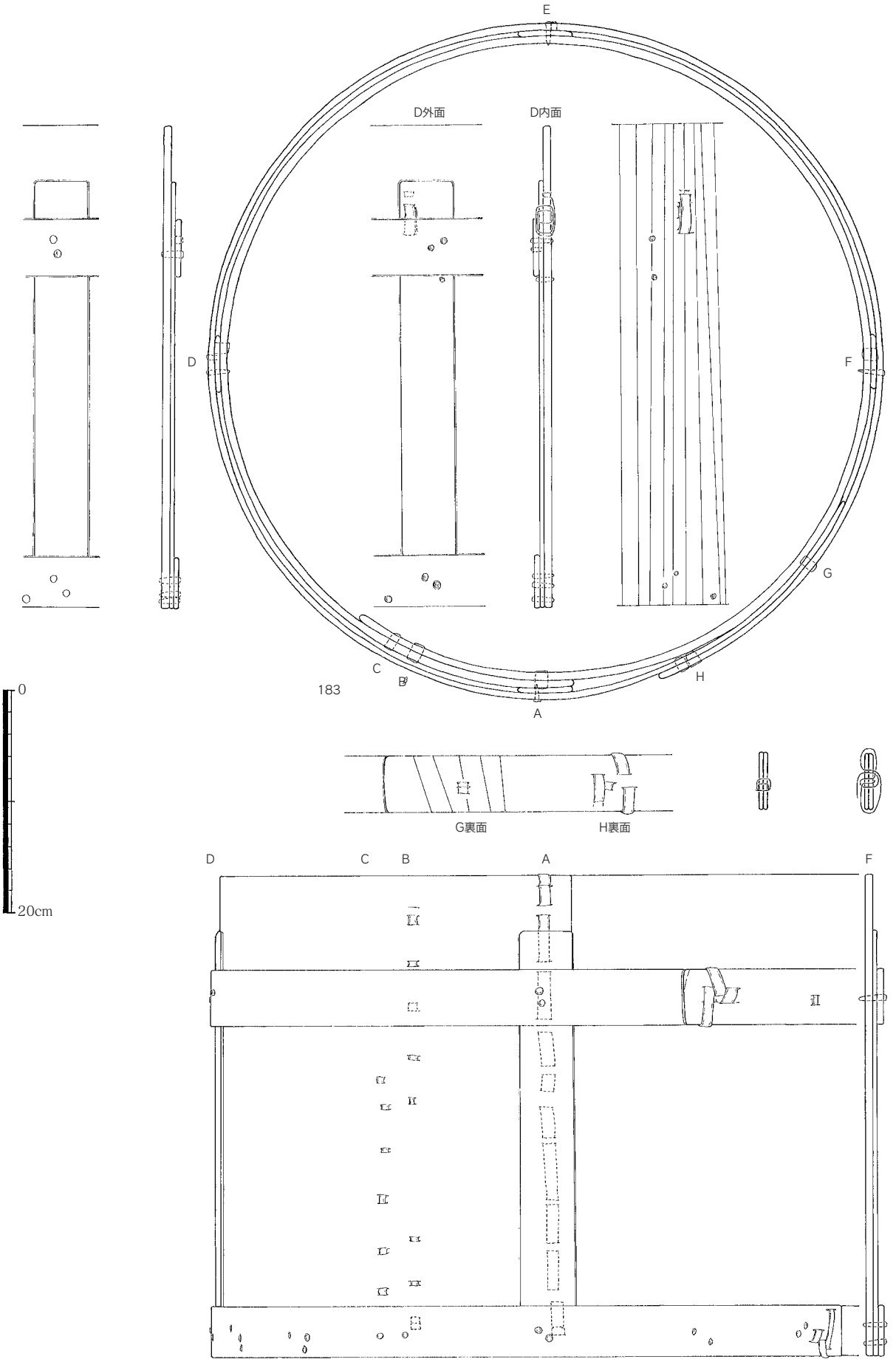
7．暗灰褐粘　（粘性）

8．暗灰褐粘

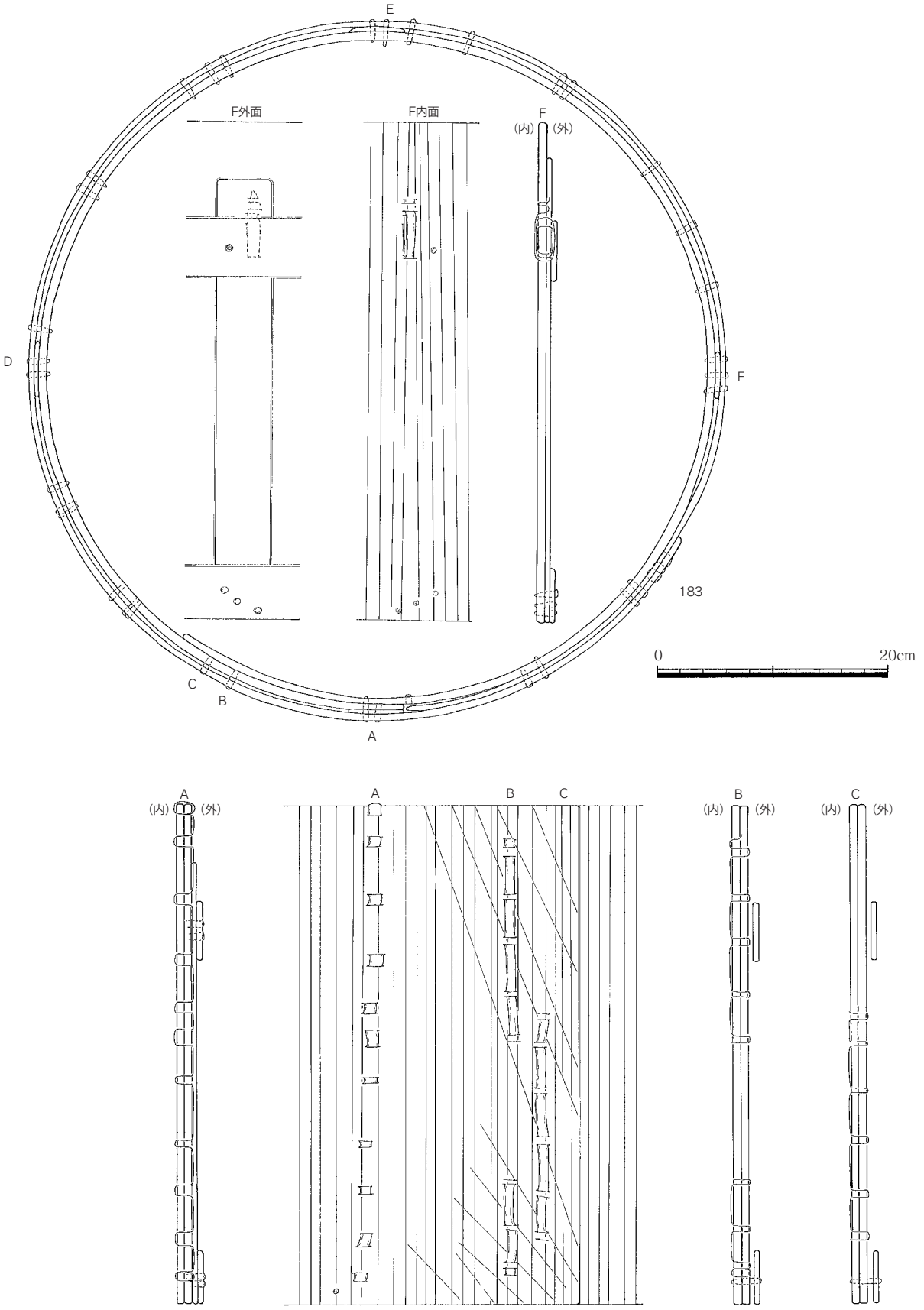
第45図　井戸出土木製品(7)（S＝1／5）



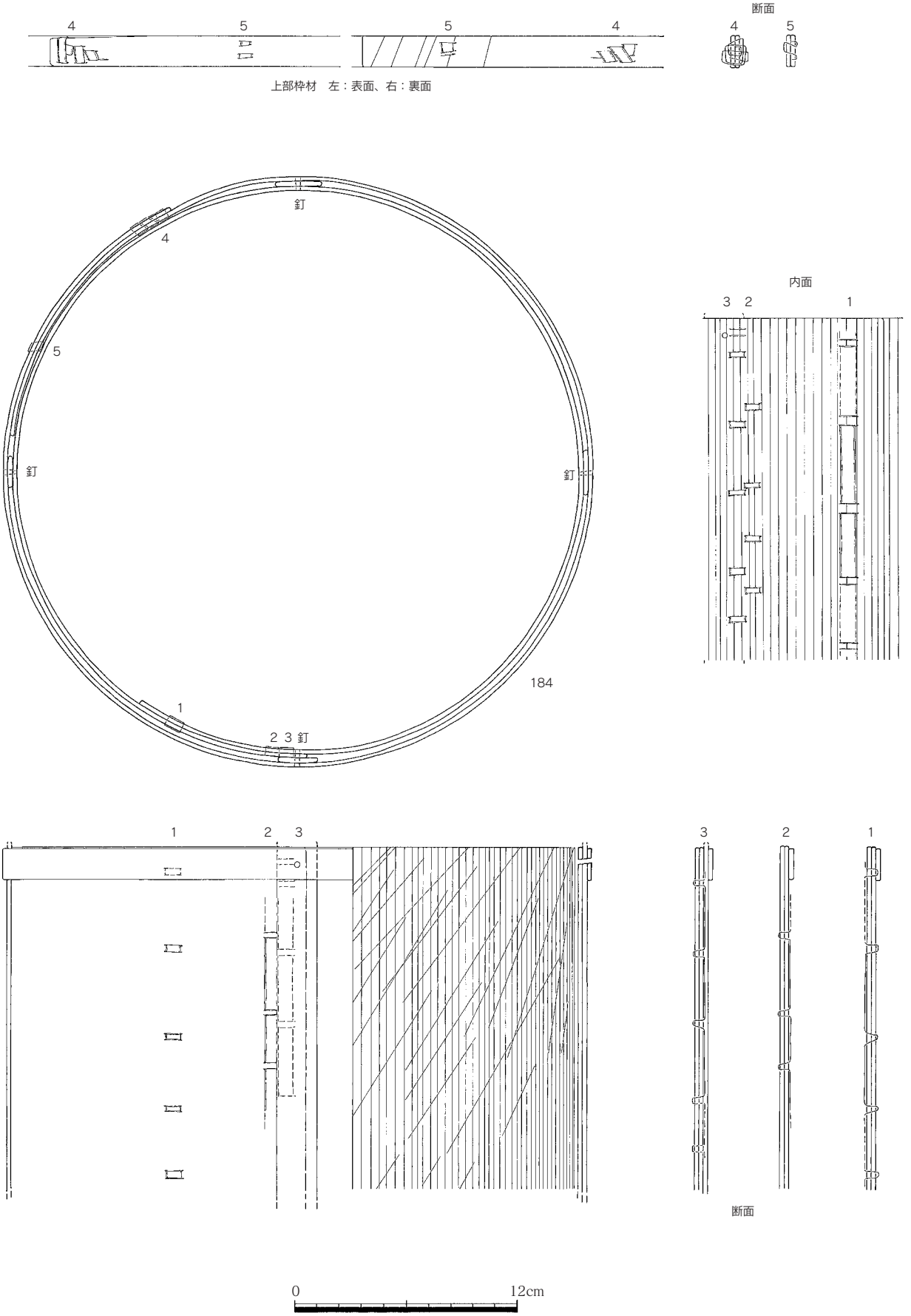
第46図　SE603出土遺物（S＝1／5・1／2）



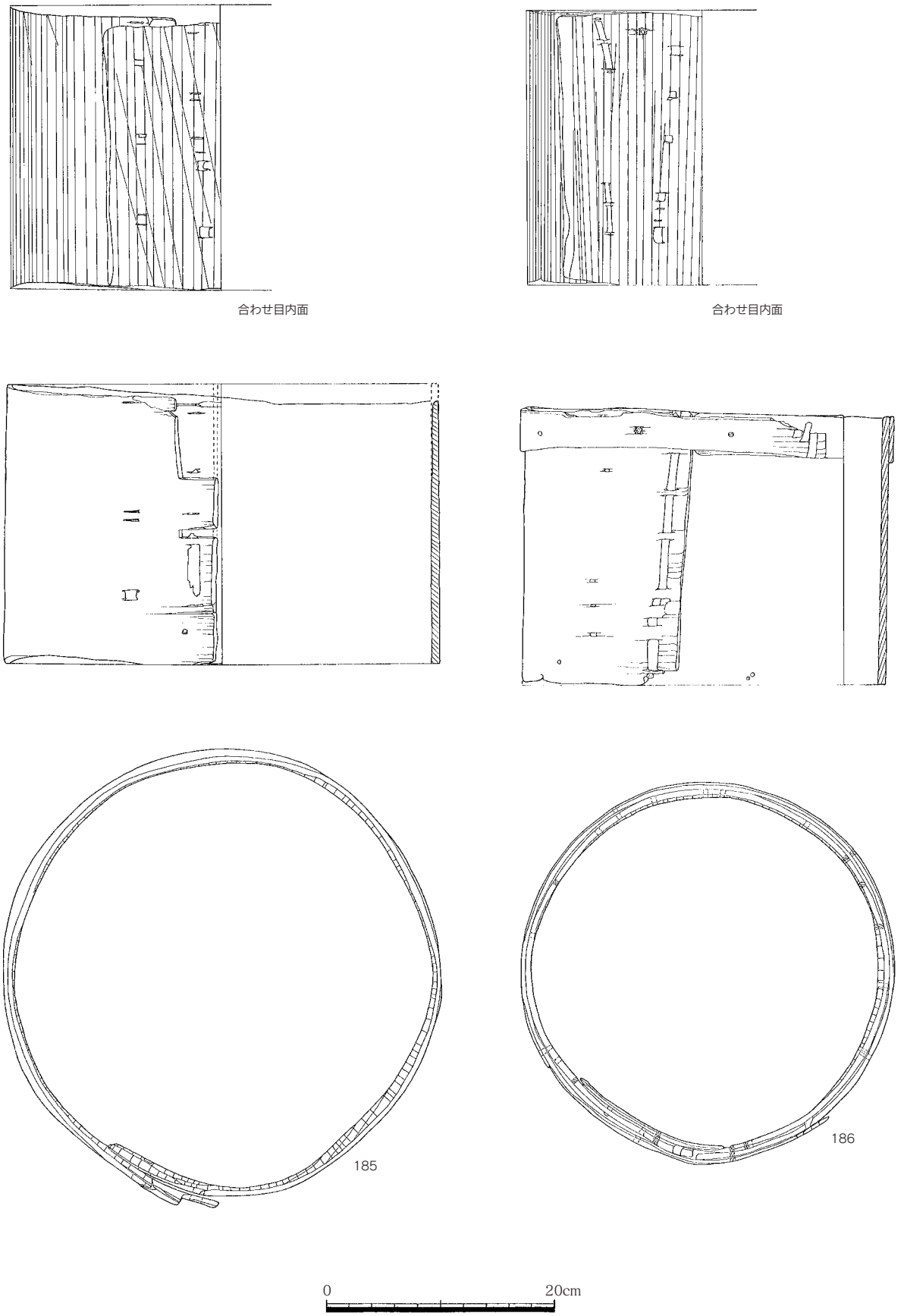
第47図　SE603出土木製品A－１（S＝１／５）



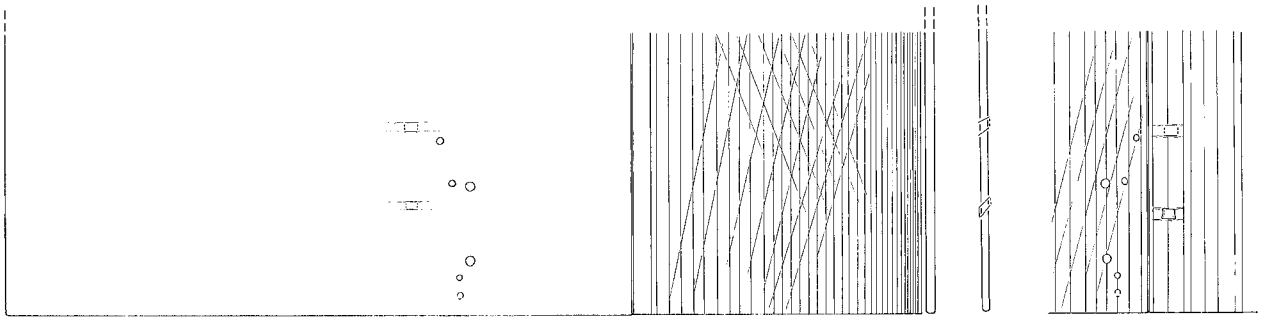
第48図　SE603出土木製品A－２（S＝１／５）



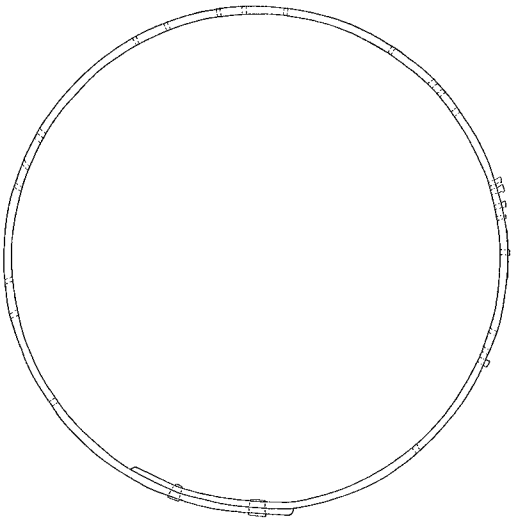
第49図　井戸出土木製品⑸（S＝１／３）



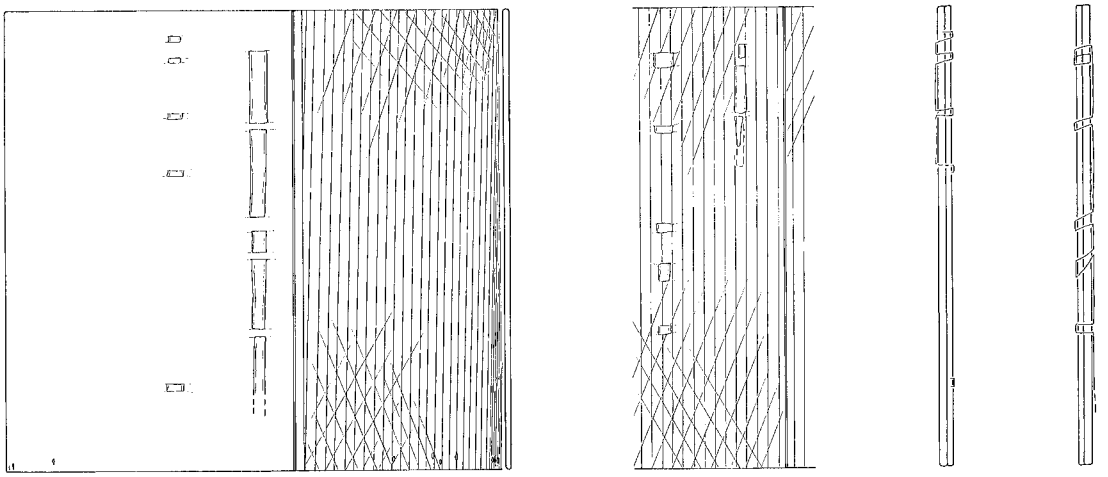
第50図　井戸出土木製品(6)（S＝１／５）



187

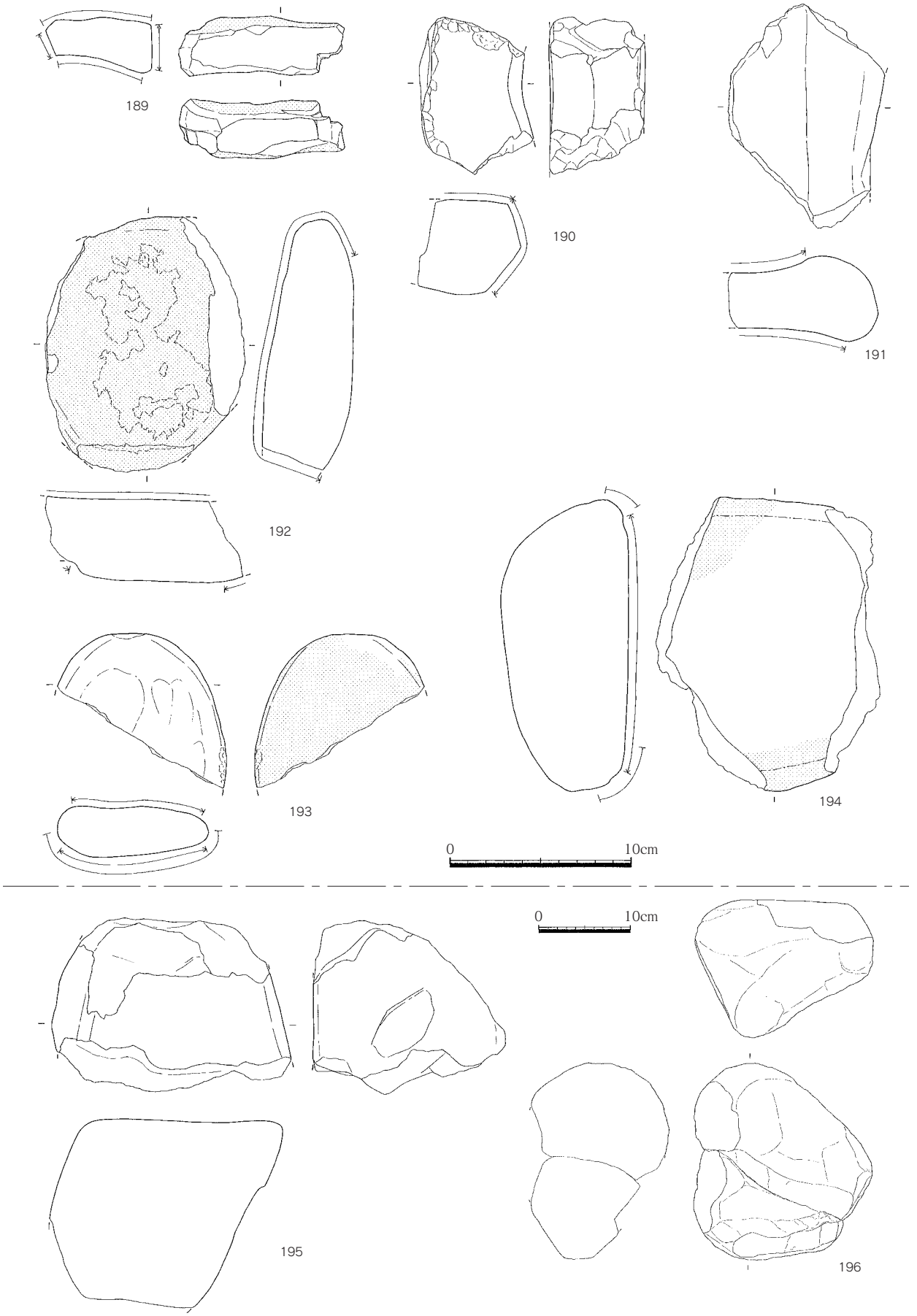


188

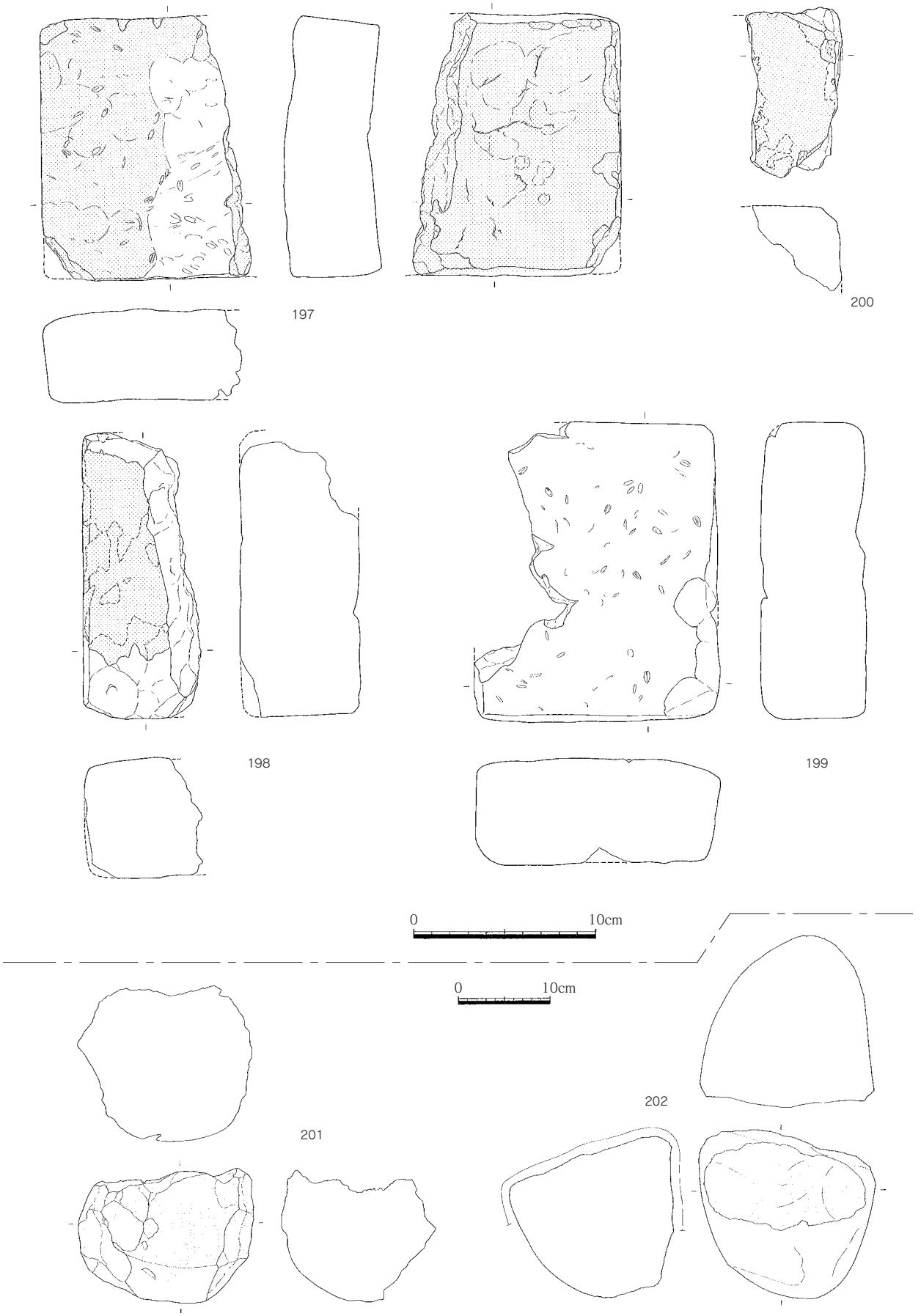


0 20cm

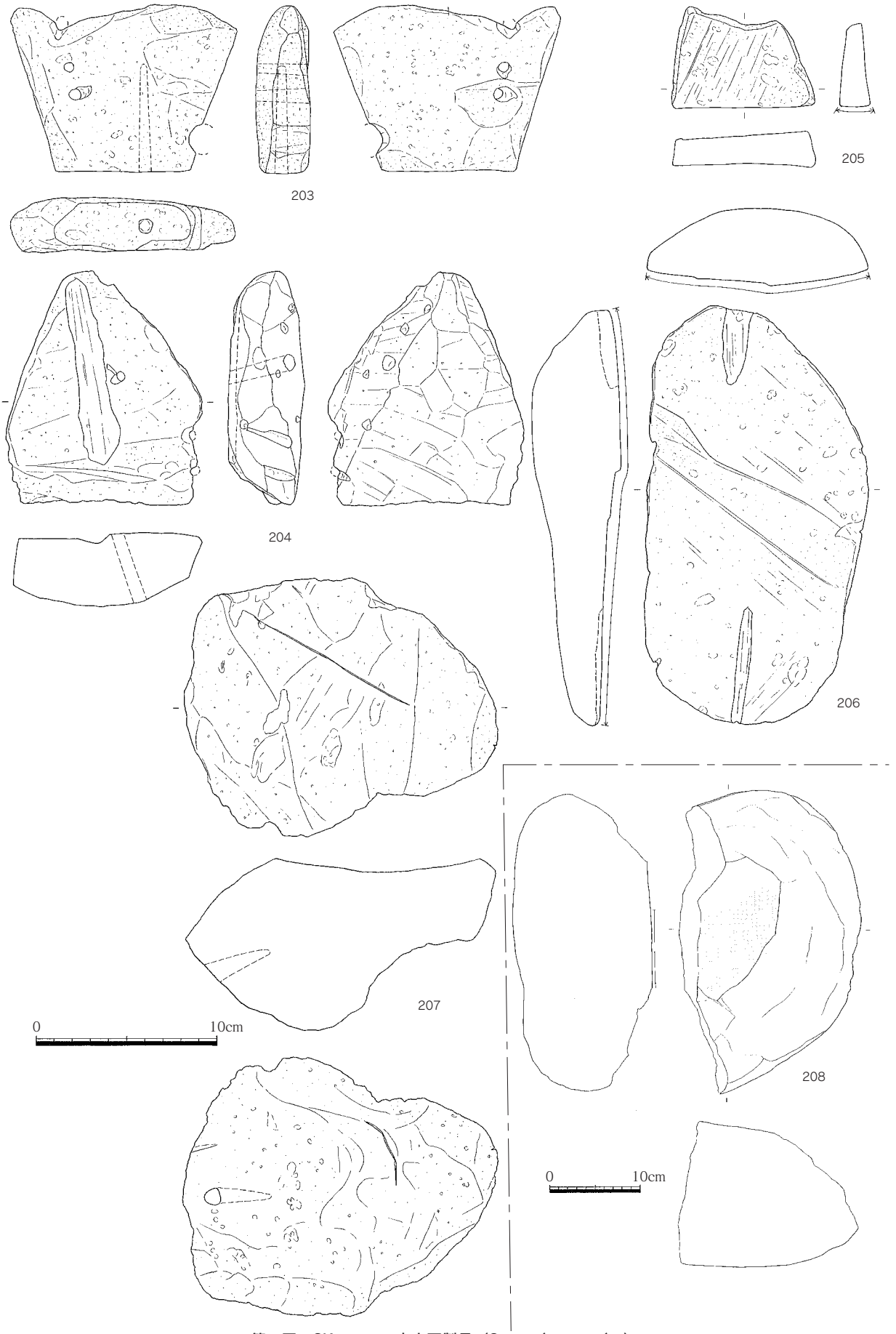
第51図　SE603出土木製品（S＝１／５）



第52図　SD602出土石製品（S＝１／３・１／６）



第53図　SK603・SE604出土石製品（S＝1／3・1／6）



第54図　SK603～606出土石製品（S＝1／3・1／6）

第４表　土器観察表

遺物番号	整理番号	地区	グリッド	遺構名	（詳　　細）	種　別	器種名	口径	底径	器高	内色調	外色調	胎　　土	焼成	内調整	外調整	遺存度	その他
1	kb03D103	A４	R-102	SE601	枠内	須恵器	杯	11.0	8.2	3.1	灰	灰	0.5～１㎜の長石、噴出物（黒）	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	口縁部から底部１/８	
2	kb03D102	A４	R-102	SE601	枠内	須恵器	杯	11.4	7.6	2.9	灰	灰	0.5～１㎜の長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口縁部から底部１/８	
3	kb03D104	A４	O-102	SE602	掘り方	須恵器	杯	15.6	8.6	3.3	灰白	灰白	0.5～２㎜長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	口縁部から底部１/６	
4	kb03D105	A４	O-102	SE602	覆土上層	須恵器	杯	12.6	7.5	3.0	灰白	灰白	0.5～１㎜長石多、２㎜の長石少	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底部１/３	
5	kb03D101	A４	O-102	SE602		須恵器	高台椀	16.8	8.6	7.6	灰	灰	0.5～２㎜長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	口縁から底部１/８	貼り付け高台
6	kb03D099	A６	R･S-107	SE603	№83	須恵器	高台坏	10.1	7.7	(1.2)	灰	灰	３～４㎜の砂（白濁）少、0.5～２㎜の砂（白濁）多	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り		
7	kb03D094	A６	R･S-107	SE603	曲物内覆土１	須恵器	高台杯		6.9	2.5	灰	灰、灰白	長石・石英	良	ロクロナデ	ロクロナデ	底部１/３	貼り付け高台
8	kb03D097	A６	R･S-107	SE603	曲物内１層、９層	須恵器	壺		10.3	5.2	灰、灰白	青灰	0.5～１㎜長石少 堅緻	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラケズリ	底部１/２	内面に自然釉、底部上底
9	kb03D100	A６	R･S-107	SE603	№17	須恵器	壺		12.9	4.2	灰、灰白	暗灰	長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ	底部１/２	
10	kb03D086	A６	R･S-107	SE603	曲物４・５の間、３～４段目、№41	土師器内黒	高台椀	13.7	7.2	5.0	黒	浅黄	微砂粒	良	ヘラミガキ	ロクロナデ	全体の１/６	静止糸きり
11	kb03D089	A６	R･S-107	SE603	№53、60、64、69、75、76、106、曲物６段目覆土	土師器内黒	高台椀	13.4	6.2	6.2	黒	灰黄	微砂粒	良	ヘラミガキ	ロクロナデ	ほぼ完形	貼り付け高台 回転糸きり
12	kb03D090	A６	R･S-107	SE603	№53、69、75、曲物６段目覆土	土師器内黒	高台椀	15.9	8.3	5.3	黒	にぶい褐	１～３㎜の砂（白不透明）、0.5㎜の砂（透明）多、金雲母	良	ヘラミガキ	ロクロナデ、ケズリ	ほぼ完形	貼り付け高台 底部糸きりなし
14	kb03D087	A６	R･S-107	SE603	№52,№65,曲げ物６段目の覆土上層	土師器	高台椀	12.7	5.7	4.8	灰黄褐、黒褐	灰黄褐、灰黄、黒褐		良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ		
15	kb03D091	A６	R･S-107	SE603	№51、60、79	土師器	高台椀	13.2	5.9	5.2	褐灰	にぶい黄橙	微砂粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	全体の１/３	
16	kb03D095	A６	R･S-107	SE603	曲物内焼土下層	須恵器	瓶類	7.0	3.2	2.2	灰白	灰白、灰	長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ	底部のみ	回転糸きり 貼り付け高台
17	kb03D085	A６	R･S-107	SE603	№11	土師器	Ⅲ		5.0	(2.4)	灰黄	灰黄	0.5㎜の砂（白不透明）、砂（透明）少、海綿骨針	良	ナデ	ロクロナデ、ナデ、回転糸切り		墨書「大」？
18	kb03D092	A６	R･S-107	SE603	№52、63	土師器	杯	12.5	5.1	4.0	浅黄橙、橙	淡赤橙、橙、赤灰	微砂粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	全体の１/２	回転糸きり
19	kb03D098	A６	R･S-107	SE603	№73、75、76	土師器	杯	12.6	4.9	4.2	にぶい橙	にぶい黄橙	微砂粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	全体の１/５	内面見込みに小さな剥離痕
20	kb03D093	A６	R･S-107	SE603	№76、75	土師器	Ⅲ	14.0		(3.1)	にぶい黄橙、にぶい橙	にぶい橙、にぶい黄橙	微砂粒、海綿骨針	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁２/３	
21	kb03D084	A６	R･S-107	SE603	№６	土師器	Ⅲ	11.5	4.6	3.4	にぶい橙	灰白、淡橙、にぶい橙	0.5～２㎜の砂（白濁）少、３㎜程の砂（白濁）微、海綿骨針、堅緻	良	ナデ	ナデ、回転糸切り		
22	kb03D096	A６	R･S-107	SE603	掘り方上層	土師器	Ⅲ	10.7		2.2	浅黄橙、褐灰	灰白	１～２㎜の長石少、焼土塊少、微小石英		ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部１/４	口縁部に一部油煙付着
23	kb03D088	A６	R･S-107	SE603	№69、82、85、86、87、90、91	土師器	甕				黒	黒	微砂粒	良	ナデ	ヨコナデ、タタキ	破片	外面全体に煤付着
24	kb03D186	A５	L-103	SE607	上層、最下層	土師器	杯	12.3	5.7	4.6	灰白	灰白	長石・海面骨針	良	磨耗の為不明	磨耗の為不明	底部のみ	
25	kb03D185	A５	L-103	SE607	セクションベルト	灰釉陶器	高台椀		6.8	2.4	灰白	灰白	緻密、白い斑文	良		回転糸切り	底部３/４	"貼り付け高台 回転糸きり"
26	kb03D183	A５	L-103	SE607		土師器	杯	11.3	4.4	3.2	黄灰	淡橙	焼土塊、長石、粘土縞状	良	ロクロナデ	ロクロナデ	全形の３/５	
27	kb03D198	A５	L-103	SE607	最上層	土師器	杯	11.4		3.2	灰白	灰白	微砂粒、焼土塊、粘土が縞状にはりる	並	磨耗の為不明	磨耗の為不明	口縁１/４	
28	kb03D195	A５	L-103	SE608	上層	土師器	杯	10.6		2.7	灰白、浅黄橙	灰白	微砂粒、焼土塊、粘土が縞状にはりる	良	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁１/６	
29	kb03D191	A５	L-102	SK603		土師器	杯		4.6	1.5	黒	灰黄褐	微砂粒、焼土塊、粘土が縞状にはりる	良	ロクロナデ	ロクロナデ	底部のみ	内面煤付着

遺物番号	整理番号	地区	グリッド	遺構名	（詳　　細）	種　別	器種名	口径	底径	器高	内色調	外色調	胎　　土	焼成	内調整	外調整	遺存度	その他
30	kb03D216	A５	K-102	SK603 SK604 SK606 SD638	検出面 上層 上層	土師器	飲食器		6.5	2.2	浅黄橙	浅黄橙	微砂粒	良	磨耗の為不明	磨耗の為不明		気泡多い
31	kb03D147	A５	L-102	SK603	12、14、上層、検出面	土師器	高台杯	18.6	10.3	9.1	にぶい橙	にぶい橙	微砂粒、焼土塊	良	ナデ	ナデ	全体の１/２	回転糸きりか？
32	kb03D206	A５		SK604	上層	灰釉陶器	高台皿	11.1	6.0	2.1	灰白	灰白	緻密	良	ロクロナデ		全体の１/２	釉：灰緑色
33	kb03D168	A５	L-102	SK604		"土師器内黒"	高台椀		8.8	2.8	黒	浅黄橙	長石、海綿骨針	良	磨耗の為不明	ナデ	高台のみ	
34	kb03D175	A５	L-102	SK604	上層	土師器	杯		5.6	2.3	浅黄橙	浅黄橙	１mm以下の砂（白濁）	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り		内面に油煙付着
35	kb03D148	A５	L-102	SK604		土師器	壺		5.3	8.8	にぶい橙	にぶい橙	微砂粒、粘土が縞状にはりる	良	ナデ	ナデ	体部12/３	
36	kb03D149	A５	L-102	SK605	19	土師器	杯	11.2	4.8	4.1	灰黄	浅黄橙	微砂粒	良	ヨコナデ	ヨコナデ	ほぼ完形	回転糸きり？
37	kb03D174	A５	L-102	SK605	41	土師器	杯	9.9	4.3	2.9	にぶい橙	にぶい橙	微砂粒、焼土塊、粘土が縞状にはりる	良	磨耗の為不明	磨耗の為不明	ほぼ完形	
38	kb03D151	A５	L-102	SK605	29	須恵器	壺		7.0	8.0	灰	灰	長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ	体部のみ完存	
39	kb03D169	A５	L-102 L-102 K･L-102 M-102	SK603 SK605 SK606 SD608	３、検出面 204,208	須恵器	甕	12.9		20.2	灰	灰	長石、噴出物（黒）	良	ロクロナデ	ロクロナデ、タタキ	破片	当て具痕
40	kb03D152	A５	L-102 M-102	SK605 SD608	17 上層	須恵器	甕	49.6		13.9	褐灰	灰	微砂粒	良	当て具痕	ヨコナデ、タタキ	肩部１/８	
41	kb03D158	A５	K･L-102	SK606	69	土師器	杯		5.4	1.9	暗灰黄	灰黄	微砂粒、焼土塊	良	ロクロナデ	ヨコナデ	底部のみ	回転糸きりか？
42	kb03D155	A５	M-103	SK606		土師器	杯	10.6	4.2	3.2	灰白	灰白	微砂粒、焼土塊、粘土が縞状にはりる	良	磨耗の為不明	磨耗の為不明	１/４	回転糸切り
43	kb03D157	A５	K･L-102	SK606	62	土師器	杯		3.7	2.8			微砂粒、焼土塊	良	ロクロナデ	ロクロナデ	１/４	回転糸切り
44	kb03D154	A５	K･L-102	SK606	12	土師器	高台椀		8.0	2.6	浅黄橙	浅黄橙	微砂粒、焼土塊、粘土が縞状にはりる	良	磨耗の為不明	磨耗の為不明	底部完存	貼り付け高台
45	kb03D156	A５	K･L-102	SK606	99	土師器	高台椀	11.8	6.2	4.4	浅黄橙	浅黄橙	微砂粒	良	磨耗の為不明	磨耗の為不明	２/３	貼り付け高台
46	kb03D167	A５	K･L-102	SK606	34	土師器	高台椀		9.8	3.5	灰白	浅黄橙	微砂粒、焼土塊、粘土が縞状にはりる	良	磨耗の為不明	磨耗の為不明	高台２/３	
47	kb03D153	A５	K･L-102	SK606	6	"土師器赤彩"	高台椀			3.5	にぶい褐	にぶい黄橙	微砂粒、海綿骨針、焼土塊	良	ロクロナデ	ナデ	底部１/２	赤彩痕跡高台内
48	kb03D141	A５	N-102	SK608		須恵器	杯	10.0	7.2	3.3	灰	灰	微砂粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	全形の１/３	
49	kb03D142	A５	M-103	SK610	2	須恵器	高台杯	12.3	7.5	4.4	暗青灰	灰	長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ	全体の１/２	
50	kb03D143	A５	M-103･104	SK610	上層	土師器	杯	10.5	3.6	3.2	にぶい黄褐	にぶい黄褐	海面骨針	良	ナデ	ロクロナデ、回転糸切り		内面全体と外面に油煙
51	kb03D178	A５	L-103	SE604	27	須恵器	壺			11.3	灰	灰～暗灰	長石・石英	良	ロクロナデ	カキメ、タタキ	肩部１/６	
52	kb03D194	A５		SE604	１層	須恵器	杯	16.8		3.8	灰白	灰	長石・黒い噴出物	良	ロクロナデ	ロクロナデ	小片	
53	kb03D203	A５		SE604	３層上部	須恵器	高台杯		7.7	1.5	灰	灰～暗灰	長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	底部２/３	貼り付け高台
54	kb03D177	A５	L-103	SE604	１層	須恵器	双耳瓶			4.2	灰	灰	微砂粒、噴出物（黒）	良	ロクロナデ	ロクロナデ	破片	外面に自然釉 肩部に沈線
55	kb03D182	A５	L-103	SE604	中層	須恵器	瓶		9.3	6.7	灰	灰	微砂粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	底部１/６	内外面に黒い有機物
56	kb03D176	A５	L-103	SE604	灰色砂層１層	須恵器	壺		10.7	(6.9)	灰	灰	微砂粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	底部１/５	内底面に釉と付着物

遺物番号	整理番号	地区	グリッド	遺構名	（詳　　細）	種　別	器種名	口径	底径	器高	内色調	外色調	胎　　土	焼成	内調整	外調整	遺存度	その他
57	kb03D179	A５	L－103	SE604	黒褐粘２層、上・中・下層	須恵器	壺		12.5	11.3	灰	灰	長石、黒い噴出物	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	体部１/８	外底面にヘラ記号
58	kb03D180	A５	L-103	SE604	１層	土師器	皿	11.9		2.8	にぶい橙	にぶい橙	微砂粒、海綿骨針	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁１/５	内外面に油煙
59	kb03D181	A５	L-103	SE604	覆土２層	土師器	高台椀	13.2		4.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微砂粒、海綿骨針、雲母	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁１/４	
60	kb03D184	A５	L-103	SE604	中層	土師器 内黒	高台椀		7.6	2.6	黒	にぶい黄橙	微砂粒	良	ミガキ	ヨコナデ、回転糸切り	底部１/２	貼り付け高台
61	kb03D187	A５	L-103	SE604		土師器	高台椀		6.1	3.6	にぶい橙	にぶい橙	微砂粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	底部のみ	回転糸きり
62	kb03D211	A４		P-104 SD601		緑釉陶器	椀	13.8		2.4	灰	灰	緻密	良	ロクロナデ	ロクロナテ	口縁小片	釉：オリーブ灰
63	kb03D108	A４	P-105	SD602		灰釉陶器	高台椀		6.8	3.5	灰白	灰白	緻密	良	ロクロナデ		底部１/２	緑釉：灰オリーブ
64	kb03D204	A４	Q-105	SD602		須恵器	蓋	16.5		(2.3)	灰	灰	0.5～３㎜の砂（白透明）少 堅緻	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ、ヘラ切り後ナデ		墨書「　　女」
65	kb03D117	A４	Q-105	SD602		須恵器	杯蓋	15.6		1.9	灰	灰白	0.5～２㎜の長石	良	ロクロナデ	ケズリ後ナデ	体部１/３	内面を硯に転用
66	kb03D115	A４	Q-105	SD602		須恵器	杯	12.6	7.4	3.3	灰白	灰白	１～２㎜の石英・長石	不良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	口縁部から 底部１/３	生焼け
67	kb03D160	A５	Q-105	SD602		須恵器	杯		8.0	3.0	灰	灰	長石・石英	良	ロクロナデ	ロクロナデ	小片	
68	kb03D107	A４	P-105	SD602		灰釉陶器	高台椀		7.0	2.1	灰白	灰白	緻密	良	ロクロナデ	ヘラケズリ	底部１/２	見込み釉なし 貼り付け高台
69	kb03D114	A４	P-105	SD602	上層	須恵器	高台杯		8.8	4.3	灰白	灰	0.5㎜の長石	やや 不良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り		貼り付け高台
70	kb03D106	A４	P-105	SD602		須恵器	壷	17.7		7.3	灰白	灰白、灰	0.5～３㎜の長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部１/５	肩衝壷
71	kb03D118	A４	P･Q-105	SD602		須恵器	甕	25.0		9.4	灰	灰	１～５㎜長石多	良	ロクロナデ、ハケメ	ロクロナデ、タタキ	口縁部１/６	内面当具痕をハケで消す
72	kb03D111	A４	P-105	SD602		須恵器	高台杯	12.8	7.0	4.0	灰白	灰白	0.5～１㎜の長石多	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口縁部から 底部１/５	貼り付け高台
73	kb03D110	A４	P･Q-105	SD602		須恵器	高台杯	14.2	8.2	4.6	灰	灰	１㎜長石微	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口縁部から 底部１/６	貼り付け高台
74	kb03D116	A４	Q-105	SD602		須恵器	高台杯	15.6	9.5	7.1	灰白	灰白	0.5～２㎜長石多、　噴出物（黒）	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口縁部から 底部１/４	底部内面平滑、外面に一部カキメ状
75	kb03D144	A５	Q-105	SD602		須恵器	蓋			3.2	灰	灰	微砂粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	全体の１/６	
76	kb03D113	A４	P･Q-105	SD602		土師器 内黒	高台椀		10.0	2.9	黒	淡黄	0.5㎜の石英・長石多	良	ミガキ	ロクロナデ、ナテ、゛回転ヘラ切り	底部７/８	
77	kb03D112	A４	P-105	SD602		土師器 赤彩	高台椀		6.7	2.6	浅黄橙	橙	長石、焼土塊、粘土縞状に入る	良	摩滅	ロクロナデ	底部のみ	外面赤彩
78	kb03D109	A４	P-105	SD602		須恵器	杯	14.5	12.0	2.3	青灰	青灰	0.5～１㎜の長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラケズリ後ナデ	口縁部１/８	
79	kb03D120	A８	J-101	SD632		土師器 内黒	高台椀		7.3	3.1	黒	にぶい黄橙	長石・石英、焼土塊	良	ヘラミガキ、ナデ	ロクロナデ、ナデ	底部１/２	貼り付け高台
80	kb03D135	A８	J-101	近世溝	東	緑釉陶器	高台椀		6.6	2.0	浅黄橙	浅黄橙	緻密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	底部１/３	釉剥がれている
81	kb03D145	A５	L-102	SD608		須恵器	甕	24.5		8.8	灰	灰	長石	良	タタキ、ヨコナデ	ヨコナデ	細片	当て具痕
82	kb03D132	A８	N-101	SD627		須恵器	蓋	13.7		2.2	灰白	灰白	微砂粒	不良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ヘラケズリ		生焼け
83	kb03D134	A８	N-101	SD627		須恵器	高台杯		7.1	3.9	灰	灰	長石・石英	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	底部１/４	貼り付け高台
84	kb03D129	A８	K-101	SD627		須恵器	広口壺	18.9		6.3	灰	灰	微砂粒	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ	破片	

遺物番号	整理番号	地区	グリッド	遺構名	（詳　　細）	種　別	器種名	口径	底径	器高	内色調	外色調	胎　　土	焼成	内調整	外調整	遺存度	その他
85	kb03D127	A 5 A 8	L-102 M-102 K-101 L-101 N-101	SK603 SK605 遺構検出 SD627 SD627 包含層	1 上層	須恵器	短頸壺	13.8		15.6	灰	灰	長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ	破片	
86	kb03D130	A 8 A 5	K-101 K-102	SD627S- D628 溝		須恵器	甕				灰白	灰白	長石	良	タタキ	タタキ	破片	１次的に火を受ける利用 内面が剥離
87	kb03D131	A 8 A 5	K-101	SD627 P6076		須恵器	甕	38.0			灰	灰	長石	良	タタキ	タタキ	破片	２次的に火を受ける利用 内面が剥離
88	kb03D133	A 8	N-101	SD627		須恵器	四耳壺か？			6.0	灰	灰	微砂粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	破片	外面全体に自然釉
89	kb03D128	A 8	L-101	SD627	サブトレンチ	土師器	杯		4.0	1.6	黄灰	黄灰	微砂粒	良	ナデ	ロクロナデ、回転糸切り	底部のみ	
90	kb03D139	A 8	K-101	SD627		土師器 内黒	高台椀		7.3	3.0	黒	浅黄橙	微砂粒	良	ヘラミガキ	ヨコナデ	底部のみ	内外面とも磨耗著しい
91	kb03D138	A 8	K-101	SD627		土師器 内黒	高台椀		10.3	3.3	黒	にぶい橙	微砂粒、粘土が縞状にはりる	良	ヘラミガキ	ナデ	底部２/３	内外面とも磨耗著しい
92	kb03D126	A 5 A 8	L-102 L-101	SK603 SK627	５、６、７	須恵器	甕			20.5	灰	灰	長石	良	ヨコナデ	タタキ、ヨコナデ	破片	当て具痕
93	kb03D209	A 5		SD628	８、27	緑釉陶器	椀	17.7		6.0	灰	灰	緻密	良			口縁１/６	釉調：明オリーブ
94	kb03D210	A 5		SD628	3	緑釉陶器	高台椀		6.8	2.1	灰白	灰白、黄色	緻密	良	ロクロナデ	ロクロナテ	底部のみ	緑釉：明オリーブ 貼り付け高台
95	kb03D121	A 5	J-102	SD628		須恵器	蓋	12.3		2.5	灰白	灰白	長石・石英、噴出物（黒）多、堅緻	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラケズリ後ナデ	全体の１/５	
96	kb03D123	A 5	J-102	SD628	西アゼ内	須恵器	蓋			3.0	灰	灰	長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラケズリ	全体の１/４	
97	kb03D122	A 5	J-102	SD628		須恵器	高台杯		12.0	1.7	灰	灰	微砂粒	良	ナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ	底部１/６	貼り付け高台
98	kb03D125	A 5	J-102	SD628		須恵器	短頸壺	10.4		4.8	灰	灰	微砂粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、沈線	口縁１/５	
99	kb03D172	A 8	J-101 L-101・ M-101	SD628 包含層		須恵器	瓶		10.2	12.0	灰	灰～暗灰	微砂粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	底部１/４	
100	kb03D137	A 5	J-102	SD628	下層東アゼ	土師器	高台椀	11.0	7.6	3.6	橙	橙	長石・石英、焼土塊	良	磨耗の為不明	磨耗の為不明	底部のみ	
101	kb03D124	A 8	K-101	SD628		土師器	高台椀		8.7	4.7	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微砂粒	良	磨耗の為不明	磨耗の為不明	底部のみ	貼り付け高台
102	kb03D140	A 5	J-102	SD628	下層東アゼ	土師器	皿	17.0	5.7	2.4	橙	橙	長石・石英、焼土塊	良	磨耗の為不明	磨耗の為不明	底部のみ	内面一部黒くなっている
103	kb03D234	A 5		SD628		土師器	把手	最大長5.2	最大幅3.0	最大厚2.5		にぶい橙	微砂粒、焼土塊、粘土が縞状にはりる	良	磨耗の為不明	磨耗の為不明		
104	kb03D163	A 5	K-102	SD638	36下	緑釉陶器	高台椀		6.1	1.6	灰	灰	緻密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	底部小片	釉：淡緑色 貼り付け高台
105	kb03D171	A 5	L-102	SD638		須恵器	壺			7.5	灰	灰	微砂粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	肩部１/６	四耳壷か？
106	kb03D161	A 5	K-102	SD638	95	須恵器	双耳瓶			10.5	灰	暗灰	長石・石英	良	ロクロナデ	ロクロナデ	体部の１/８	突帯
107	kb03D150	A 5	K-102	SD638	94	須恵器	甕			13.5	灰	灰	１～３㎜の長石	良	タタキ	タタキ、カキメ	肩部１/５	
108	kb03D146	A 5	K-102	SD638	45、48、49、50、76、94、313、316、318、319	土師器 内黒	高台椀	14.6	8.1	6.1	黒	灰白～浅黄橙	0.5～１㎜の砂（白、白透明、白濁、灰色）	良	ミガキ	ヨコナデ	全体の１/４	貼り付け高台
109	kb03D170	A 5	K-102	SD638	319、320、321	土師器	高台椀	14.7	7.5	4.6	にぶい橙～橙	にぶい橙～橙	微砂粒、焼土塊	良	磨耗の為不明	磨耗の為不明	ほぼ完形	貼り付け高台
110	kb03D164	A 5	K-102	SD638	2	土師器	高台椀		6.9	2.3	にぶい橙	にぶい橙	焼土塊	良	磨耗の為不明	磨耗の為不明	底部１/２	貼り付け高台

遺物番号	整理番号	地区	グリッド	遺構名	（詳　　細）	種　別	器種名	口径	底径	器高	内色調	外色調	胎　　土	焼成	内調整	外調整	遺存度	その他
111	kb03D162	A５	K-102	SD638	311	土師器	高台椀		8.3	3.5	にぶい橙	にぶい橙	微砂粒、海綿骨針、焼土塊	良	磨耗の為不明	磨耗の為不明	底部１/２	貼り付け高台
112	kb03D165	A５	K-102	SD638	57	土師器	杯	12.0	3.6	3.5	にぶい橙	にぶい橙	微砂粒、焼土塊	良	磨耗の為不明	磨耗の為不明	全体の１/３	回転糸きり
113	ka03D276	A３		SD067		須恵器	蓋	15.2		3.5	灰	灰	白礫少、白粗砂少	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り→ナデ	口縁部１/８	
114	kb03D136	A８	L-101	近世溝	東	須恵器	甕	29.1		14.1	灰	灰	長石、、石英	良	タタキ、ヨコナデ	ヨコナデ	口縁１/４	当て具痕
115	kb03D201	A５	L-103	P6066		土師器内黒	高台椀		7.6	2.4	黒	にぶい橙	雲母	並	磨耗の為不明	磨耗の為不明	底部１/５	貼り付け高台
116	kb03D199	A５		P6074		土師器	皿	9.8	4.3	2.5	にぶい橙	にぶい橙	長石、石英、焼土塊	やや不良	磨耗の為不明	磨耗の為不明	全体の１/３	回転糸きりか？
117	kb03D200	A５		P6074		土師器	杯	12.6		3.3	にぶい橙	にぶい橙	微砂粒、焼土塊	並	ナテ	磨耗の為不明	口縁１/４	
118	kb03D189	A５		P6080	2	土師器赤彩	杯	11.9	5.2	3.8	にぶい橙	にぶい橙	微砂粒、焼土塊、粘土が縞状にはりる	良	ナデ	磨耗の為不明		外面赤彩
119	kb03D159	A８	J-101	包含層		灰釉陶器	皿	12.4	7.0	2.2	灰白	灰白	緻密	良	ロクロナデ	ヨコナデ	底部１/２	内面転用硯、釉かかってない
120	kb03D193	A８	I-101	遺構検出		緑釉陶器	高台皿		6.2	1.3	浅黄橙	浅黄橙	緻密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	底部１/３	釉：明オリーブ灰
121	kb03D188	A５	L-103	P6063	上層	須恵器	高台杯	13.1	7.0	5.0	灰	灰	長石、石英	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ	１/２	貼り付け高台
122	kb03D202	A５	L-103	P6044		須恵器	高台杯		6.1	3.7	灰	灰	微砂粒	良	ロクロナデ	ロクロナテ	底部１/６	貼り付け高台
123	kb03D197	A５	N-104	P6009	掘り方	土師器	高台皿		17.6	1.9	にぶい橙	にぶい橙	長石	良	磨耗の為不明	磨耗の為不明	底部１/６	
124	kb03D196	A８		P6030		須恵器	杯蓋	12.0		14.5	灰	灰	微砂粒、黒い噴出物堅緻	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁１/６	
125	kb03D190	A８	L-101	P6037		土師器	杯	13.0	4.8	3.9	にぶい橙	にぶい橙	微砂粒、焼土塊、粘土が縞状にはりる	並	磨耗の為不明	磨耗の為不明	ほぼ完形	
126	kb03D173	A８	L-101	包含層		土師器	皿	9.7	5.1	2.9	にぶい橙	にぶい橙	0.5～１㎜の砂（白）少	良	ロクロナデ磨耗	ロクロナデ	全体の２/３	内面に油煙、
127	ka03D279	A３	Q-98	P804		須恵器	蓋	12.5		2.6	灰	灰	白礫、白粗砂多	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り→ナデ	口縁部３/８	内面に墨痕弱
128	ka03D278	A３	P-98	P803		須恵器	有台坏	11.0	7.6	4.5	灰	灰	白礫大、白粗砂・細砂	良	ロクロナデ	ロクロナデ 底部ヘラ切り→ナデ	口縁部１/10、底部１/２	口縁部に割れてから油煙付着
129	ka03D277			落ち込み		須恵器	無台坏	12.8	8.6	3.1	灰白	灰白	白礫多	不良	ロクロナデ	ロクロナデ 底部ヘラ切り→ナデ	口縁部３/８、底部１/２	
130	ka03D280	A３		P99杭の南西		須恵器	無台坏	12.2	9.2	3.0	灰白	灰白	白礫多、白粗砂	不良	ロクロナデ	ロクロナデ 底部ヘラ切り→ナデ	口縁部１/４、底部１/２	

第５表　土製品観察表

遺物番号	整理番号	地区	グリッド	遺構名	（詳　　細）	種別	器種名	口径	底径	器高	内色調	外色調	胎　　土	焼成	内調整	外調整	遺存度	その他
131	kb03D224	A-５区		SK606	73		如来坐像	10.6	9.1	8.3		浅黄橙	微砂粒、焼土塊、粘土が縞状にはりる	良	磨耗のため不明	磨耗のため不明		
132	kb03D230	A-５区	N-104	SD614			蓮華座	6.9	9.8	3.9		浅黄橙	微砂粒・焼土塊					切り込み
133	kb03D218	A-５区	L-102	SK605	14		菩薩脚	7.7	5.7	3.8	にぶい橙～橙、灰～黄灰	にぶい橙～橙、灰～黄灰	焼土塊	良	指ナデ	指ナデ		
134	kb03D227	A-５区	K-102	SK606			菩薩ひざ	2.7	4.7	2.4		浅黄橙	焼土塊	良				小さな気泡多い
135	kb03D225	A-５区		SK606	117		如来顔	5.2	4.6	2.4	にぶい黄橙	浅黄橙	焼土塊	良				小さな気泡多い
136	kb03D220	A-５区		SK605	215		瓔珞	2.7	2.4	1.5		にぶい橙～浅黄橙	微砂粒・赤色粒	良	指ナデ	指ナデ		

遺物番号	整理番号	地区	グリッド	遺構名	（詳　　細）	種別	器種名	口径	底径	器高	内色調	外色調	胎　　土	焼成	内調整	外調整	遺存度	その他
137	kb03D221	A-５区	L102	SK606	24		仏像破片	6.2	4.7	1.6		浅黄橙	焼土塊	良	磨耗のため不明	磨耗のため不明		小さな気泡多い
138	kb03D232	A-８区	M101	SD627			人形	1.8	2.1	1.8		淡橙	微砂粒・焼土塊	良				合掌形
139	kb03D226	A-５区	K102	SK606			人物頭部	4.8	3.4	4.1		浅黄橙	焼土塊	良				小さな気泡多い
140	kb03D217	A５	L102	SK606			飲食器		5.8	3.3	灰黄	灰黄	微砂粒	良	指ナデ	指ナデ		
141	kb03D223	A５	L102	SK606	上層			7.5		(3.2)	灰	にぶい橙	0.5～２㎜の砂少			磨耗		内面火を受けている
142	kb03D166	A５	L102	SK606				3.8		(3.0)	浅黄橙	浅黄橙	0.5～１㎜の砂（白）少、焼土塊少	良	ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕		
143	kb03D219	A５	L102	SK605				2.5	2.3.	2.2		灰～暗灰	0.5㎜の砂（白）少	良				小さな気泡多い
144	kb03D222	A５	L102	SK606	上層			1.7	3.1	2.9		浅黄橙	焼土塊	良	磨耗のため不明	磨耗のため不明		
145	kb03D233	A８	M101	SD627				3.5	3.4	1.6		淡橙	微砂粒・焼土塊	良				線刻あり
146	kb03D231	A８	K101	SD625				3.3	4.1	0.8	赤灰	赤灰	微砂粒・焼土塊	良	指ナデ	指ナデ		円形、穿孔４個
147	kb03D235	A５	K102	SD638	上層		炉壁	2.8	3.6	2.1	灰白	褐灰	焼土塊、粘土が縞状にはりる					小さな気泡多い
196	kb03S033	A４	R105	SD602			炉壁	14.6	21.5	15.2		赤灰	籾殻のようなスサ、	良				全体に火を受けている気泡多い
197	kb03D215	A５	L102	SK603	№26		炉壁	14.2	10.6	5.0								
198	kb03D229	A５	L103	SE604			炉壁	15.5	6.5	6.6		淡褐	籾殻のようなスサ、焼土塊	良				全体に火を受けている気泡多い
199	kb03D228	A５	L103	SE604	２層、ベース直上黒褐色粘質土		炉壁	16.2	13.4	5.8		橙	微砂粒、焼土塊、粘土が縞状にはりる	良				気泡多い

第６表　木製品観察表

遺物番号	整理番号	地区	グリッド	遺構１	（詳　　細）	種　　類	長cm	幅cm	厚cm	樹　　種	その他
149	kb03W048	A４	O102	SE602	曲物外周埋土中	縦板	24.6	5.7	0.75		
150	kb03WS064	A４	O102	SE602	№11北面	縦板	62.1	19.5	2.7		加工痕、圧痕あり
151	kb03W062	A４	O102	SE602		縦板（１）	54.7	21.9	2		工具痕あり
152	kb03W061	A４	O102	SE602		縦板（２）	55.6	18.5	1.9		工具痕あり
153	kb03W042	A４	O102	SE602	№８	縦板	59.9	20.2	1.9		
154	kb03W060	A４	O102	SE602		縦板（３）	59.85	19.4	2.35		加工痕あり
155	kb03W063	A４	O102	SE602	№10	縦板	67	5.5	2.7		
156	kb03WS063	A４	O102	SE602	隅柱４北西西面	隅柱	82.6	6.2	6.2	スギ	
157	kb03WS062	A４	O102	SE602	隅柱３南西西面	隅柱	79.9	6.4	4.6		加工痕あり
158	kb03W049	A４	O102	SE602	南東南面	隅柱（２）	38.7	5.6	4.8		欠損あり
159	kb03W047	A４	O102	SE602	北東南面	隅柱（１）	42.8	7.7	5		段あり、ホゾ穴（丁寧な加工でない）
160	kb03W050	A４	O102	SE602	掘り方内	斎串	15.1	1.7	0.3	スギ	
161	kb03W044	A４	O102	SE602		横桟（１東）	45.3	3.8	3.4		
162	kb03W043	A４	O102	SE602		横桟（３西）	46.8	3.95	3.3		
163	kb03W045	A４	O102	SE602		横桟（２南）	59.55	5.7	3.6		段あり
164	kb03W046	A４	O102	SE602		横桟（４北）	54.8	4.2	4		
165	kb03W039	A５	L103	SE604	33	曲物の底板	13.75	13.6	0.9		釘穴５ヶ所
166	kb03W038	A５	L103	SE604	4	楕円形曲物の底板？	15.8	7.25	1.25		
167	kb03W033	A５	L103	SE604	３－a層	？	78.5	1.2	0.55		

遺物番号	整理番号	地区	グリッド	遺構１	（詳　　細）	種　　類	長cm	幅cm	厚cm	樹　　種	その他
168	kb03W040	A５	L103	SE604	31	曲物の縦枠？	28.4	5.1	0.45		
169	g04WS041	A５	L103	SE604	北面	横板	20.9	85.3	6.3		相欠きほぞ、ほぞ穴
170	g04WS038	A５	L103	SE604	東面	横板	27.2	85.2	5.1		相欠きほぞ、ほぞ穴
171	g04WS040	A５	L103	SE604	南面	横板	22.1	85.4	5.1		相欠きほぞ、ほぞ穴
172	g04WS039	A５	L103	SE604	西面	横板	19.6	82.8	3.2		相欠きほぞ、ほぞ穴
173	g04W004	A４	O102	SE602		曲物					
174	kb03W091	A６	R・S107	SE603	№93	斎串	18.4	1.8	0.3	スギ	
175	kb03W017	A６	R・S107	SE603	№99	斎串	18.8	1.8	0.3	スギ	
176	kb03W016		R・S107	SE603	曲物３段目下面	漆器	直径10.9	－	－	ケヤキ	全面黒漆付着
177	kb03W089	A６	R・S107	SE603	№89、曲物６段目上層	櫛	10.2	4.4	0.9	イスノキ	
178	kb03W090	A６	R・S107	SE603	№70、曲物６段目上層	櫛	6	4.3	1.05	イスノキ	
183	kb03WS100	A６	R・S107	SE603	曲物中段タガ上側	曲物	内径57.2、内円周179.6、板の厚さ0.7	縦板厚さ0.4、巾4.8、長さ36	たが厚0.5、外径60.4	上たが巾5.0、下たが巾4.5	（上面）釘穴４箇所、木釘３個残、木皮５箇所 （下面）釘穴33ヶ所、木釘29個残
184	kb03WS096	A６	R・S107	SE603	曲物上から３段目	曲物	30.5	3.6	0.4		釘穴４ヶ所
185	g04W002	A６	R・S107	SE603	④	曲物	38.4	24.9		スギ	
186	g04W001	A６	R・S107	SE603	⑤	曲物	33.2	24.3		スギ	
187	kb03WS097	A６	R・S107	SE603	曲物上段	曲物	61.6	18.6	0.6		
188	kb03WS098	A６	R・S107	SE603	曲物６段目	曲物	33.4	30.5	0.9		釘穴25ヶ所、釘５個残存　　木皮２ヶ所

第７表　石製品観察表

遺物番号	整理番号	地区	グリッド	遺構１	（詳細）	種類	長cm	幅cm	厚cm	重量g	石材	その他
201	kb03S024	A６	R･S107	SE603	№32	焼石	19.1	14.7	17	4700	凝灰角礫岩	火を受けている
202	kb03S025	A６	R･S107	SE603	№24	焼石	18.5	19.3	18.7	7850	花崗岩	火を受けている
191	kb03S027	A４	P105	SD602		砥石	12.3	8.6	4.7	440.08	凝灰岩	
148	kb03S029	A５	M102	SD608		石帯	2.4	2.7	0.7	7.56	頁岩	
182	kb03S031	A６	R･S107	SE603	№95	炉石	13.6	12.7	4.4	984.6	安山岩	火を受けている、一部黒化
181	kb03S032	A６	R･S107	SE603	曲物内２層、10層	炉石	9.8	10.5	4.7	492.07	流紋岩	火を受けている、表面は滑らか
194	kb03S034	A４	PQR105	SD602		大型砥石	12	16	7	1800	凝灰角礫岩	火を受けている
195	kb03S035	A４	PQR105	SD602		砥石	9.5	13.2	10.3	1500	凝灰岩（砂岩質）	
190	kb03S036	A４	Q105	SD602		砥石	8.7	6.3	5.2	326.06	凝灰岩（泥岩質）	
208	kb03S038	A５	L102	SK606	№25	焼石	19.9	32.75	15.6	12450	花崗岩	火を受けている
192	kb03S039	A４	Q105	SD602			14	11	4.5	983.22	流紋岩	火を受けている、煤が厚く付着
193	kb03S040	A４	Q105	SD602		焼石	8.4	9.3	2.8	234.54	凝灰角礫岩	火を受けている、砥石、石錘として転用
189	kb03S041	A４	PQ105	SD602		焼石（砥石転用）	9.1	3.3	6.3	220.68	凝灰岩（砂岩質）	火を受けている
200	kb03S042	A５	L103	SE604	中層	焼石	9	5.1	4.1	220.05	凝灰角礫岩	多量の煤付着
206	kb03S043	A５	L102	SK606	アゼ	砥石（転用）	23.1	12.3	5	209.4	軽石	
204	kb03S044	A５	L102	SK605			12.8	10.8	4.2	160.4	軽石	加工痕あり、貫通穴６ヶ所
207	kb03S045	A５	L102	SK603			17.8	14.3	9.8	362.2	軽石	加工しようとした痕あり
203	kb03S046	A４	L102	SK605		軽石、砥石	9.2	12.5	3.1	61.3	軽石	穴５ヶ所あり、１ヶ所貫通
205	kb03S047	A５	L102	SK606	アゼ	軽石、砥石	5.5	7.9	2	17.7	軽石	
179	kb03S048	A６	R･S107	SE603	覆土６層	石帯	3.8	3.6	0.53	13.85	滑石	孔の縁黒くなっている

第８表　骨観察表

番号	整理番号	地区	グリッド	遺構１	（詳細）	種類	長cm	幅cm	厚cm	材質	その他
180	kb03H001	A６	SE603	№62		橈骨	9.95	2.35	1.95	小型ほ乳類	

第５章　まとめ

畝田ナベタ遺跡は９世紀代を中心とする建物群からなり、井戸が付随する状況であることは、調査概要（県埋文2002）のとおりである。その後、和田龍介によってより細かい分析が行なわれた（和田2004）。和田は畝田ナベタ遺跡の中心部を政庁域とその北の雑舎域、南に離れて倉庫域、北に離れて工房域に区分した。本書で報告したA地区は、そのうち工房域とする地区である。

⑴古代の遺構

建物と景観

A区における９世紀の遺構は比較的少ない。建物跡は３棟確認したものの、確実に９世紀に建っていたものはなく、少なくとも11世紀ごろの可能性が高いと考えており、本遺跡の中心となる遺構群の一つにはなりえないと考える。それは、建物構造が総柱となっていることと、井戸や廃棄土坑中の遺物が10世紀後半から11世紀ごろの特徴を示しているからである。また、本遺跡中心部分の建物で総柱構造をもつのは政庁域の南北方向に立つ１棟と他は高床倉のみであるので、この点からもA地区の建物の年代が下降するものと判断できる。

また、SE603の廃絶は廃棄物を埋め込むことによって埋没させているかのようである。焼けた石や土器片・木片などとともに漆黒となった有機物層が厚く見られ、有機物を主体とする生活残滓が入れられたものであろう。さらに、井戸底近くに斎串２本と白木櫛が見られることは、井戸廃棄にかかる祭祀行為によるものであり、その後短時間に埋められたものである。この廃棄行為が検出した建物の廃絶（無人化）によるものとすると、その年代は本遺跡の主要な活動が収束した後に建てられたもので、11世紀後半には人間活動が終息し無人となっている。この終息年代が畝田C遺跡と同じであることに注意しなければならない。

畝田C遺跡は役所風の建物はなく、南北に長い２間×４間程度の小規模な建物が多くある。畝田・寺中遺跡や畝田ナベタ遺跡が役所的あるいは役所そのものかもしれないという遺跡の性格が推測されるのに対し、畝田C遺跡は農村的風景といえよう。一方、南新保E遺跡で検出した建物は小区画に配置された小建物群からなっており、この様相とは異なるものの、いずれも農村的景観と理解できる。すなわち畝田C遺跡が有力な農民層とすれば、南新保E遺跡が一般的な農民の建物といえよう。つまり、今回検出した建物がこのような農民の居宅である可能性を考え、畝田ナベタ遺跡が役所としての役割を終えた後に無人化したこの地区で生産活動を行なった農民と考える。もちろんこれはこの地を荘園として囲った寺社門閥の経営になるものである。

条里区画溝から西には畝溝が広がっている。それも畝の方向を違える２箇所の畑地を確認した。畝溝群の外側の調査がされていないのではっきりしたことはいえないが、地形的に下がっていくことから水田域になっていたものと推測できる。なお、この畝溝は条里区画溝掘削以前から存在しており、その年代的な上限は９世紀ごろである。

工房は？、条里溝は？

和田がA地区を工房としたのは、畝溝群にある土坑中から鍛治関係のスラッグ、炭や鍛造剥片、フイゴの羽口などとともに出土していることや、SK603などの廃棄土坑からも同様の遺物や炉壁が出土

していることから、鉄生産が推測できるためである。しかし、実際の工房を検出しているわけではない。なお、出土した椀形滓の分析では精錬鍛冶滓であることが判明し、平成17年度報告予定の第６分冊に分析結果を掲載する。

SK603などの土坑中からの出土品のうち、方形の炉壁がいくつも出土している。何回も使われて非常にもろくなったものは、どの面も火熱を受けて黒く変色し、その使われ方がアトランダムな置き方をされたことがわかる。つまり、火をおこす施設（炉）の設置が作業ごとに行なわれたのであり、いわば移動可能な施設である。この施設が製鉄のどの段階かわからないが、レンガ積みのようにできる簡便な施設であることを考えると鍛冶炉の可能性が高い。

さらに、軽石の大きなブロックが出土しており注目できる。大きな軽石にドリルで穴をあけたり、のこぎりを使うなどして分割したものが出土した。軽石は砥石として使われたようで、方形に小さくなったもの（205）がそれ以上使用不能ということで廃棄されたものであろう。弥生時代の終わりごろの集落遺跡から軽石が出土することが間々あり、砥石として使われたようである。金属製利器によって端面をこすったような線状痕が見られ、荒砥石のような使われ方が想定されるのである。今回の出土品も、金属器生産にかかる砥石である。

A地区にはほぼ真北に軸を持つ「コ」字状の溝を検出し、区画する機能を持つものである。内部にある大きな廃棄土坑がちょうど収まることから工房あるいは宗教施設などを区画するものであろう。この区画がどのような基準にのっとっているかである。

溝方位がほぼ真北を向くことからそれが条里にかかわる溝であることは2003年度の報告書で明らかにしたところであり（伊藤2003）、今回より詳しい地割を検討することはできないが、畝田・寺中遺跡の条里溝は中世の遺物が入っていることからも分かるようにその掘削時期が畝田ナベタ遺跡よりも新しいことに注意すべきである。

確実に古代の真北あるいはそれに直交する溝を中心に関係を調べ、なおかつ建物は位置に見られる不連続部分との関係も考慮に入れて、土地を区画する基準を調べる必要がある。それがおそらく条里にのってくるのであろう。畝田・寺中遺跡が奈良時代を中心にあり、畝田ナベタ遺跡が平安時代に活動の中心があることを考えると、この地域の条里の施工が９世紀になって行われたと判断したい。

⑵仏教関係遺物の歴史的意義

前項で見た廃棄土坑中から仏教関係遺物が出土した。本県にあっては、古代瓦の出土すらきわめて稀なことからすれば特殊事例かもしれない。しかしながら、飛鳥・白鳳時代以降広く仏教の普及が図られたことを思うと、今回の発掘例はその信仰が社会の深い部分まで浸透していたことを示すものである。

『日本霊異記』の大野郷畝田村の説話は有名である。話のポイントは、①畝田村に僧（寂林法師）が留まっていた、②横江臣成人は仏教を信仰し亡き母のために供養した、ことであろう。１点目の僧が留まることの意味を考えると、何らかの仏教施設で修行していることが推測でき、畝田村に寺とは呼べないまでも仏像を安置する施設－草堂のようなものかもしれない－が存在していたことを示唆するものである。２点目は、仏教を信仰できるような氏族が畝田村に居住していたことを示し、かつ供養のために仏堂をつくることができるような社会的な立場・環境にあることを示す。

また12世紀と少々時代は下るが、大野郷にある荘園の得蔵保の境界を示す文献記述に、東の端を「津屋寺縄手」としている。ちなみに、北と西は浜、南は川となっているので畝田周辺であることには間違いない。「津屋寺」が港湾に付随する寺院であると理解すると、港湾施設が戸水C遺跡から小河

川をさかのぼる低地部一体と考え、この付近に９世紀代から「津屋寺」が存在してもおかしくない。このように文献には見えないが、付近に仏教施設が存在する可能性が高いのである。

出土した仏像は、半跏思惟菩薩、阿弥陀とともに釈尊入滅の弟子像があるが、すべて土製という特徴がある。半跏思惟菩薩は飛鳥・白鳳期に多く見られるが９世紀ごろの類例はまれである。また、阿弥陀の背面は平坦になっているので、塼仏のように壁面に置かれたものである。これらが信仰対象として機能したことは論を待たないが、何ゆえ土製であるかということが問題となる。さらに、飲食器も土製で作るといういわば仏器一般を土で作る思想がある。

細かく見ると、半跏思惟菩薩のような立体的に作っているものは、赤みを帯びた色調で粉っぽい質感となっているが、阿弥陀のような塼仏は淡い灰褐色で砂質の強い胎土である。このようなつくりわけは偶然でなく製作の違いであり、胎土の違いを二つの異なる製作場所と考えることが可能である。

また、仏像の製作は阿弥陀の耳の表現や人物の顔の表現など稚拙な感はいなめないが、一見して仏像とわかる造形や袈裟の襞の表現・瓔珞など、おそらく手本となるものを忠実な模造を指向したものである。すなわち、仏像を知らなければ作り得ない器物であり、土製仏像製作者が仏師のような仏像製作者や僧侶のような教義に詳しい知識をもっている僧侶などと近い関係にあったといえよう。少なくともこれらの胎土は地元のものであるので、製作地はこの地域のどこかであり、遠路搬入されたものではない。

畝田ナベタ遺跡から内面に布目を持つ丸瓦が幾つか出土している（平成17年度刊行報告書参照）。今回の調査では、SD632から瓦小片が出土しており、その分布が遺跡全体に及び範囲が広い。古代の遺構に伴うものはなく瓦当や平瓦の出土がないので、どのような建物に葺かれていたのかわからない。少なくともこれらの仏教関係遺物出土したA地区から南に200mほど離れているので、直接関係付けることはできないが、可能性を否定するものではない。

以上より、本遺跡あるいはその周辺に仏教関係施設が存在していたことは確実である。廃棄土坑は10世紀ごろであるので、その時不要なものとして廃棄されたのである。その動機はわからないが、短時間に捨てられている廃棄状況から、破損したから捨てたのではなく何らかの事情により廃棄されたと考える。つまり畝田ナベタ遺跡中心部の消長に絡む可能性があり注意しなければならないだろうし、近くに仏教施設を付随することの意味は大きい。

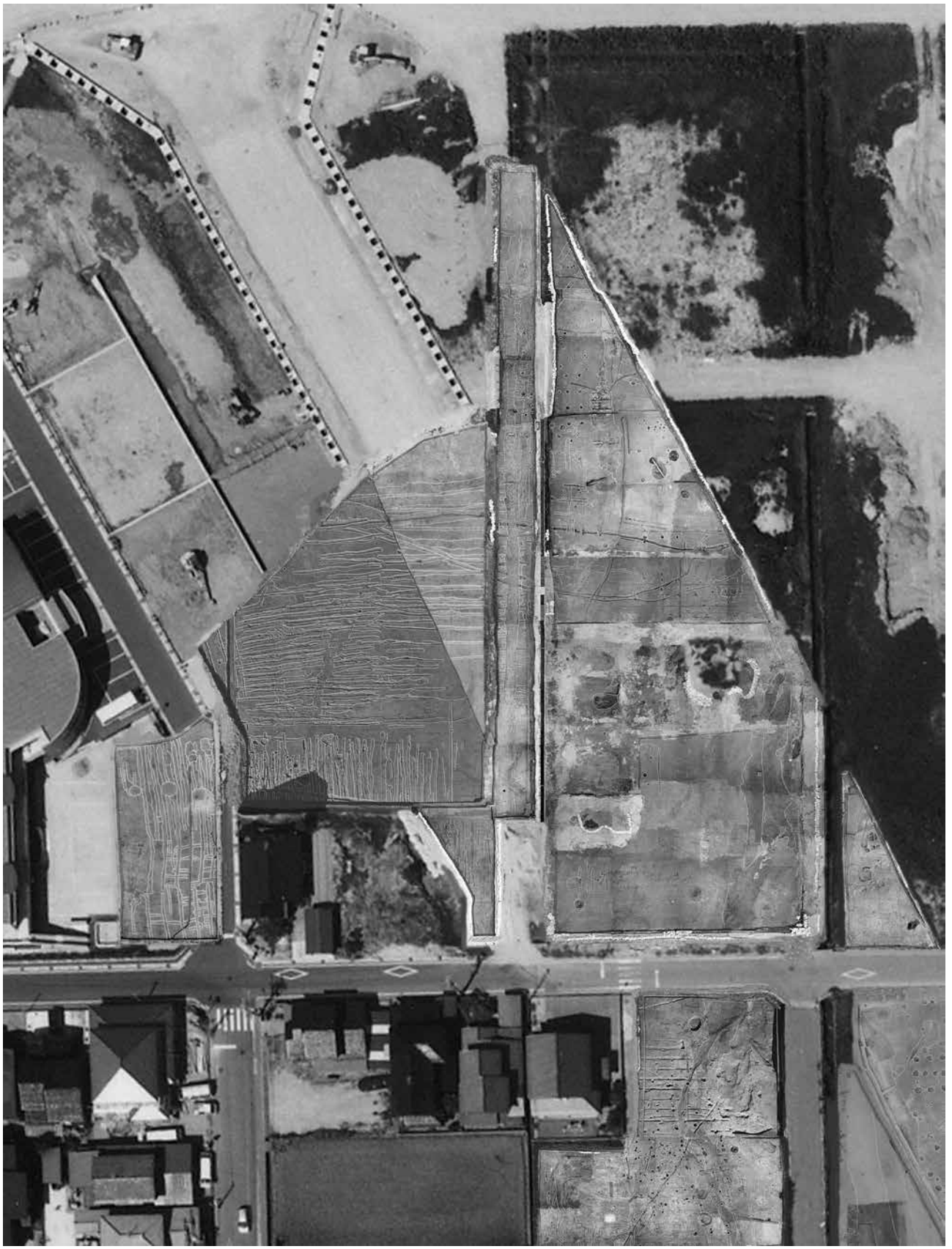
引用文献

伊藤雅文　2003　「総括」『畝田・無量寺遺跡　畝田B遺跡』石川県教育委員会・㈶石川県埋蔵文化財センター
㈶石川県埋蔵文化財センター　2002　『大野郷を掘る』
和田龍介　2004　「北加賀の古代遺跡２」『石川考古学研究会会誌』47

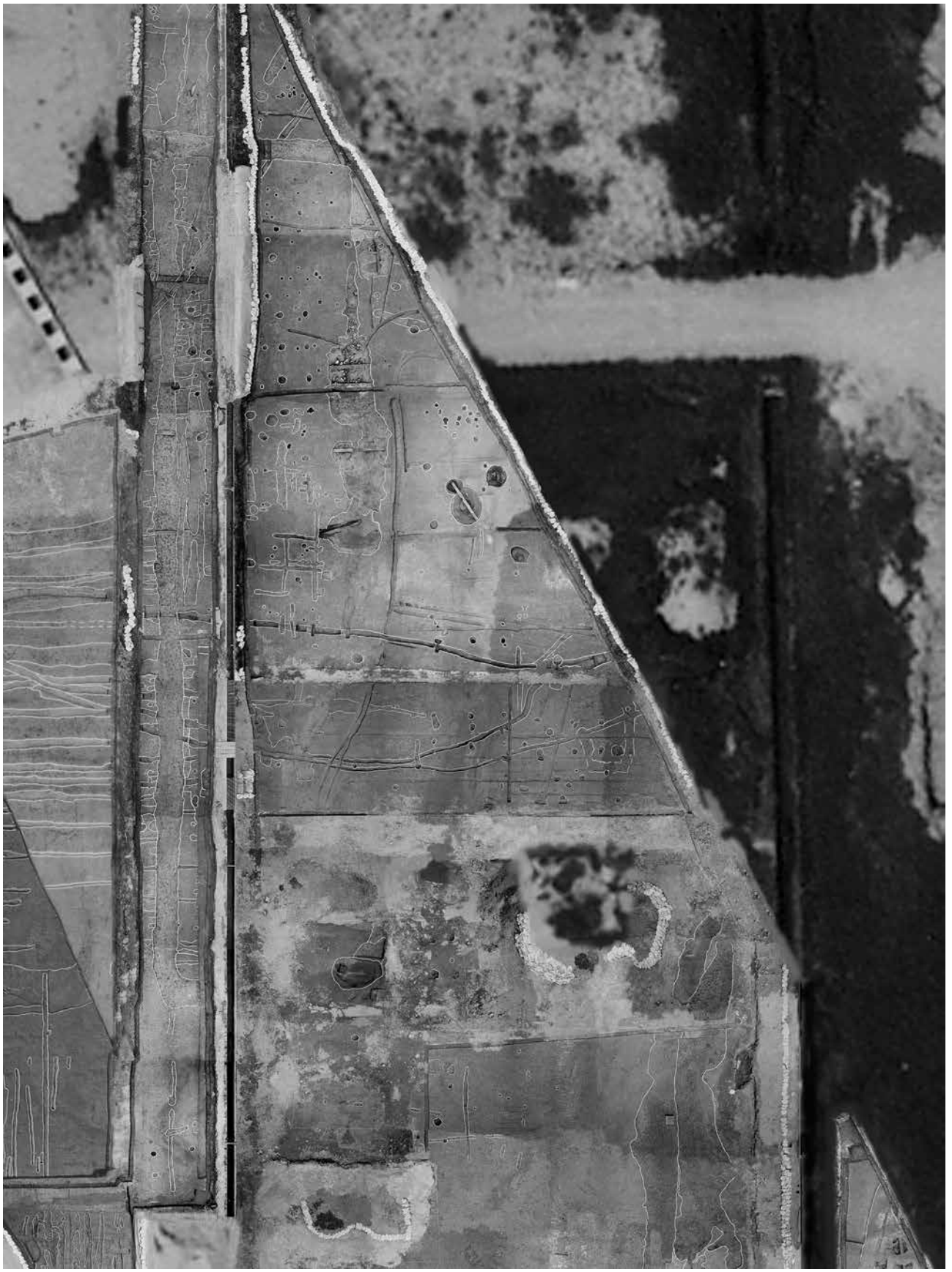
航空写真　北から南

航空写真　南から海を見る

図版　2



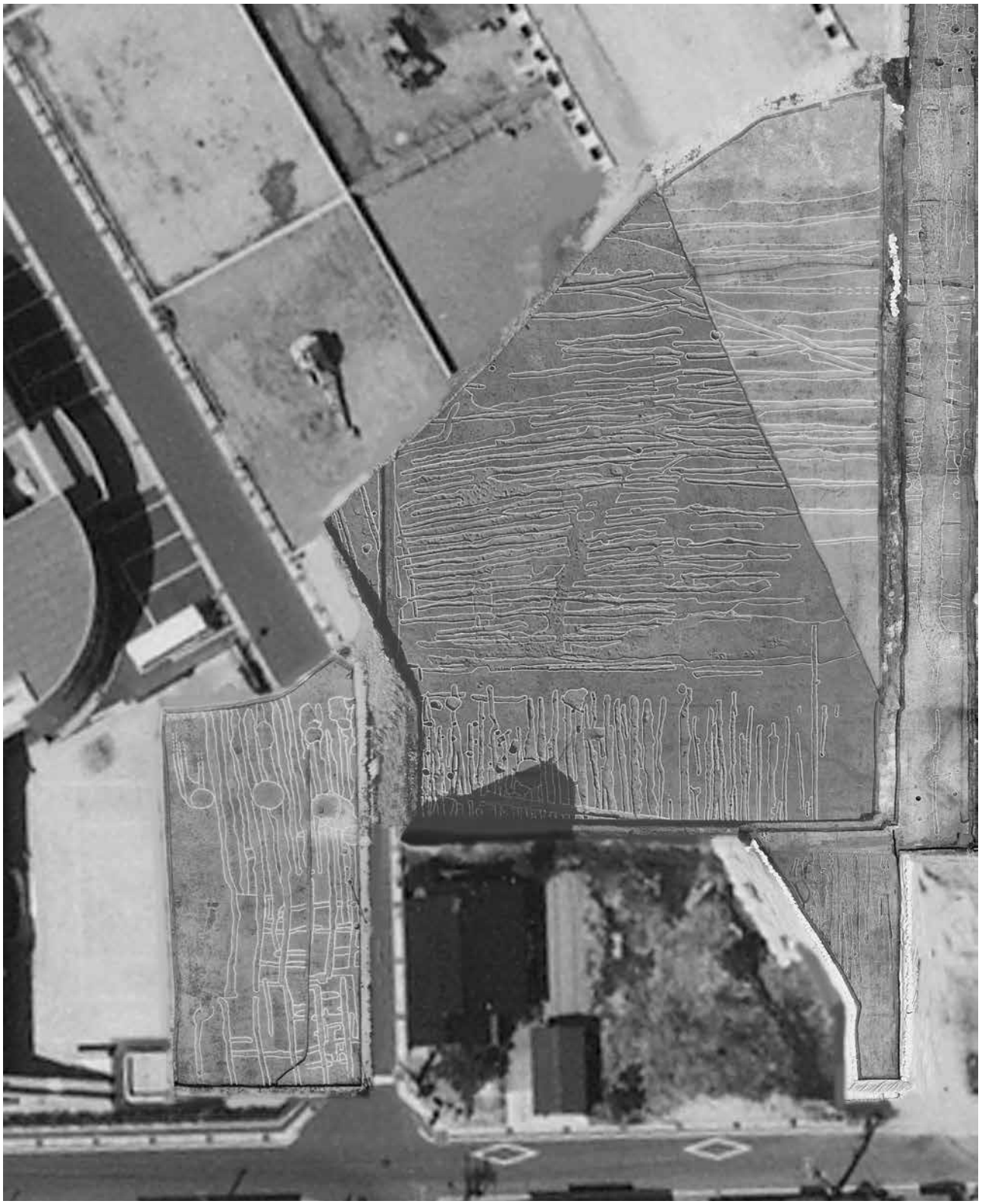
航空写真　A区全体



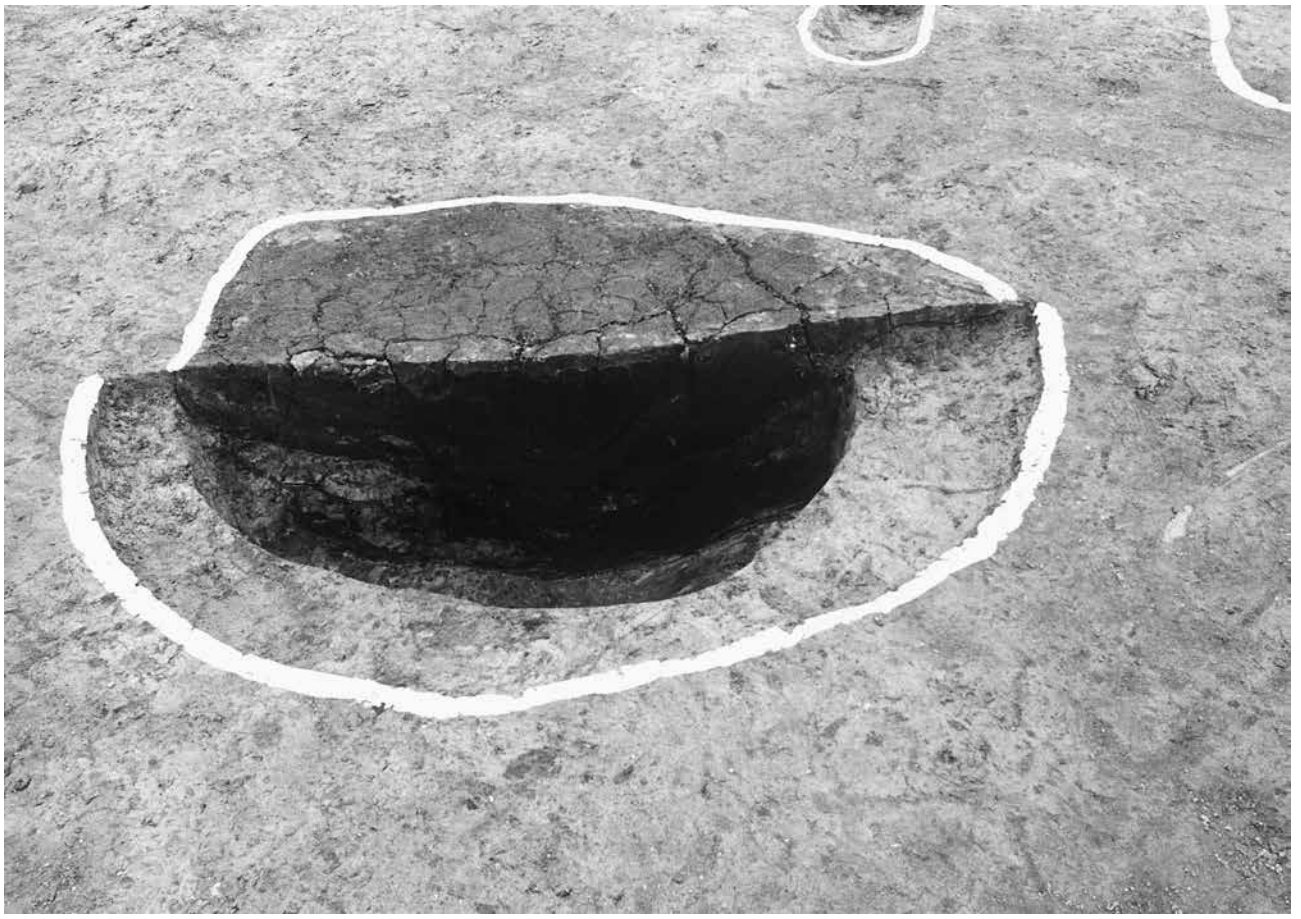
航空写真　条里区画溝内

航空写真　SB602と廃棄土坑関係

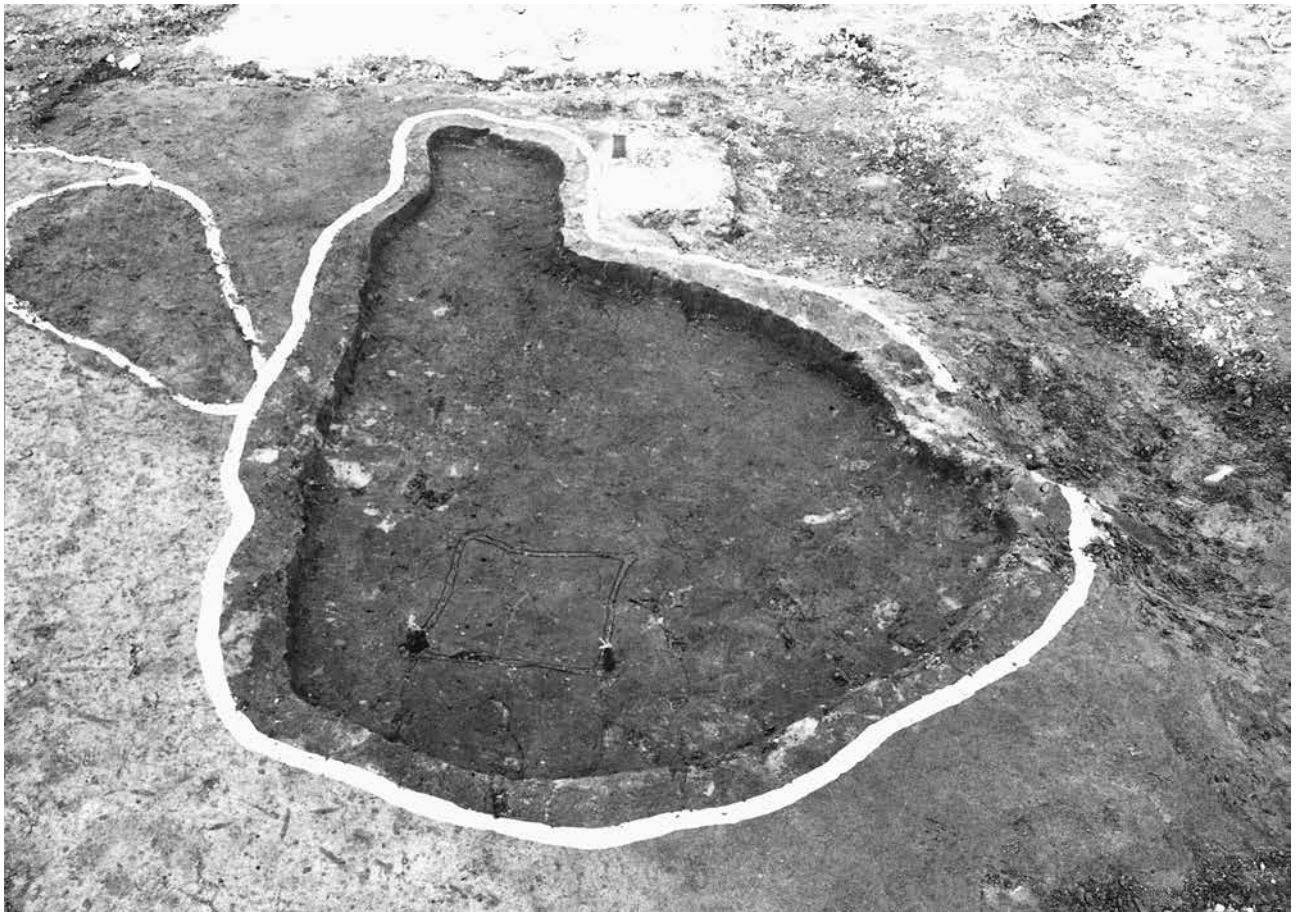
航空写真　区画溝南



航空写真　畝溝群

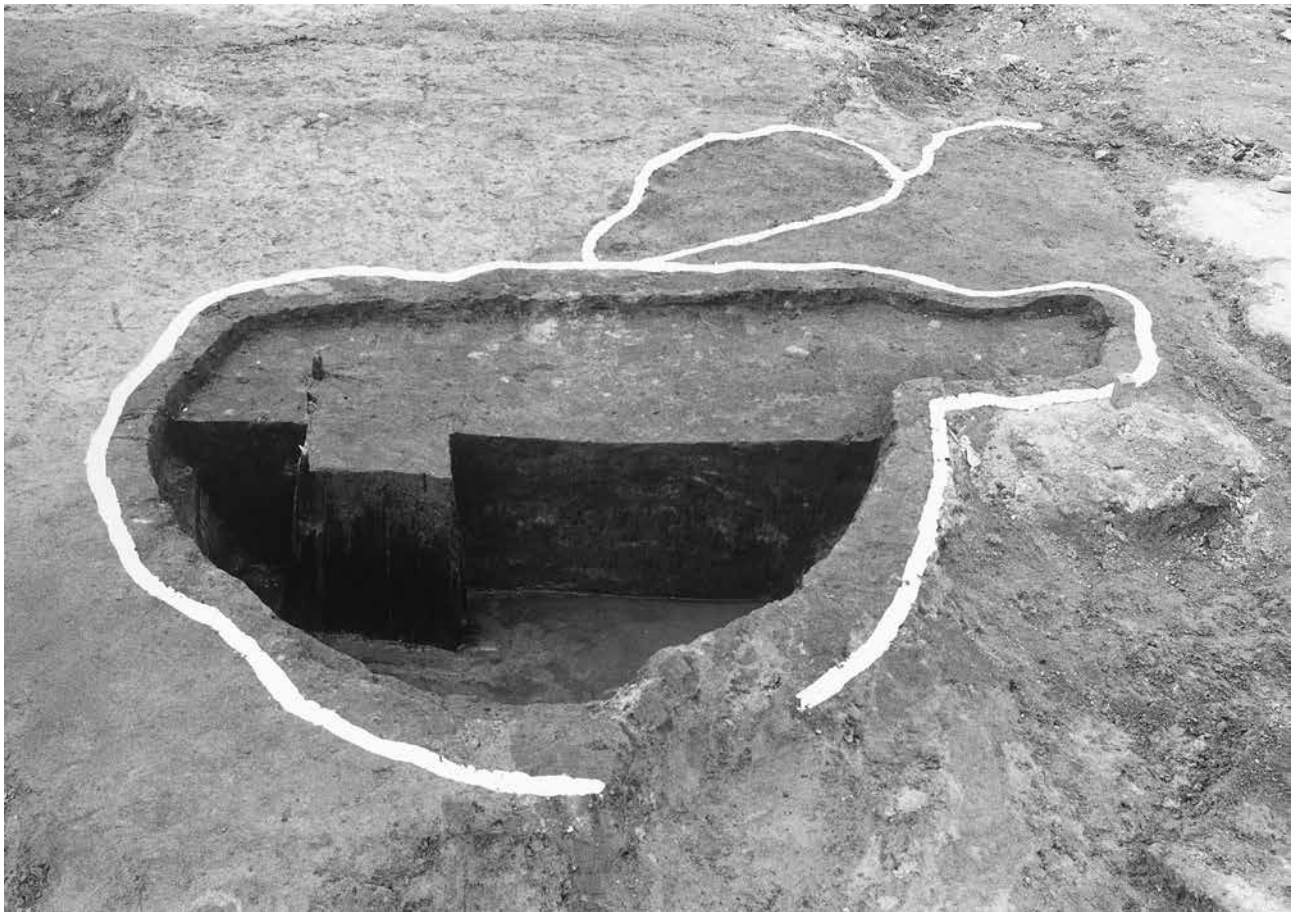


SE601（東から）



SE602上面

SE602井戸枠出土状況



土層断面

SE602井戸枠構造

同細部

SE603井戸枠１段・２段目

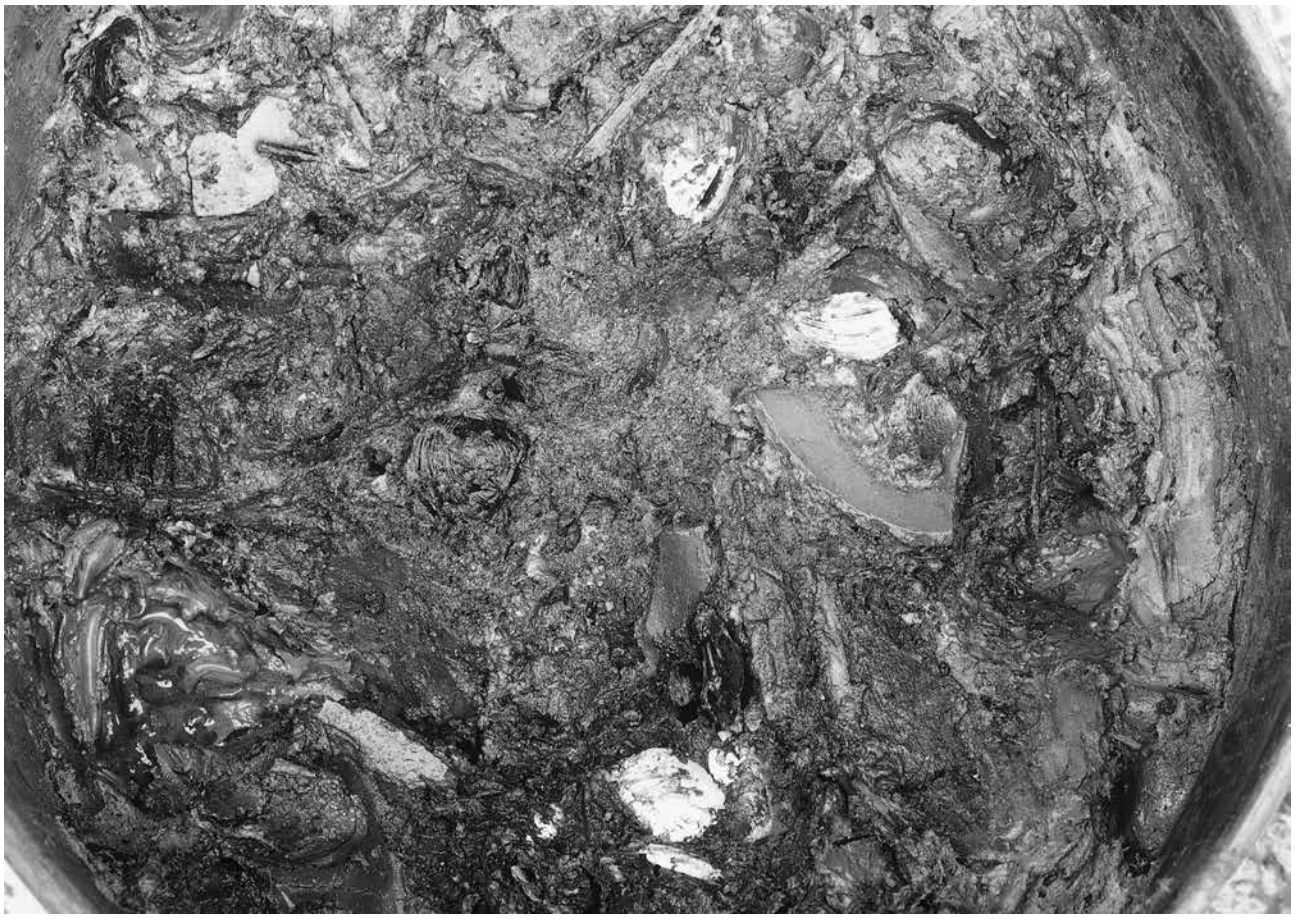
2段目　遺物出土状況

SE603井戸枠４段目

同内部

SE602井戸枠５・６段目

6段目遺物の状況（上）



SE603井戸枠 6 段目遺物の状況（下）

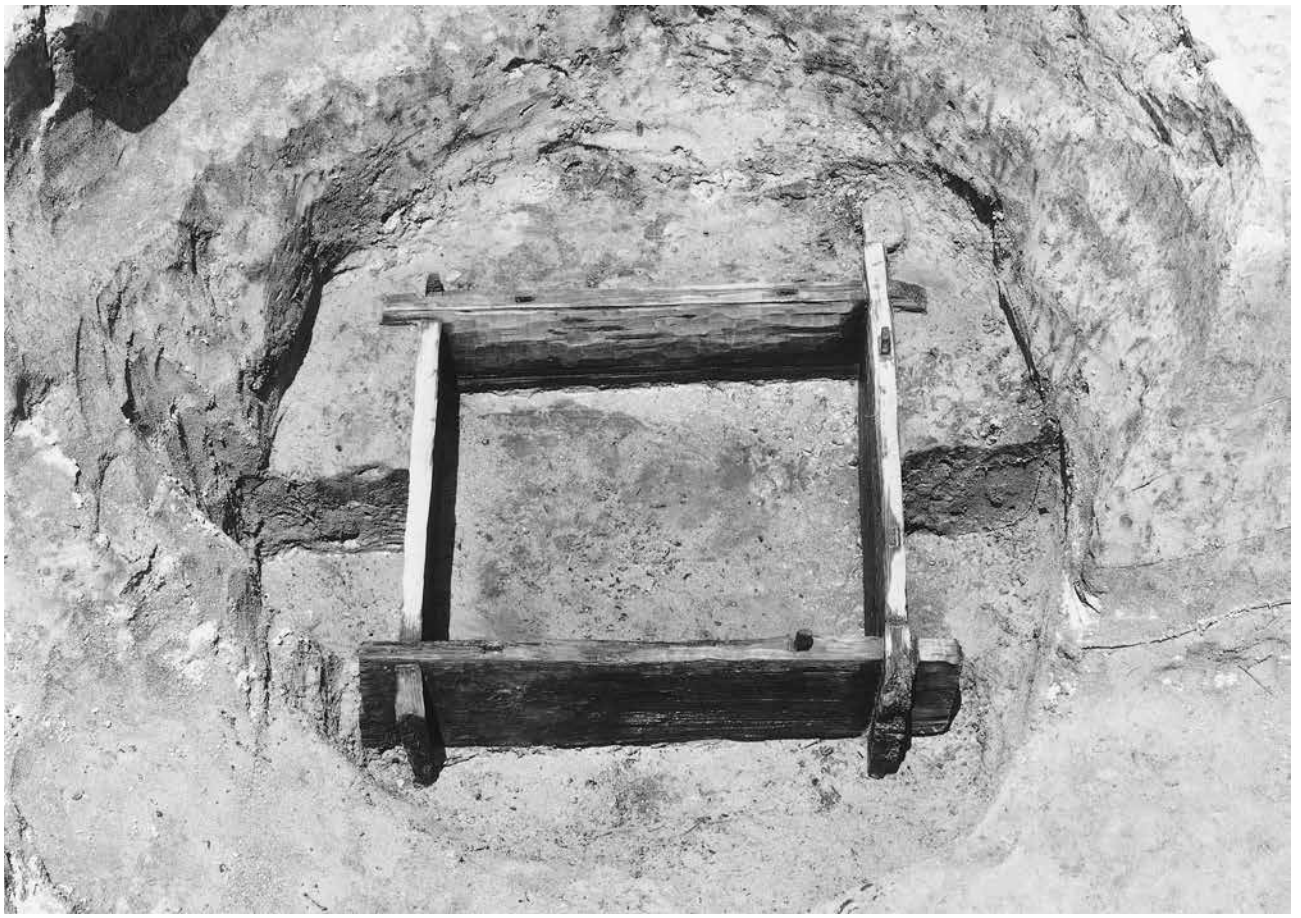
同（最下）

SE603井戸枠 6 段目遺物の状況（最下）

井戸枠外漆器出土

SE604

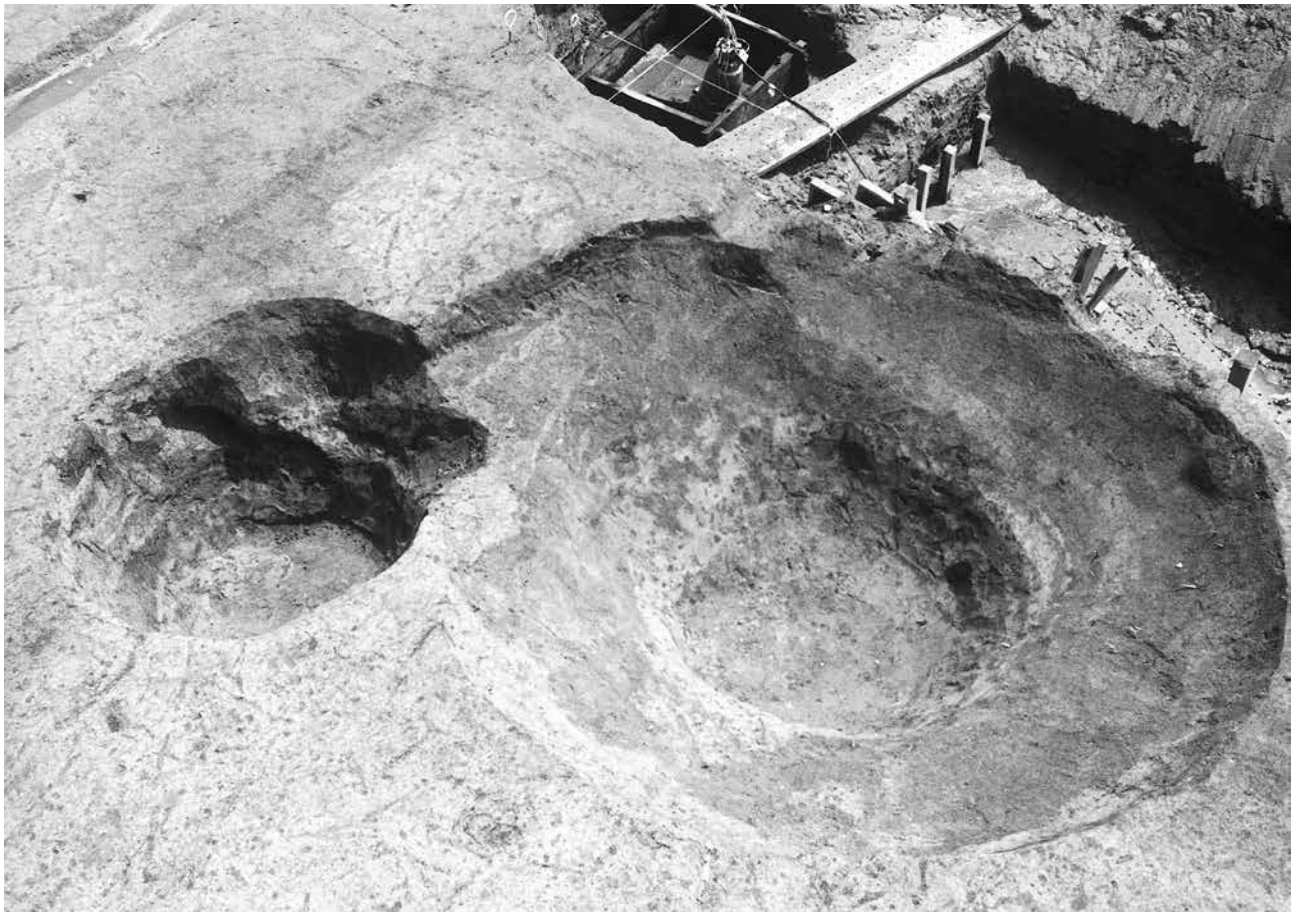
井戸枠内部



SE604井戸枠

堆積状況

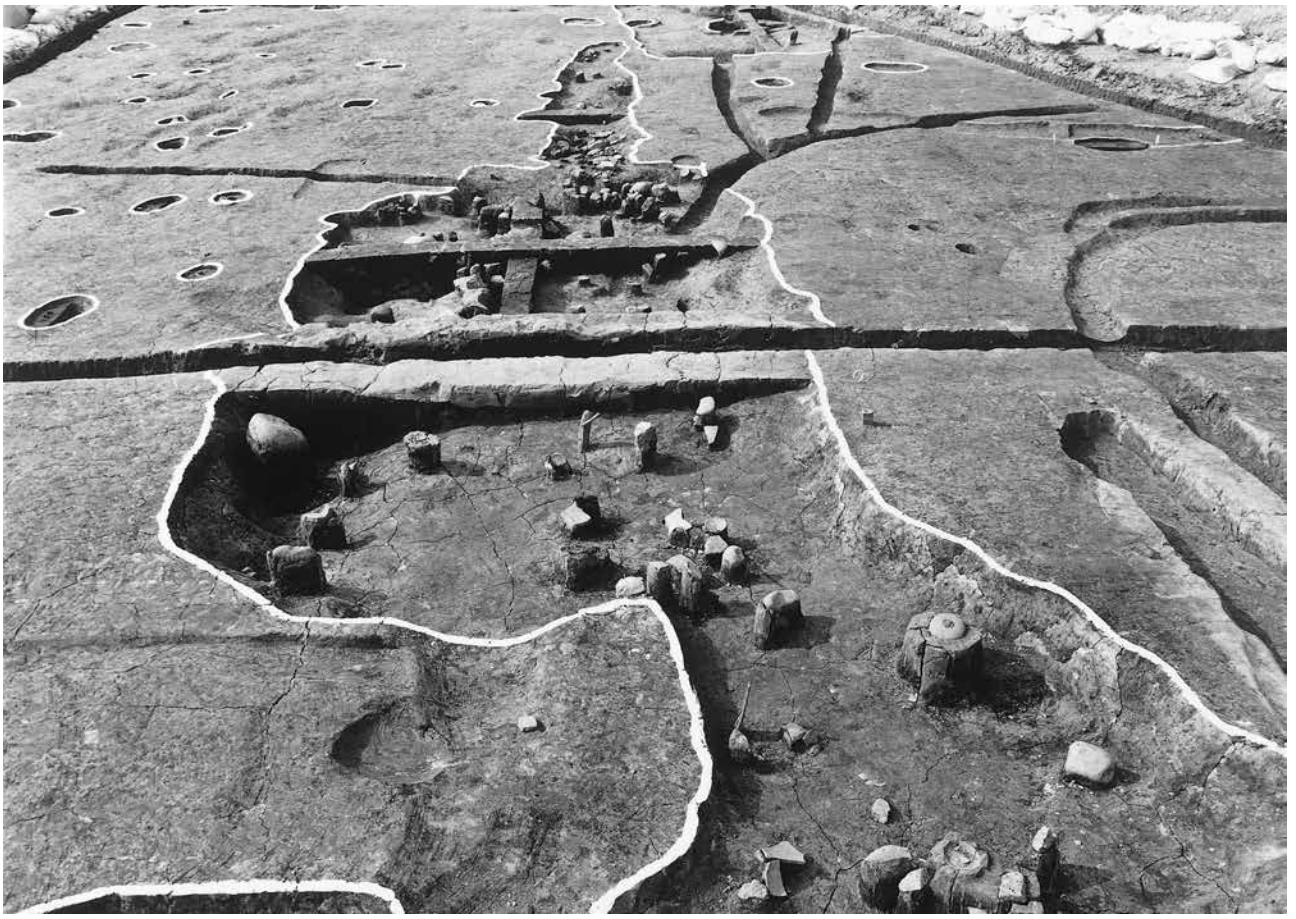
SE604完掘



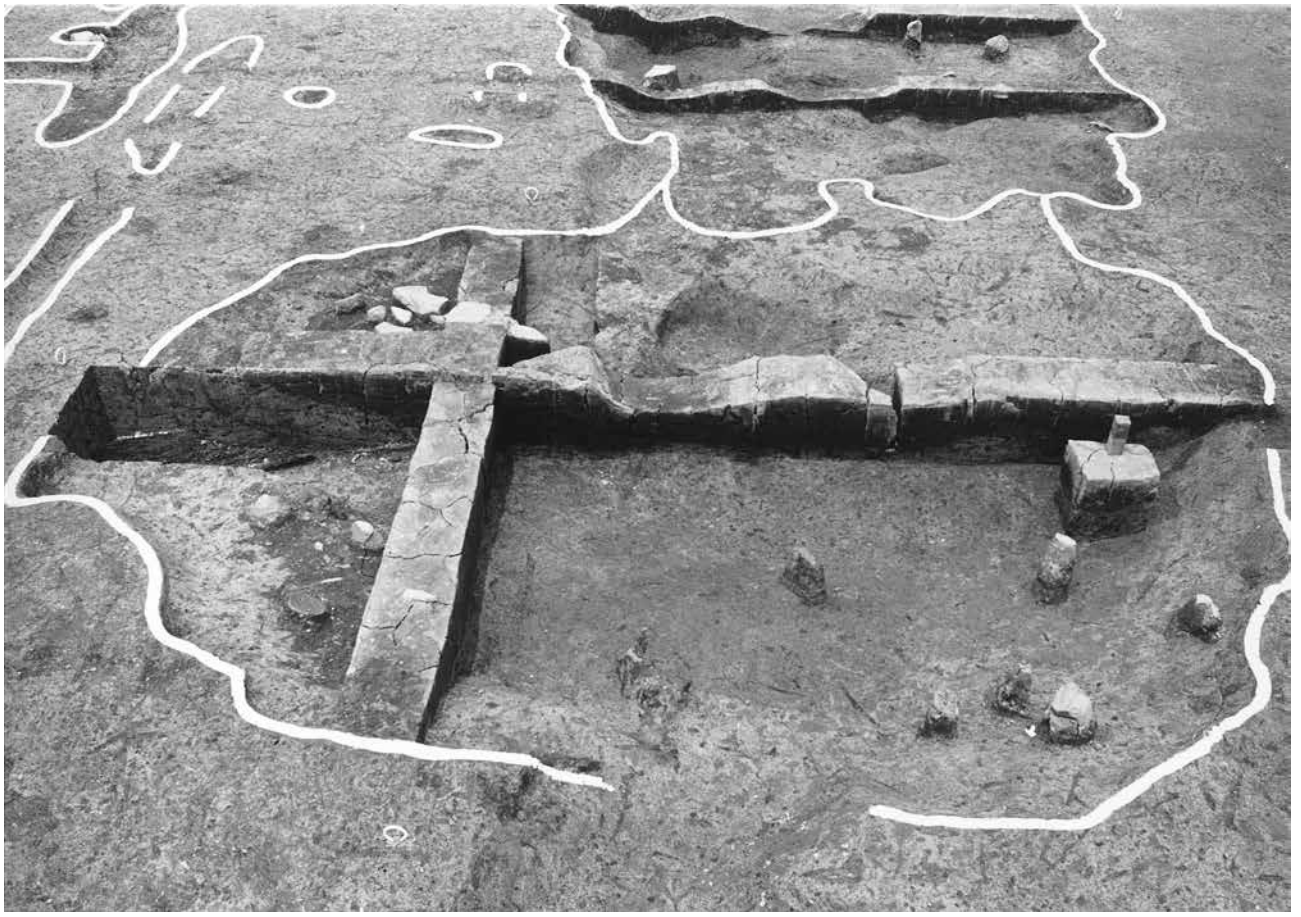
SE607・608完掘

SK603～606検出状況

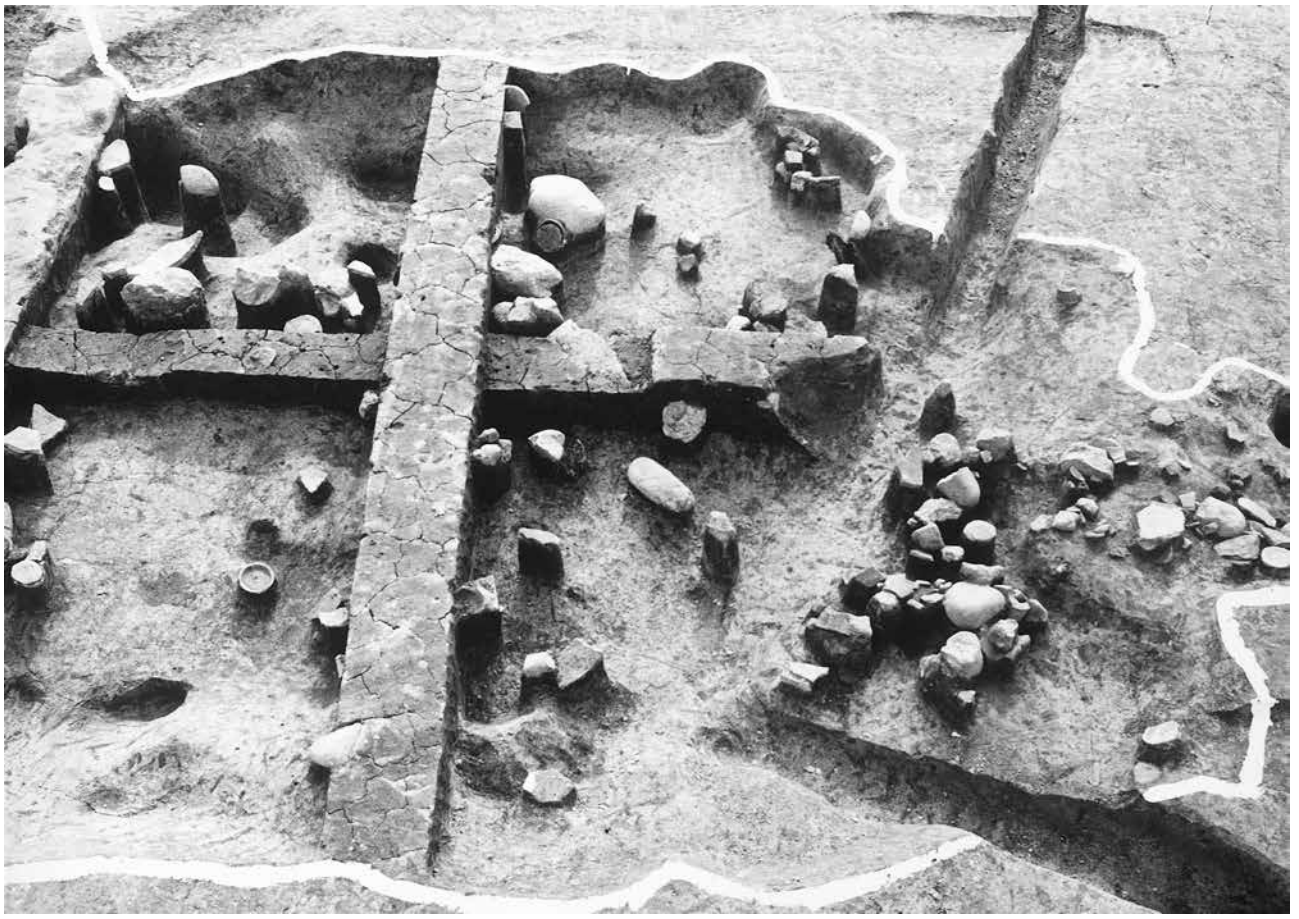
同完掘状況



SK604～606遺物出土状況

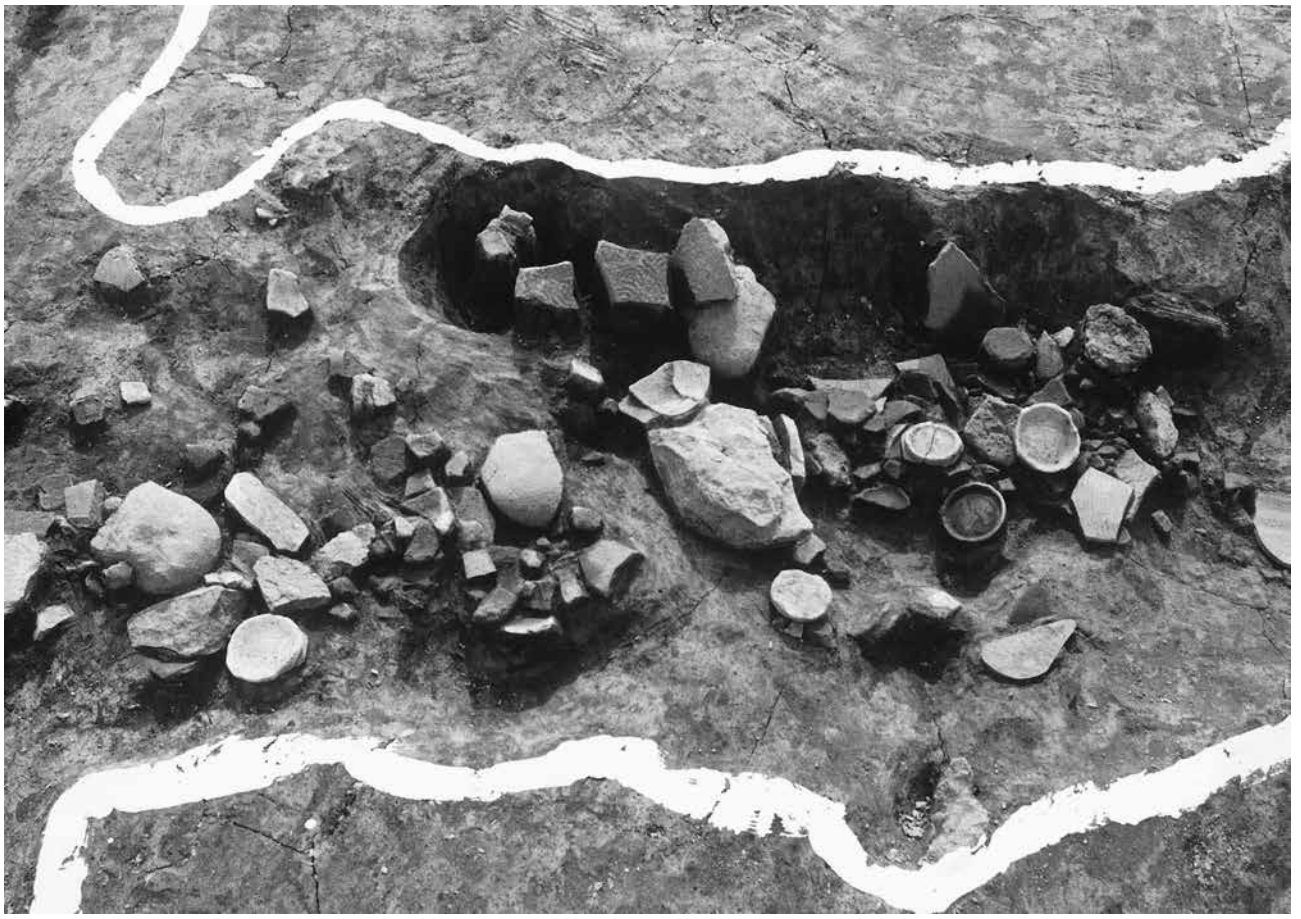


SK603遺物出土状況



SK606遺物出土状況

同上

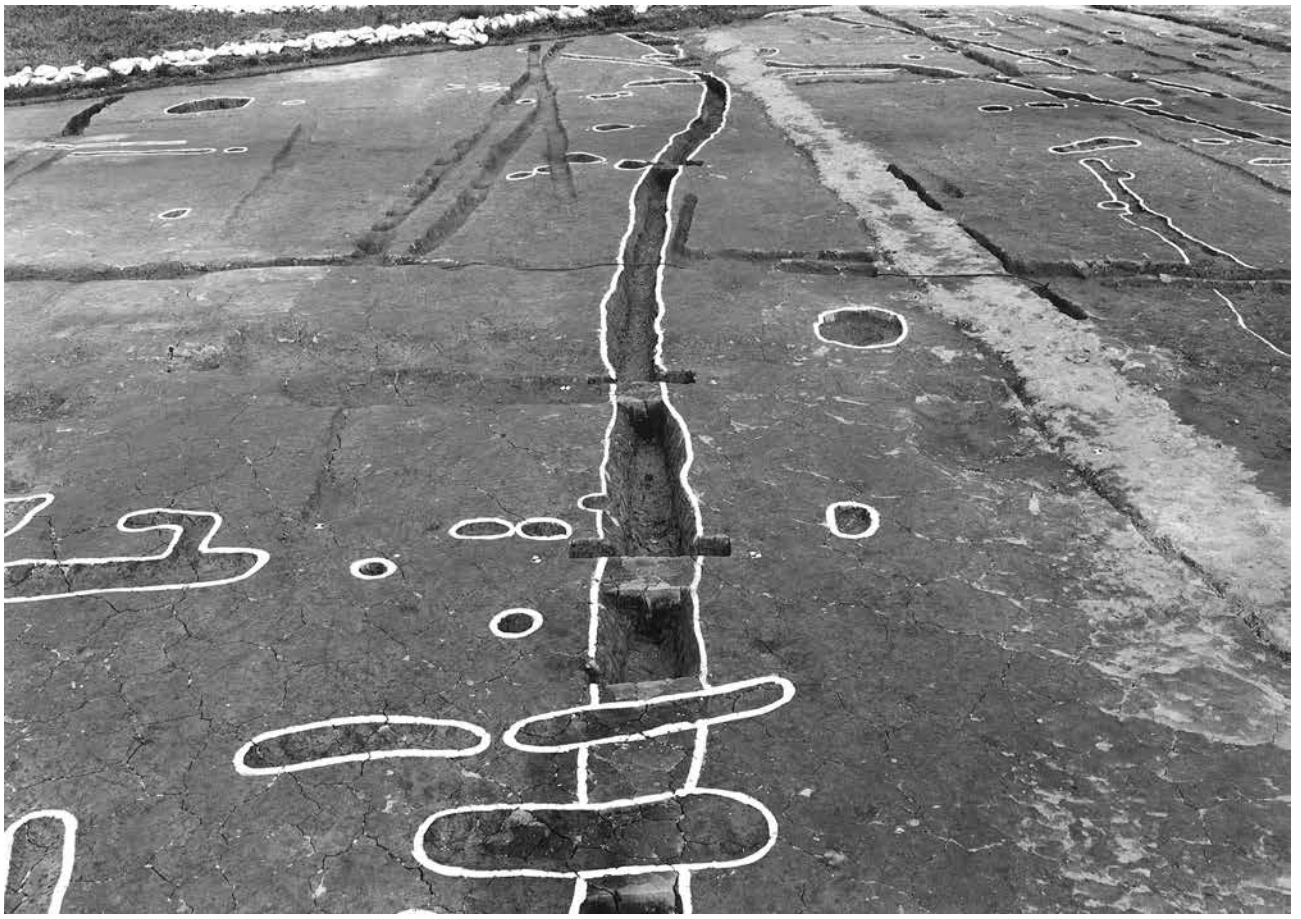


SD638遺物出土状況

同上

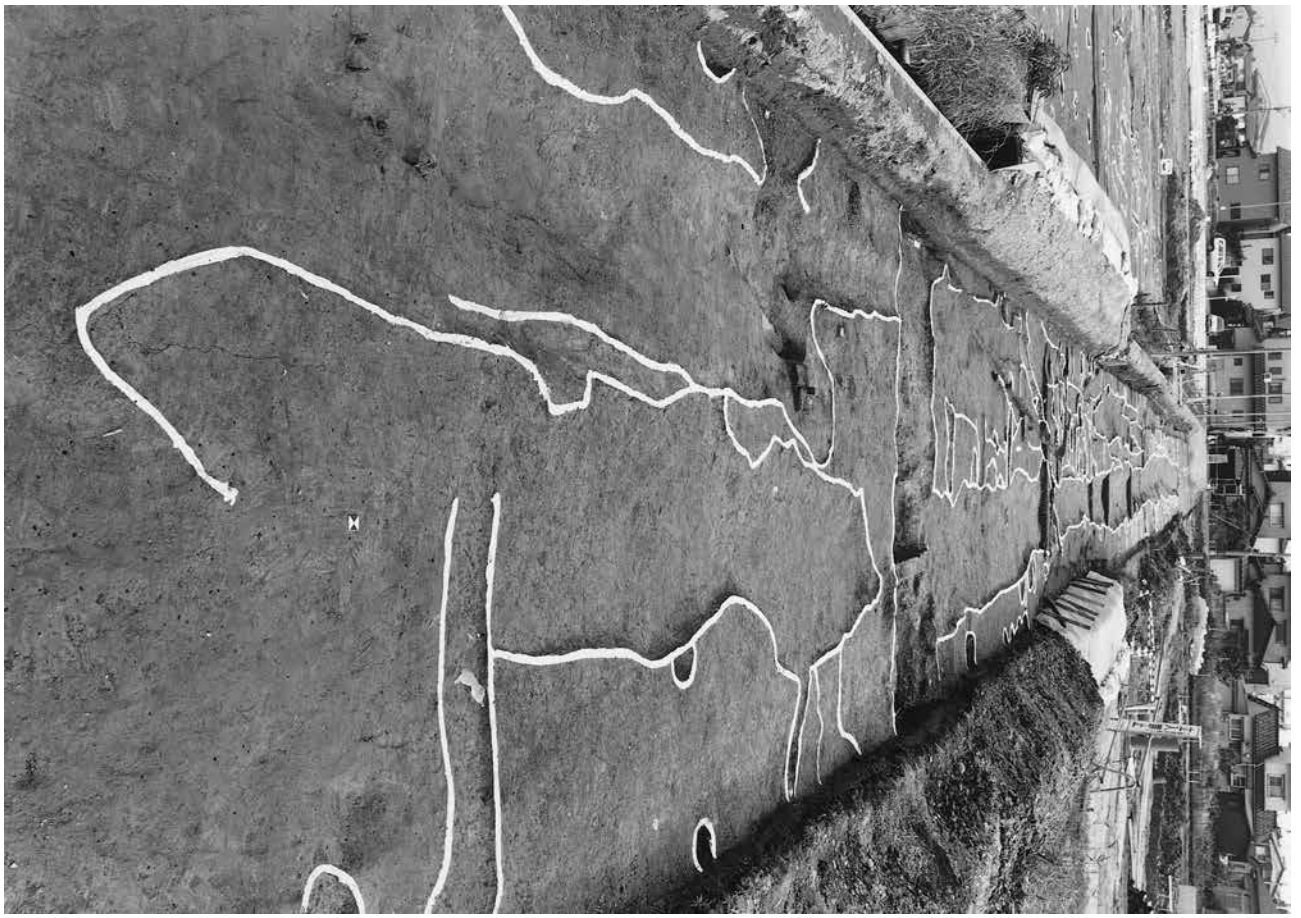
A 5 区全景

SB601

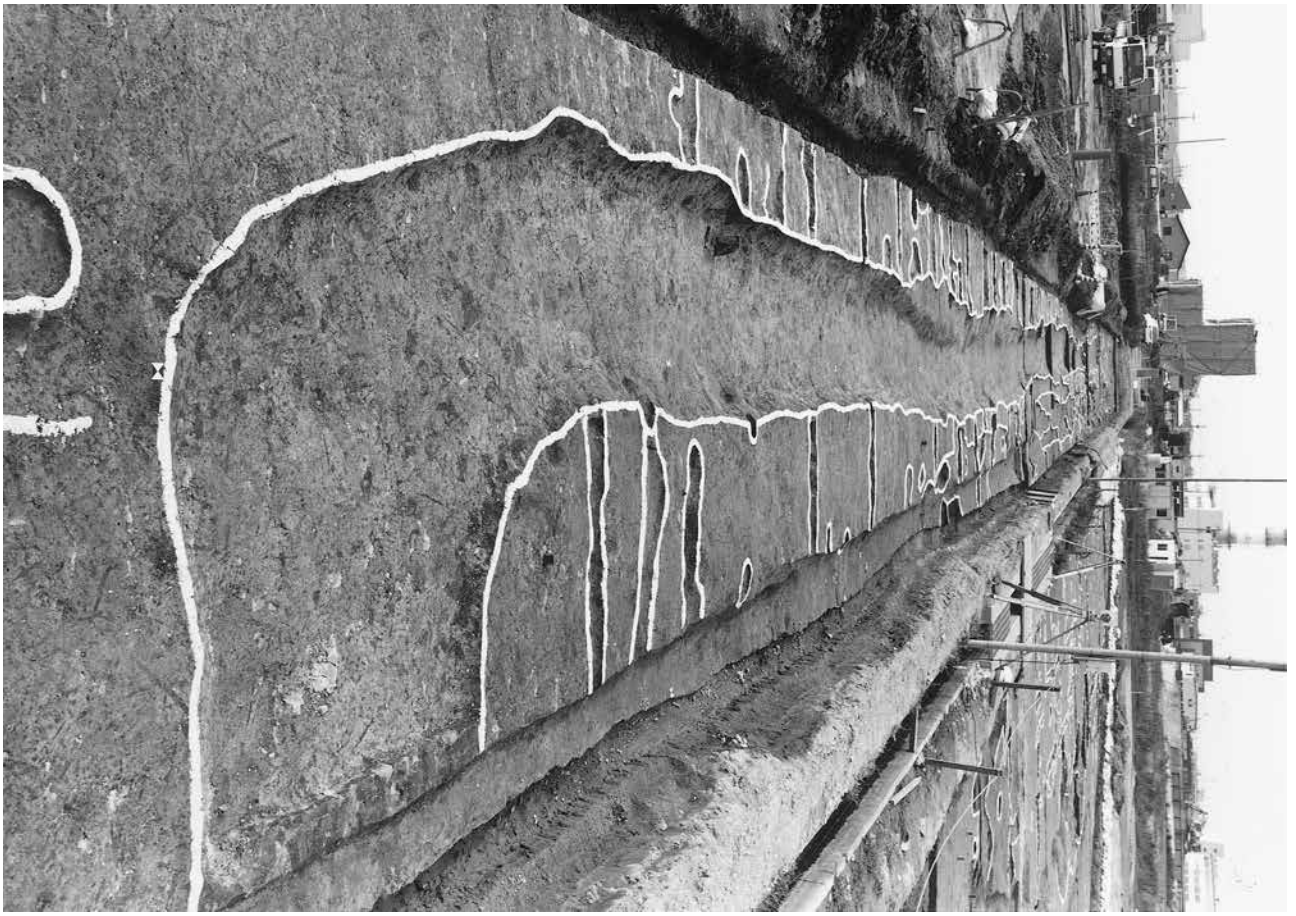


SD639

SD613・614



SD627・628（北から）

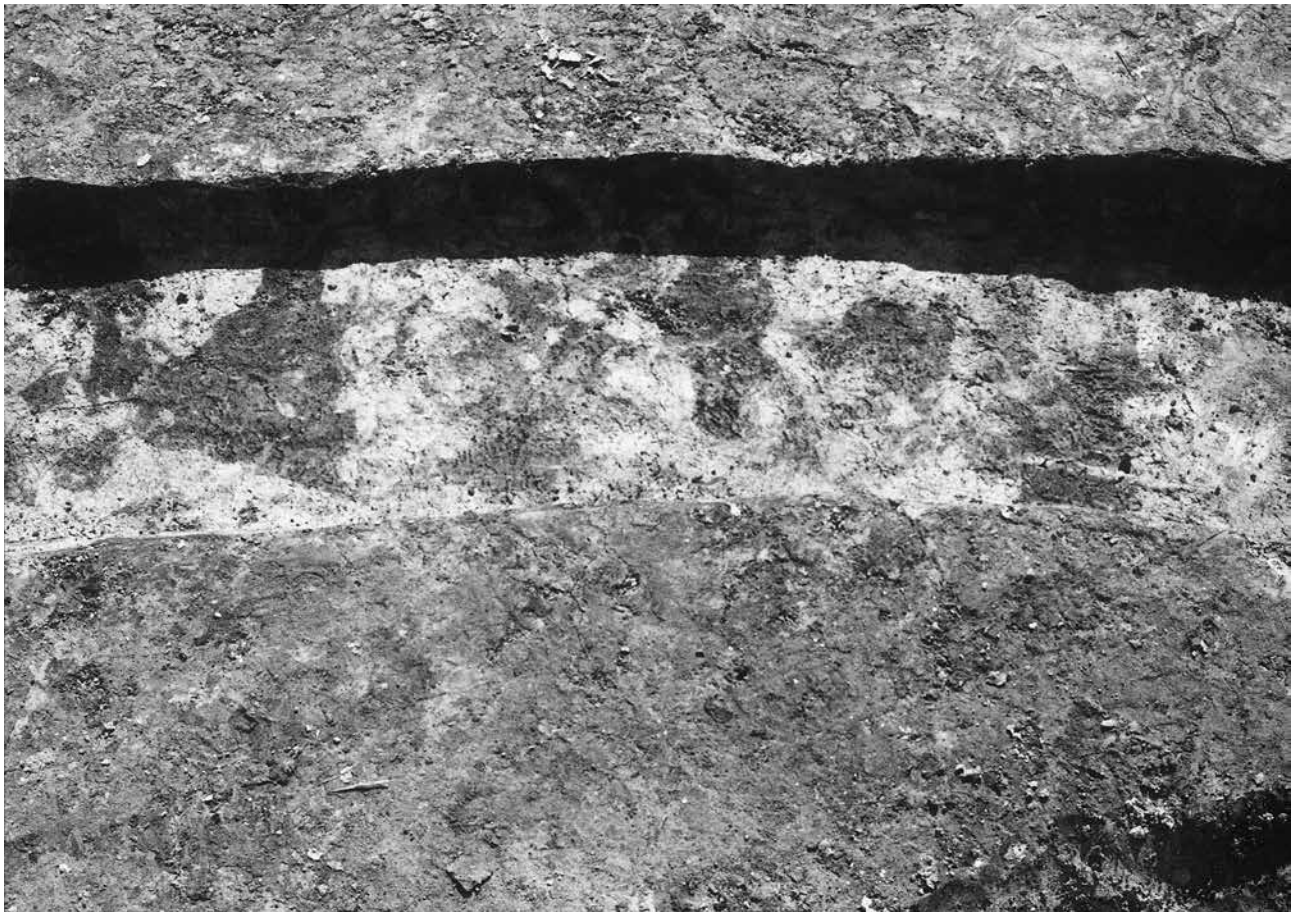


SD627・628（南から）

A 3 区畝溝群

A 3 区畝溝群

同区畝溝群



溝拡大

4

5

6

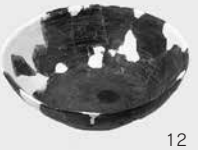
7

8

9

10

11


12

14

16

17

18

19

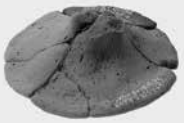
21

22

23

25

出土遺物(1)


30

31

33

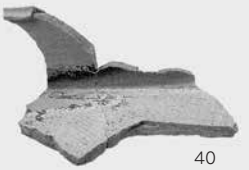
34

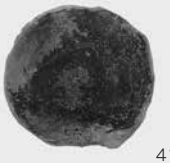
35

36

37

38


40


41

42

44

45

47

48

49

50

51

出土遺物(2)

53

56

57

60

61

62

63

66

68

69

70

71

72

73

74

75

79

80

出土遺物(3)

81

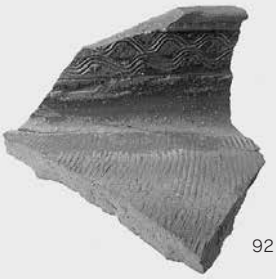
83

85

86

90

91


92

93-1

100

101

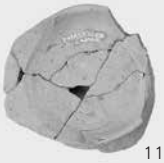
102

104

106

108

109


110

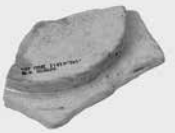
111

113

出土遺物(4)

118

119


120

121

122

123

125

126

127

129

130-1

130-2

130-3

177

178

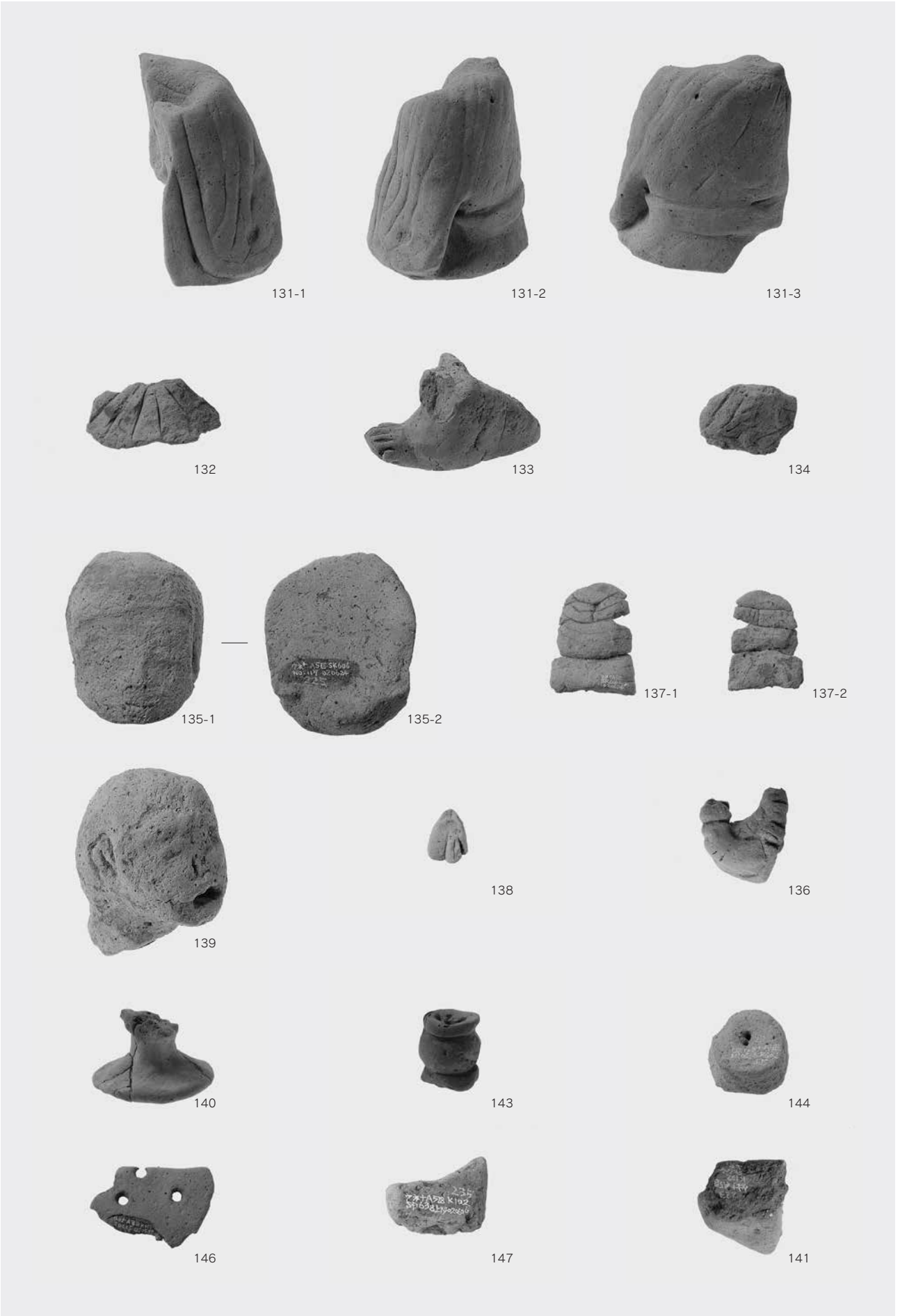
174

175

179

180

出土遺物(5)

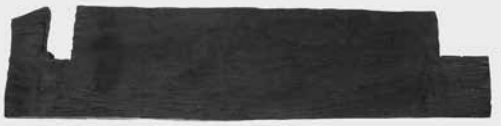

131-1
131-2
131-3
132
133
134
135-1
135-2
137-1
137-2
139
138
136
140
143
144
146
147
141

出土遺物(6)

169

170

171


172

183

188

198

184

185

199

186

197

187

189

176

出土遺物(7)

報 告 書 抄 録

ふりがな	かなざわしうねだひがしいせきぐん　に
書名	金沢市畝田東遺跡群Ⅱ
副書名	金沢西部第二土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	6
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	伊藤雅文・安　英樹・白田義彦・和田龍介
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター
所在地	〒920－1336　石川県金沢市中戸町18番地１　TEL（076）229－4477
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター
発行年月日	2005年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯（新）	東経（新）	調査期間	調査面積	調査原因
畝田ナベタ遺跡（うねだ） 畝田D遺跡（うねだ）	石川県金沢市（いしかわけんかなざわし） 畝田東、藤江北（ふじえ） 地内	17201	1267	36度 35分 48秒	136度 36分 58秒	19991214 ～ 20031215	43,406㎡	金沢西部 第二土地 区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
畝田ナベタ遺跡 畝田D遺跡	官衙、 集落	平安	掘立柱建物 廃棄土坑 井戸 畝溝状遺構	須恵器、土師器、施釉陶器、黒色土器、土製仏像、土製仏教関係遺物	

要約	遺跡の中心時期である９世紀の遺構を主に確認したが、掘立柱建物は11世紀ごろの建築と考えられ、本遺跡の中心部建物群とは性格を異にし、農村的景観である。９世紀代は工房域の可能性があり、条里に則った区画溝の中に作られている。具体的な遺構は検出していないが、鍛冶・鋳造関係遺物を廃棄した土坑があり、そこから土製仏像などの仏教関係遺物が出土した。

金沢市　畝田東遺跡群Ⅱ

発行日　平成17（2005）年３月31日
発行者　石川県教育委員会
〒920-8575　石川県金沢市鞍月１丁目１番地
電話　076－225－1842（文化財課）

財団法人石川県埋蔵文化財センター
〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地１
電話　076－229－4477
E-mail　mail@ishikawa-maibun.or.jp
印刷　株式会社　橋本確文堂